彦根市埋蔵文化財調査報告書第 82 集

福満遺跡

第 25 次発掘調査報告書

― 宅地造成工事に伴う発掘調査 ―

令和２年３月

彦根市

彦根市埋蔵文化財調査報告書第 82 集

福満遺跡

第 25 次発掘調査報告書

― 宅地造成工事に伴う発掘調査 ―

令和２年３月

彦根市

例　言

1．本書は彦根市に西今町に所在する福満遺跡の第 25 次発掘調査報告書である。

2．調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等については以下のとおりである。

現地調査　　所在地：彦根市西今町字小橋ヶ板 303 番　外 4 筆
　　調査原因：宅地造成工事
　　期間：平成 30 年 5 月 7 日～平成 30 年 10 月 31 日
整理調査　　期間：令和元年 7 月 12 日～令和 2 年 3 月 31 日

3．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（平成 31 年 4 月 1 日～彦根市市長直轄組織文化財課）が実施した。各年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成 30 年度】（現地調査）

教育長：善住喜太郎
文化財部長：高田秀樹
文化財部次長：広瀬清隆
文化財課長：松宮智之
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫
課長補佐兼管理係長：北坂崇
副主幹兼史跡整備係長：北川恭子
文化財係長：三尾次郎
主査：深谷覚
主査：林昭男
主査：戸塚洋輔
主査：田中良輔
主査：小林圭一
副主査：渡邊輝（～平成 30 年 11 月）
主任：斎藤一真
主任：下高大輔（平成 30 年 4 月 1 日～熊本市経済観光局派遣
主事：秋篠功二（平成 29 年 4 月 1 日～文化庁派遣）
技師：船山友祐
主事：西坊仁志（平成 30 年 12 月～）
技師：内藤京
臨時職員：沖田陽一
臨時職員：樋口杏奈
臨時職員：飯島由紀子

【令和元年度】（整理調査）

市長：大久保　貴
参事：山本茂春
副参事：広瀬清隆
文化財課長：松宮智之
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫
課長補佐兼管理係長：牧田歩
主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘
文化財係長：三尾次郎
主査：深谷覚
主査：林昭男
主査：戸塚洋輔
主査：田中良輔
主査：多賀公一
主任：斎藤一真
主事：西坊仁志
主任：下高大輔（平成 30 年 4 月 1 日～熊本市経済観光局派遣）
技師：船山友祐
主事：秋篠功二（平成 29 年 4 月 1 日～文化庁派遣）
技師：内藤京
臨時職員：沖田陽一
臨時職員：樋口杏奈
臨時職員：飯島由紀子

4．現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：青山康男　伊東幸一　北村隆行　北村富男　小森敏夫　佐々木公子　佐藤龍成　里村晃一
　　高橋陸夫　忠田俊男　寺村芳和　中村義浩　西村豊和　林竹夫　久木正弘　吉田輝一　渡邊徹
　　久保亮二（調査補助員）
整理調査：久保亮二　小野直子（以上、整理補助員）

5．本書で使用した遺構実測図は、林、内藤京、樋口杏奈、久保亮二が作成し、遺物実測図は、林、沖田陽一、樋口杏奈が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った

6．現地調査及び本書の作成にあたり、以下の方々から助言・協力を得た。
伊庭 功、北村圭弘、中川治美、福西貴彦、宮崎幹也

7．本書の執筆及び編集は、林が行った。

8．本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

9．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。

10．本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器・陶器 □　　須恵器 ■

目　次

例言

第１章　序　論
第１節　調査に至る経緯と経過 ―― 1
(1) 調査に至る経緯 ―― 1
(2) 発掘調査の経過と方法 ―― 2
(3) 整理調査の経過と方法 ―― 2
第２節　地理的・歴史的環境 ―― 3
(1) 地理的環境 ―― 3
(2) 歴史的環境 ―― 3
(3) 福満遺跡の概要と既往調査 ―― 10

第２章　発掘調査の成果
第１節　基本土層 ―― 14
第２節　弥生時代中期 ―― 14
(1) 概　要 ―― 14
(2) 方形周溝墓 ―― 14
(3)　溝 ―― 44
(4) 土　坑 ―― 47
(5) 小　結 ―― 52
第３節　奈良時代～平安時代前期 ―― 53
(1) 概　要 ―― 53
(2) 掘立柱建物 ―― 53
(3)　柵 ―― 54
(4)　溝 ―― 58
(5) 土　坑 ―― 58
(6) 井　戸 ―― 63
(7) 小　結 ―― 65
第４節　中世以降 ―― 66
(1) 概　要 ―― 66
(2)　溝 ―― 66
(3) 井　戸 ―― 66
(4) 小　結 ―― 66

第３章　総括
第１節　福満遺跡における方形周溝墓の群構成とその変遷について ―― 68
(1) はじめに ―― 68
(2) 墓域のひろがり ―― 68
(3) 平面形態・規模 ―― 69
(4) 群構成とその変遷 ―― 70
(5) おわりに ―― 74

図版
報告書抄録

第１章　序　論

第１節　調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯（図４～６）

本書は、民間開発により実施した福満遺跡第 25 次（彦根市西今町字小橋ヶ板 303 番　外 4 筆）発掘調査の成果をまとめたものである。

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。犬上川下流域右岸、同河川が形成する扇状地下方の湧水帯の標高約 95 mに位置する。当該遺跡の東方約 400 mの位置に JR 琵琶湖線が南北に縦貫しており、南彦根駅へのアクセスにも適した立地である。このような利便性の高い地域ゆえに、周辺地域は商業施設や宅地造成、集合住宅などの開発が進んでおり、市内でも市街地化が進んでいる地域の一つである。今回の調査地点に関しては、開発計画以前は耕作地としての土地利用がなされていた場所である。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、民間開発事業者が計画した宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第 93 条の届出（平成 30 年 1 月 10 日付け）及び調査依頼（平成 30 年 1 月 10 日付け）に基づくものである。届出の提出に伴い、開発予定地における遺構・遺物の有無を確認するため、平成 30 年 2 月 26 日に試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定面積 1,957㎡を対象として試掘トレンチを 8 箇所 (2 m ×2 m) 設定してバックホー

図１　福満遺跡の位置図

にて掘削、細部は人力による掘削・検出作業を行い、遺構・遺物の確認を行った。

試掘調査の結果、基本層序として１層：灰色粘質土、２層：黄褐色粘質土の２層を確認した。1 層は近現代の耕作土で、耕作土直下の２層上面で遺構を確認することができた。その範囲だが、開発予定地全域の試掘トレンチで遺構・遺物が確認されたため、開発業者と対応に関する協議を行った。協議の結果、現地表面から遺構面まで非常に浅く、開発予定地全域で遺構面までの保護層を確保することができなく、計画変更も困難であるため、宅地部分・道路部分含む開発予定地全域について今回の記録保存調査の対象範囲とした。対象面積は約 1,957㎡になる。現地の発掘調査は平成 30 年 5 月 7 日に着手し、平成 30 年 10 月 31 日まで実施した。整理調査に関しては、令和元年 7 月 12 日～令和 2 年 3 月 31 日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

(2) 発掘調査の経過と方法

現地の発掘調査実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（平成 30 年 5 月 2 日付け）を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。

調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。調査は廃土置き場の問題もあるため、概ね半分ずつ進めた。先行して南東地区の調査を進め、終了後反転して、北西地区の調査を実施した。グリッド設定だが、世界測地系座標に準じて 5 m ×5 m毎に杭を配置し、グリッド設定を行った。グリッド番号は東端から西側に向かって数字を付け、北端から南側に向かってアルファベットを付けた。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、北東隅にあるグリッド杭の番号に代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100 の遺構分布図と 1/20 の遺構平面図を基本とし、状況に応じて 1/10 の遺物出土状況図等を作成したほか、1/20 の調査区および遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構番号は、各種の遺構を通じて一連の番号を与えた。ただし、掘立柱建物と柵は複数の柱穴で構成される遺構であるため、建物と柵ごとに 1 から通し番号を新たに付与した。現地の発掘調査は平成 30 年 5 月 7 日に着手し、平成 30 年 10 月 31 日まで実施した。

(3) 整理調査の経過と方法

整理調査の実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和元年 7 月 12 日付け）を取り交わし、契約締結後に整理調査を開始した。

遺構図は、原図作成ののちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接合・選別・実測、そして原図作成ののちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、令和元年 7 月 12 日着手、令和 2 年 3 月 31 日まで実施した。これ

ら一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

第２節　地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境（図１・2）

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に位置する縄文時代前期から中世の遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ犬上川の下流右岸に位置する。犬上川は滋賀県東部を流れる流域面積 105.3 ㎢、流路長 27.3㎞を測る一級河川である。源を鈴鹿山中の鞍掛峠と角井峠に発し、湖東平野を潤して彦根市中央部で琵琶湖にそそぐ。標高 130 m から 100m にかけて多賀町楢崎付近を扇頂とする扇状地を形成しており、降水量の少ないときには、扇頂である標高 130 mのあたりから標高 100m のあたりまでの中流域で伏流し、水無川となる。また、標高 100m から 90 mにかけて再び水が湧出しているが、必ずしも河道に沿って元来の河川水が湧き出しているのではない。調査地は、犬上川扇状地の外側にあたり、標高約 94 mの湧水帯に位置し、豊かな水に恵まれた位置である。調査地の南東約 1㎞の標高 97 m付近にある扇状地の扇端には伏流水が自噴した湧水池がみられ、南西約 0.4㎞の西今町旧集落の中央にあたる朝鮮人街道の交差点南角に『十王の水』と呼ばれる湧水池がみられる。これらの湧水池からでる犬上川の伏流水が下流の用水となっている。犬上川は扇状地上で度々流路を変えていたとみられ、自然堤防あるいは氾濫平野に位置する福満遺跡でも旧河道が過去の調査で確認されている。

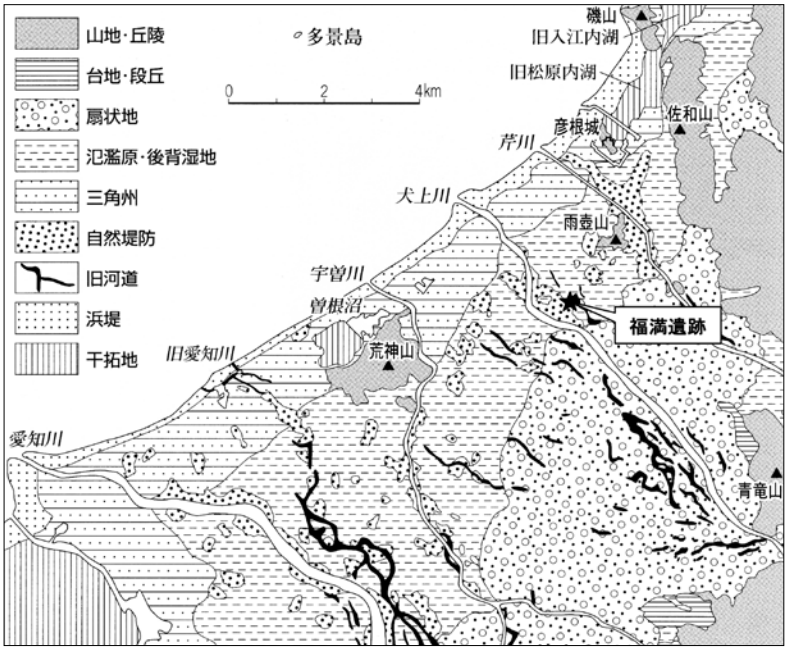


図２　彦根市の自然地形（『新修彦根市史』第１巻より）

(2) 歴史的環境（図３・表１）

縄文時代　屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺

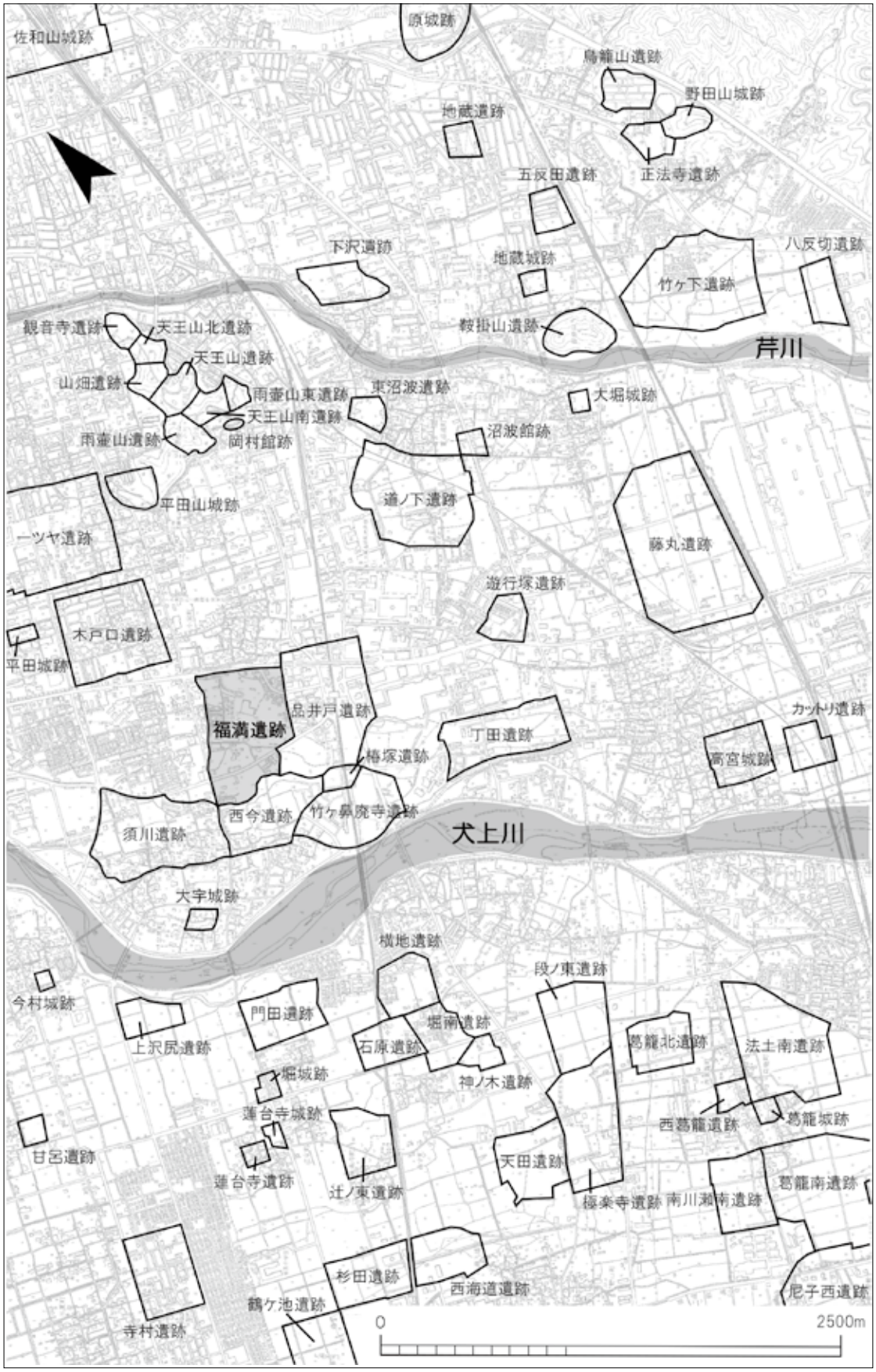


図３　福満遺跡と周辺の遺跡分布図

写真１　福満遺跡周辺の航空写真（平成 21 年 12 月 1･2 日撮影）

表１　福満遺跡周辺の主要遺跡一覧

市番号	県番号 202-	遺跡の名称	所在地		種類	時代	立地	現状	備考
11	090	佐和山城跡	彦根市	佐和山町	城館跡	中世	山頂・山麓・平地	山林・水田	石垣・曲輪・土塁
31	031	観音寺遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山頂	山林	
32	032	天王山北遺跡	彦根市	芹川町	散布地	古墳～平安	山頂	山林	
33	010	山畑遺跡	彦根市	和田町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
34	033	天王山遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山腹	山林	
35	034	天王山南遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山麓	山林	古墳?
36	038	雨壺山遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
37	039	雨壺山東遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	中世	山麓	山林	古墳?
42	007	一ツヤ遺跡	彦根市	平田町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
43	006	木戸口遺跡	彦根市	平田町	散布地	縄文～中世	平地	水田・宅地	
44	037	山之脇遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
45	044	下沢遺跡	彦根市	西沼波町	散布地	古墳	平地	水田・宅地	
46	046	地蔵遺跡	彦根市	地蔵町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	円墳
47	047	五反田遺跡	彦根市	正法寺町	散布地	古墳	平地	水田	
48	048	鳥籠山遺跡	彦根市	正法寺町	窯跡	奈良	山麓	山林・水田・宅地	瓦窯跡
49	049	正法寺遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	平地	水田	
51	018	須川遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
52	015	福満遺跡	彦根市	西今町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	竪穴建物・土坑・溝・古墳
53	016	西今遺跡	彦根市	西今町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	旧西今東遺跡
54	012	品井戸遺跡	彦根市	小泉町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	掘立柱建物・石帯
55	013	椿塚遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	古墳か?
56	014	竹ヶ鼻廃寺遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	寺院・集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
57	043	道ノ下遺跡	彦根市	東沼波町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地・工場地	
58	139	丁田遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	埋設土器・翡翠大珠
59	042	東沼波遺跡	彦根市	東沼波町	古墳	古墳	平地	畑地	
60	138	遊行塚遺跡	彦根市	高宮町	散布地	奈良	平地	宅地	高宮廃寺跡?
61	052	竹ヶ下遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
62	041	藤丸遺跡	彦根市	大堀町・高宮町	集落跡	古墳～中世	平地	水田・宅地	
63	053	八反切遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
64	140	高宮遺跡	彦根市	高宮町	城館跡	中世	平地	宅地・学校用地	
65	141	カットリ遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～平安	平地	水田	（多賀町）
69	055	甘呂遺跡	彦根市	甘呂町	寺院跡	古墳～中世	平地	水田	甘露寺跡伝承
70	019	上沢尻遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
71	129	門田遺跡	彦根市	堀町	散布地	古墳～奈良	平地	水田	
72	127	蓮台寺遺跡	彦根市	蓮台寺町	城館跡	中世	平地	畑地・宅地	
73	063	寺村遺跡	彦根市	日夏町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
76	130	横地遺跡	彦根市	堀町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	円墳
77	124	石原遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
78	125	辻ノ東遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～奈良	平地	水田・畑地・校地	
79	123	神ノ木遺跡	彦根市	金剛寺町	集落跡	縄文～奈良	平地	水田・社地	円墳
81	117	鶴ヶ池遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・道路	
82	118	杉田遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・工場用地	
83	119	西海道遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地	
84	120	天田遺跡	彦根市	極楽寺町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・宅地	
85	121	極楽寺遺跡	彦根市	極楽寺町	集落跡	古墳～奈良	平地	水田・宅地	
86	122	段ノ東遺跡	彦根市	森堂町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	
87	110	葛籠北遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳群・集落跡	古墳～中世	平地	水田・畑地・校地	円墳
88	111	西葛籠遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳	古墳	平地	宅地	円墳
140	131	堀南遺跡	彦根市	堀町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
141	109	法士南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
142	115	南川瀬南遺跡	彦根市	川瀬馬場町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	
143	108	葛籠南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
146	197	尼子西遺跡	彦根市	出町	集落跡	奈良・平安	平地	宅地	
153	008	平田城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地	
154	009	平田山城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地・社地	
155	011	小泉館跡	彦根市	小泉町	城館跡	中世	平地	宅地	
156	021	大宇城跡	彦根市	宇尾町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
159	035	沼波館跡	彦根市	東沼波町	城館跡	中世	平地	水田	
160	036	岡村館跡	彦根市	岡町	城館跡	中世	平地	山林・宅地	
161	040	大堀城跡	彦根市	大堀町	城館跡	中世	平地	水田	
162	045	地蔵城跡	彦根市	地蔵町	城館跡	中世	平地	水田	
163	051	野田山城跡	彦根市	野田山町	城館跡	中世	平地	山林	瓦窯跡
165	056	今村城跡	彦根市	開出今町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
174	094	原城跡	彦根市	原町	城館跡	中世	山頂	その他	
180	107	葛籠城跡	彦根市	葛籠町	城館跡	中世	平地	宅地	
182	126	蓮台寺城跡	彦根市	蓮台寺町	城館跡	中世	平地	宅地	
183	128	堀城跡	彦根市	堀町	城館跡	中世	平地	水田	
203	200	鞍掛山遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	山頂	山林	埴輪片表採の報告あり

遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代　前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曽川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曽川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。また、愛知川流域の稲部遺跡・稲部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

古墳時代　古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。南部では、愛知川と宇曽川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稲部遺跡や長野遺跡（愛荘町）でも同時期の集落が形成される。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なまず遺跡（愛荘町）で６世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。

白鳳～奈良時代　７世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が６箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ケ鼻廃寺遺跡の南東 2㎞付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在の JR 南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院

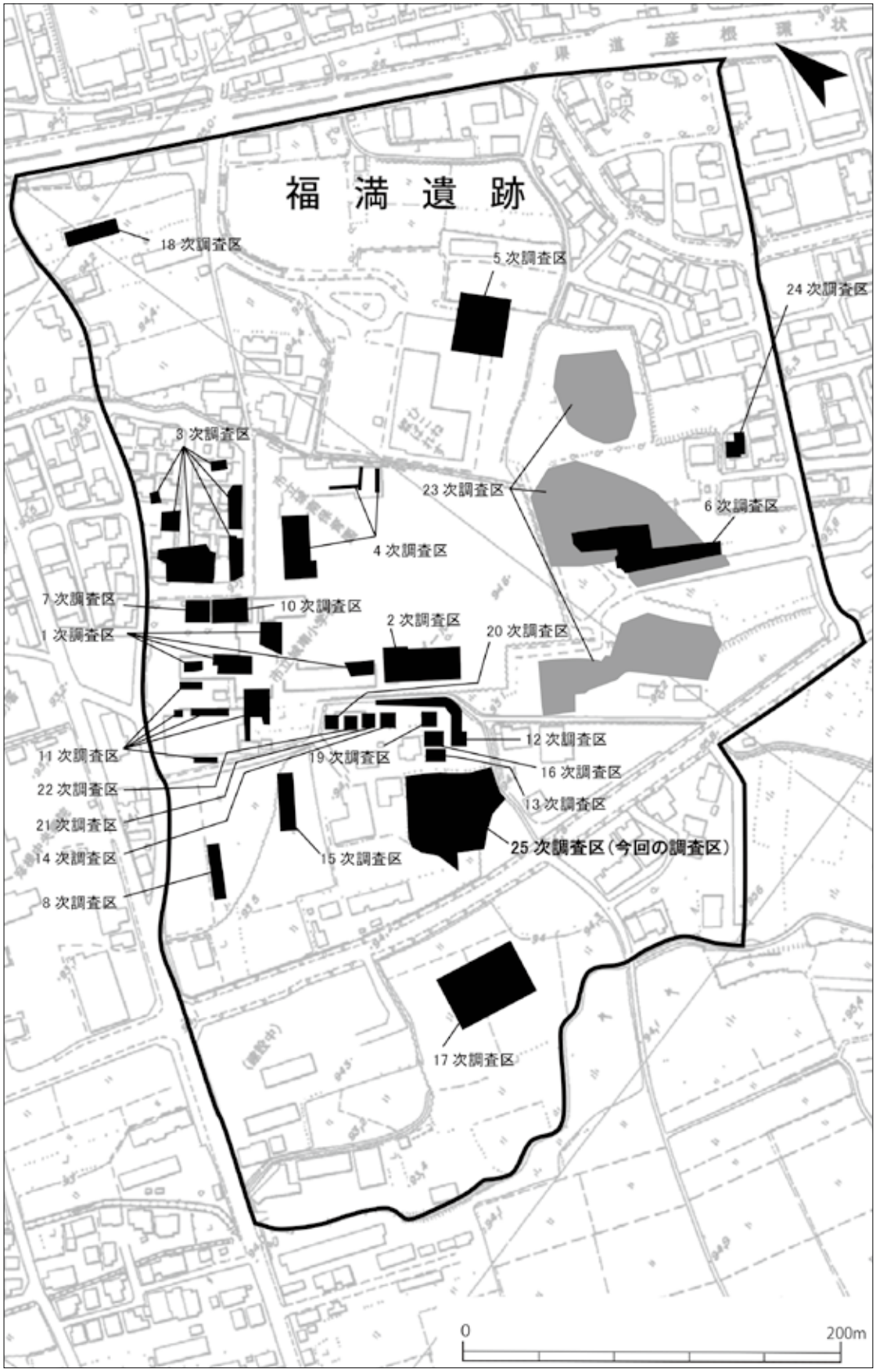


図４　福満遺跡の調査位置図

表２　福満遺跡の発掘調査一覧

次数	調査地/調査原因	現地調査期間	調査主体（調査機関）	主な時代	主な検出遺構・遺物	文献
1	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	1981年4月～ 1981年7月	彦根市 教育委員会	縄文時代前期末・晩期後半 古墳時代後期、平安時代	河道、竪穴建物、溝、土坑、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、石器、石製品 子持勾玉	1・2・3
2	西今町380番地 市立城南小学校プール改築工事	1982年10月～ 1982年12月	彦根市 教育委員会	縄文時代後期末～晩期前半・晩期後半 奈良～平安時代	河道、掘立柱建物、小穴 縄文土器、石器・石製品・土師器、須恵器、 灰釉陶器	1・2
3	西今町字久保田386 宅地造成工事	1982年12月～ 1983年3月	彦根市 教育委員会	縄文時代中期末～後期前葉	落ち込み状遺構 縄文土器	1・2
4	西今町285-1 城南保育園改築工事	1986年6月～ 1986年7月	彦根市 教育委員会	弥生時代後期後半～古墳時代初頭 古墳時代後期、平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、小穴 土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、山茶碗	4
5	小泉町字福満640ほか 産業振興センター建設工事	1988年7月～ 1988年9月	彦根市 教育委員会	弥生時代後期～古墳時代初頭	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、小穴、 方形周溝墓 土師器、須恵器	—
6	小泉町字福満640ほか 産業振興センター建設工事	1989年12月～ 1990年3月	彦根市 教育委員会	奈良時代	小穴 土師器	—
7	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	1990年6月～ 1990年6月	彦根市 教育委員会	古墳時代前期	掘立柱建物、溝、土坑 土師器	5
8	西今町字九文目370-1 集合住宅建設工事	1993年7月～ 1993年8月	彦根市 教育委員会	弥生時代後期～古墳時代初頭 古墳時代後期	掘立柱建物、溝、土坑、小穴 土師器、須恵器	—
10	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	2005年11月～ 2005年11月	彦根市 教育委員会	古墳時代初頭・後期	柵、溝、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、土製品、瓦	6
11	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	2006年12月～ 2007年3月 2007年5月～ 2007年6月	彦根市 教育委員会	古墳時代初頭・後期	溝、土坑、小穴 土師器、須恵器、緑釉陶器、土製品	6
12	西今町字小橋ヶ板298-1, 298-2,29 宅地造成工事造成工事	2013年6月～ 2013年7月	彦根市 教育委員会	古墳時代後期	土坑墓、溝、小穴 縄文土器、須恵器、石器	7
13	西今町字小板ヶ橋298番1 個人住宅建設工事	2013年11月～ 2013年12月	彦根市 教育委員会	古墳時代、 奈良～平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、小穴、 方形周溝墓 土師器、須恵器、石器、銅尺	8
14	西今町字小橋ヶ板298番13 個人住宅建設工事	2014年4月～ 2014年5月	彦根市 教育委員会	奈良時代か	柵、小穴 土師器	9
15	西今町字九文目371-6ほか 集合住宅建設工事	2014年6月～ 2014年8月	彦根市 教育委員会	古墳時代、奈良時代	河道、古墳の周溝 土師器、須恵器、韓式土器、石器	10
16	西今町字小橋ヶ板299番15 個人住宅建設工事	2015年1月～ 2015年2月	彦根市 教育委員会	奈良時代	溝、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、石器	9
17	西今町字小橋ヶ板306-1ほか 店舗建設工事	2015年10月～ 2015年11月	彦根市 教育委員会	奈良時代	掘立柱建物、柵、溝、小穴 土師器、須恵器	11
18	小泉町字天王679番 集合住宅建設工事	2015年7月～ 2015年11月	彦根市 教育委員会	弥生時代終末～古墳時代初頭 古墳時代中期後葉～末頃	竪穴建物、小穴、方形周溝墓、古墳の周濠 土師器、須恵器、埴輪	12
19	西今町字小橋ヶ板298番12ほか 個人住宅建設工事	2015年12月～ 2016年1月	彦根市 教育委員会	弥生時代終末、奈良時代	小穴 土師器	—
20	西今町298-2 個人住宅建設工事	2016年10月～ 2016年11月	彦根市 教育委員会	古墳時代後期	竪穴建物、小穴 土師器、須恵器	—
21	西今町298番2ほか 個人住宅建設工事	2016年10月	彦根市 教育委員会	古墳時代後期	小穴 土師器、須恵器	—
22	西今町字小橋ヶ板298番14 個人住宅建設工事	2017年2月～ 2017年3月	彦根市 教育委員会	古墳時代後期	小穴 土師器	—
23	小泉町地先 （仮称）彦根市新市民体育 センター建設工事	2017年8月～ 2019年3月	彦根市 教育委員会 （公益財団法人滋賀県文化財保護協会）	縄文時代後期、弥生時代後期、 古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、 平安時代、鎌倉時代	河道、竪穴建物、掘立柱建物、柵、溝、井戸、 土坑、小穴、 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、 二彩陶器、緑釉陶器、白磁、灰釉陶器、石器、 石製品、木製品、漆器、金属製品	13
24	小泉町字八王子620番41 個人住宅建設工事	2017年11～ 2017年12月	彦根市 教育委員会	古墳時代後期 奈良時代	掘立柱建物 土師器、須恵器	—
25	西今町字小橋ヶ板303番ほか 宅地造成工事	2018年5月～ 2018年10月	彦根市 教育委員会	弥生時代中期、 奈良時代～平安時代前期、 中世以降	方形周溝墓、掘立柱建物、柵、溝、井戸、土坑、 小穴 弥生土器、土師器、須恵器、石器、灰釉陶器、 石製品、木製品、	本書

※次数は図４に対応

文献

1. 彦根市　2007『新修彦根市史』第1巻通史編　古代・中世
2. 彦根市史考古部会　2004『『新修彦根市史』編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書
3. 彦根市教育委員会　1982『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第4集
4. 彦根市教育委員会　1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第13集
5. 彦根市教育委員会　1991『福満遺跡第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告第20集
6. 彦根市教育委員会　2008『福満遺跡Ⅹ・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
7. 彦根市教育委員会　2015『福満遺跡第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集
8. 彦根市教育委員会　2015『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集
9. 彦根市教育委員会　2019『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集
10. 彦根市教育委員会　2016『福満遺跡第15次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集
11. 彦根市教育委員会　2017『福満遺跡ⅩⅦ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集
12. 彦根市教育委員会　2015『福満遺跡発掘調査現地説明会』
13. 彦根市教育委員会　2018『福満遺跡（第23次）発掘調査説明会資料』

への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曽川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領覇流荘の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる 70 町が東大寺に施入され、覇流荘が成立した。また、延久２（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡２条７里･8 里･3 条 16 里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、さらに和銅２（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田壱拾壱町壱段参拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流荘は８世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曽川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・沓掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産緑釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

中世　中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中にあって、宇曽川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15 世紀末から 16 世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曽川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曽川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では、道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では､北の京極･浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し､市域一帯は､ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

(3) 福満遺跡の概要と既往調査（図４、表２）

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代から中世の複合遺跡である。鈴鹿山系から流れる犬上川右岸の標高 94 mの扇状地の扇端部に立地している。遺跡周辺は、国道８号線と JR 琵琶湖線南草津駅にも近接しており利便性も高いため、近年、宅地化や集合

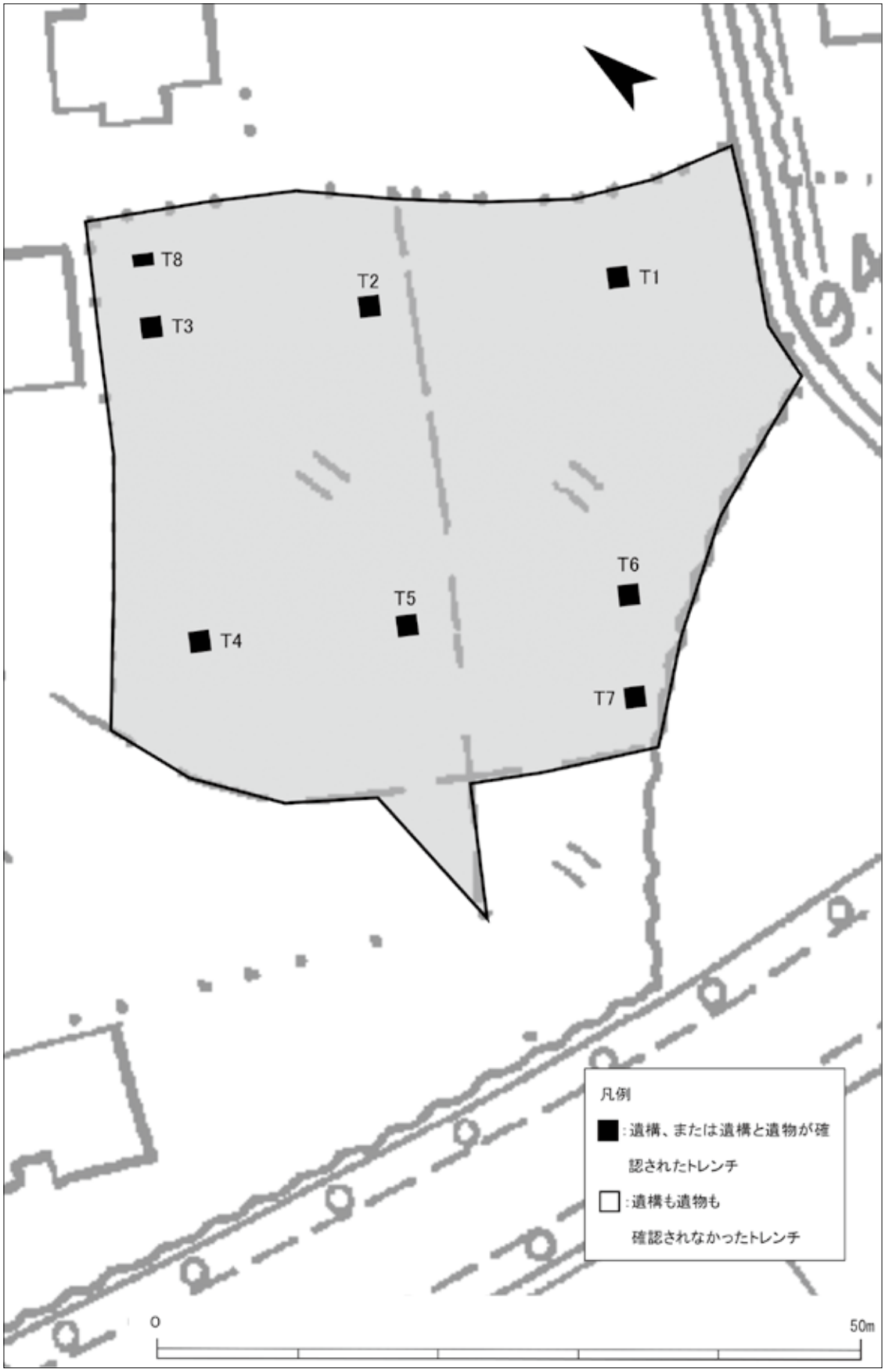


図５　試掘調査のトレンチ位置図

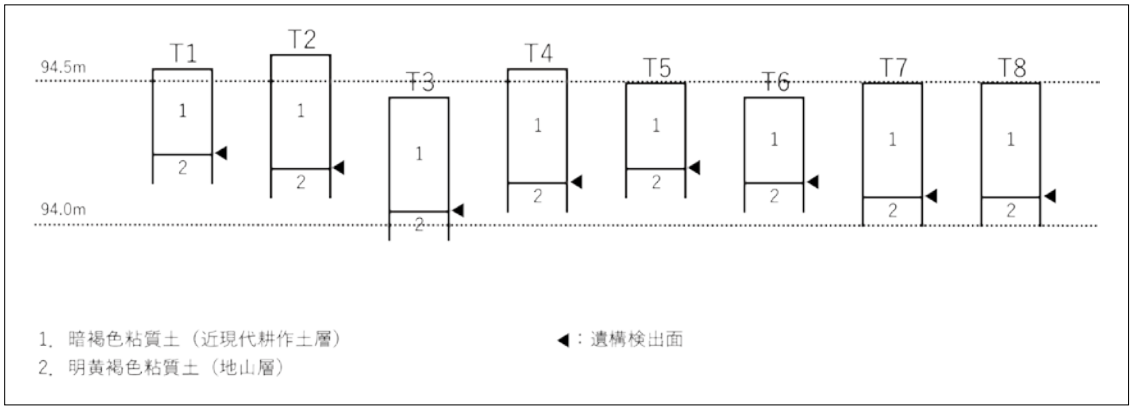


図６　試掘調査土層断面柱状図

住宅建設などの開発が進んでいるが、開発に伴い過去に 24 度の調査が実施されている。

福満遺跡の調査を振り返ると、第２次調査（城南小学校プール）・第３次調査（宅地造成）で縄文時代前期の大歳山式土器が出土しているほか、中期末から晩期の土器が流路から大量に出土し、包含層も確認されている。いまだ明確な遺構は確認されていないが、当時の集落がこの地にあったことがうかがえる。

弥生時代以降では、第 23 次調査（(仮称）彦根市新市民体育センターなど建設）で前期の竪穴建物が１棟確認されている。第４次調査（城南幼稚園改築）や第７次調査（城南小学校校舎増築)、福満遺跡東隣にあたる品井戸遺跡第１次調査で庄内式並行期の土器が出土しており、第４次調査では竪穴建物も検出されていることから当時の集落が福満遺跡にもあった可能性は高い。なお、第５次調査（産業振興センター：燦ぱれす)・第８次調査（集合住宅)・第 18 次調査（集合住宅）で弥生時代後期から古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が検出されており、品井戸遺跡でも第２次調査（市道建設）で方形周溝墓が検出されていることから､当時の集落と墓域がセットで確認されている。また､第 13 次調査（個人住宅）でも時期は判然としないが方形周溝墓が確認されている。第 23 次調査地では、古墳時代前期から竪穴建物が確認されているが、後期に入ると遺構が大規模に展開される状況が確認されている。同時期の竪穴建物は第１・４次調査でも確認されており、第１次調査では子持ち勾玉が土坑から須恵器とともに出土している。同時期の古墳だが、今回の調査地の北隣で実施された第 12 次調査（宅地造成）で土坑墓が２基、第 18 次調査で古墳の周濠が確認されており、古墳時代後期においても集落と墓域がセットで確認されている。

奈良・平安時代には福満遺跡の位置は犬上郡の高宮卿あるいは竇田卿に含まれていた。第１次調査で奈良時代後半の須恵器が土坑から出土しており、第４次調査では平安時代頃とみられる掘立柱建物が数棟検出されている。第 23 次調査では、倉庫を含む掘立柱建物が複数棟整然と並ぶ状況が確認されており、一般集落とは異なる様相を示し、役人や位の高い人の出入りするような施設、また物資の集約とともにそれらを管理するような施設が周辺一帯に広がっていたと推定されている。

以上の状況から福満遺跡について、縄文時代後期・晩期については遺物だけではなく具体的な建物などの遺構の確認、弥生時代後期から古墳時代前期、そして後期にかけては東隣の品井戸遺跡も含めた集落・墓域の範囲の確認などが課題となろう。また、奈良・平安時代には第 23 次調査成果を中心に、当時の犬上郡衙である可能性が極めて高い竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡との関係をも展望に入れた、継続的な調査・研究が必要になると思われる。

参考文献

滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』

彦根市　1960『彦根市市』上冊

彦根市　2002『彦根　明治の古地図』二

彦根市　2007『新修彦根市史』第 1 巻通史編　古代・中世

彦根市教育委員会　1982『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第 4 集

彦根市教育委員会　1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第 13 集

彦根市教育委員会　1991『福満遺跡第 7 次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告第 20 集

彦根市教育委員会　2008『福満遺跡Ⅹ・Ⅺ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 40 集

彦根市教育委員会　2015『福満遺跡第 12 次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 59 集

彦根市教育委員会　2015『福満遺跡発掘調査現地説明会』

彦根市教育委員会　2015『平成 25 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 63 集

彦根市教育委員会　2016『福満遺跡第 15 次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 65 集

彦根市教育委員会　2017『福満遺跡ⅩⅦ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 69 集

彦根市教育委員会　2018『福満遺跡（第 23 次）発掘調査説明会資料』

彦根市教育委員会　2019『平成 26 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書 2』彦根市教育委員会文化財調査報告書第 76 集

琵琶湖流域研究会　2003『琵琶湖流域を読む 上 ―多様な河川世界へのガイドブック―』

第２章　発掘調査の成果

第１節　基本土層（図 9･10、写真 2）

調査地は、全域が耕作地または休耕田としての土地利用がなされていた。基本層位としては、Ⅰ～Ⅲ層に分類できる。Ⅰ層は暗褐色粘質土、Ⅱ層はにぶい黄褐色粘質土で、Ⅰ・Ⅱ層はともに近現代の耕作土である。Ⅲ層は明黄褐色粘質土で基盤層である。耕作土直下のⅢ層上面が遺構検出面となる。

今回の調査地で検出した遺構面の標高は、調査区全域で約 94.1 mを測り、ほぼ平坦な状況であった。これは、今回の調査地の遺構検出面が耕作土直下という状況からもわかるとおり、過去の耕作地開墾に伴い地面をフラットにするため削平を受けた結果であると推察される。

写真２　調査区南東壁（A–A'）土層断面

第２節　弥生時代中期

(1) 概要（図 11）

今回の調査では、方形周溝墓で構成された弥生時代の墓域を検出した。検出した方形周溝墓は総数 15 基で、調査区全域で確認された。その他に僅かに溝や土坑、小穴なども確認されたが、ここでは方形周溝墓を中心に各遺構の概要を述べる。

(2) 方形周溝墓（SZ1 ～ SZ15）

SZ1（図 12･13･16）

【検出位置・重複関係】

調査区の南側に位置しており、周囲には SZ2 が軸を揃えて隣接して築かれている。南東側で SZ4 の周溝を切る。

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は方形で、規模は長軸約 8.6 m × 短軸約 7.7 m、面積は約 66。22㎡を測る。主軸方位はN－ 31°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は各辺中央付近の幅が最大に拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。周溝は東隅のみ途切れているが、前述したように周溝の隅は浅くなる特徴をもっているため、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。北東溝は、最大幅が約 0.92 mで、幅が最大の位置

Y=-22080
Y=-22090
Y=-22100
Y=-22110
Y=-22120
Y=-22130
Y=-22140
Y=-22150
X=-83470
X=-83480
X=-83490
X=-83500
X=-83510
0
20m

図７　遺構全図

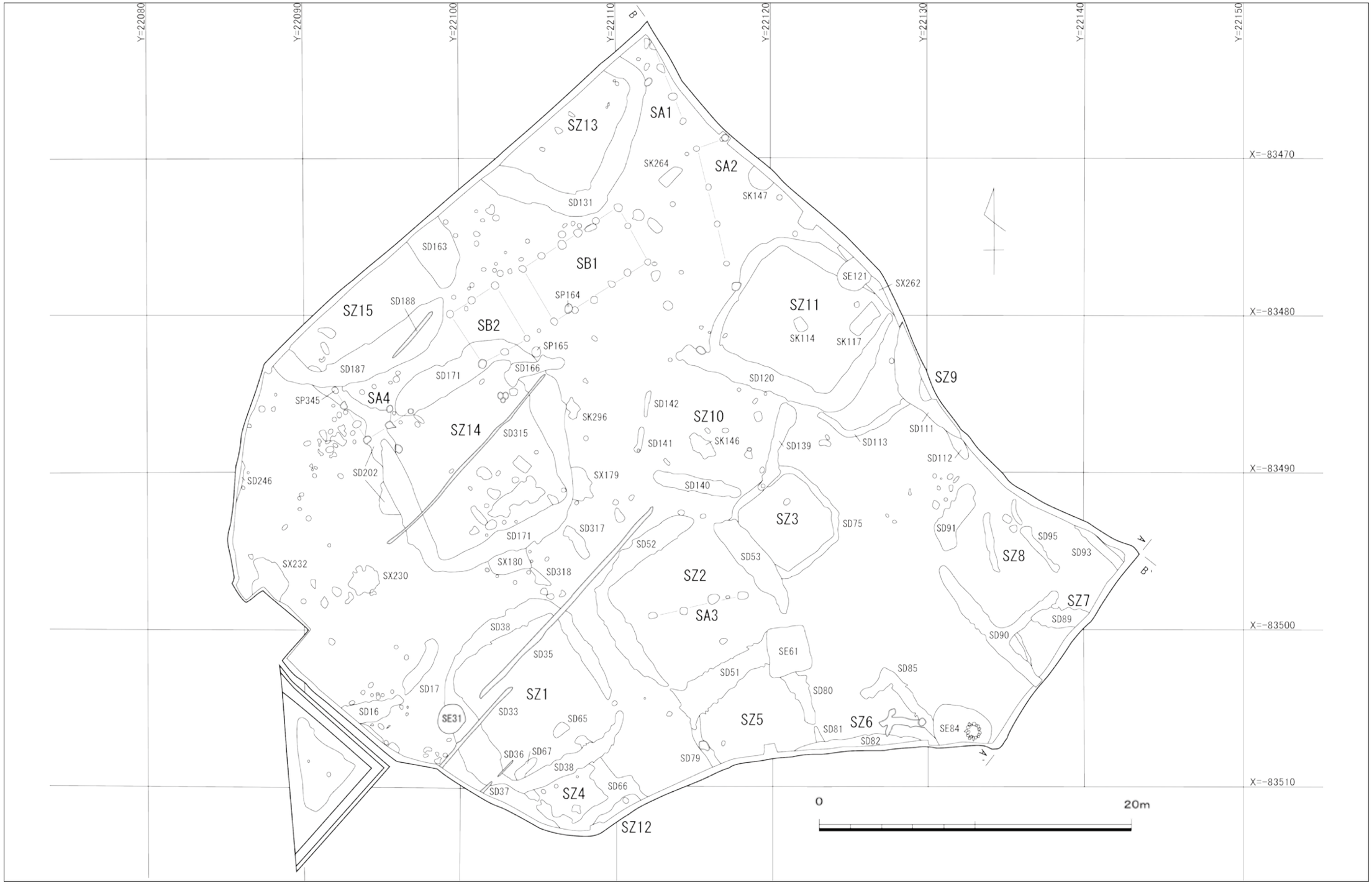
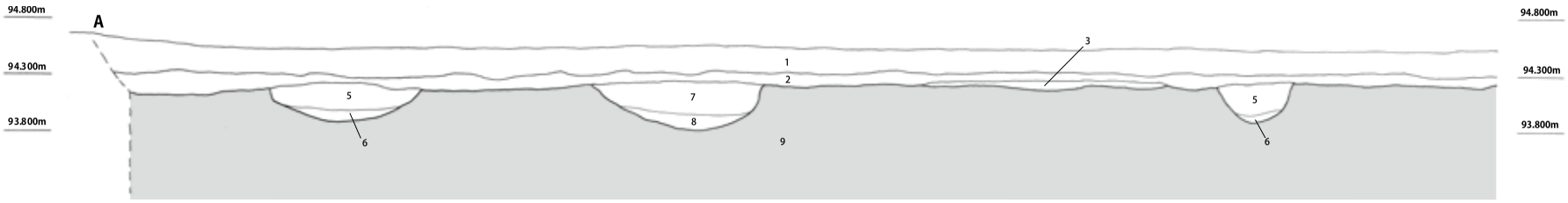


図８　遺構全図（遺構番号入り）



A-A'土層断面
1.暗褐色粘質土【Ⅰ層】(近現代耕作土)
2.にぶい黄褐色粘質土【Ⅱ層】
3.にぶい黄橙色砂礫混じり粘質土
4.灰黄褐色粘質土
5.黒褐色粘質土
6.にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土
7.灰褐色粘質土
8.褐灰色粘質土
9.明黄褐色粘質土【Ⅲ層】(基盤層)

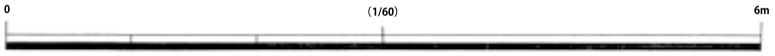


図９　調査区南東壁（A–A'）土層断面図

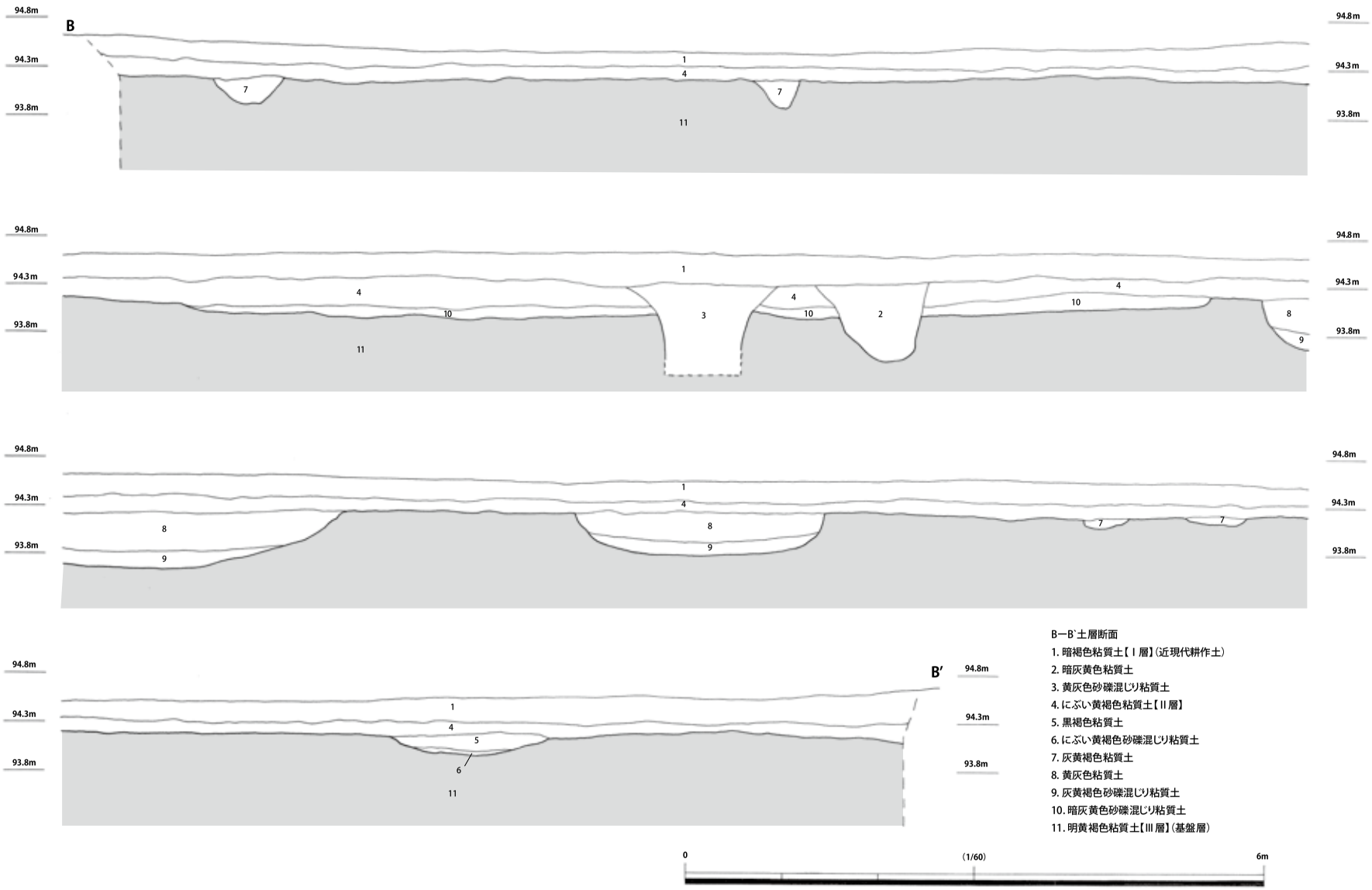


図 10　調査区北東壁（(B–B')）土層断面）

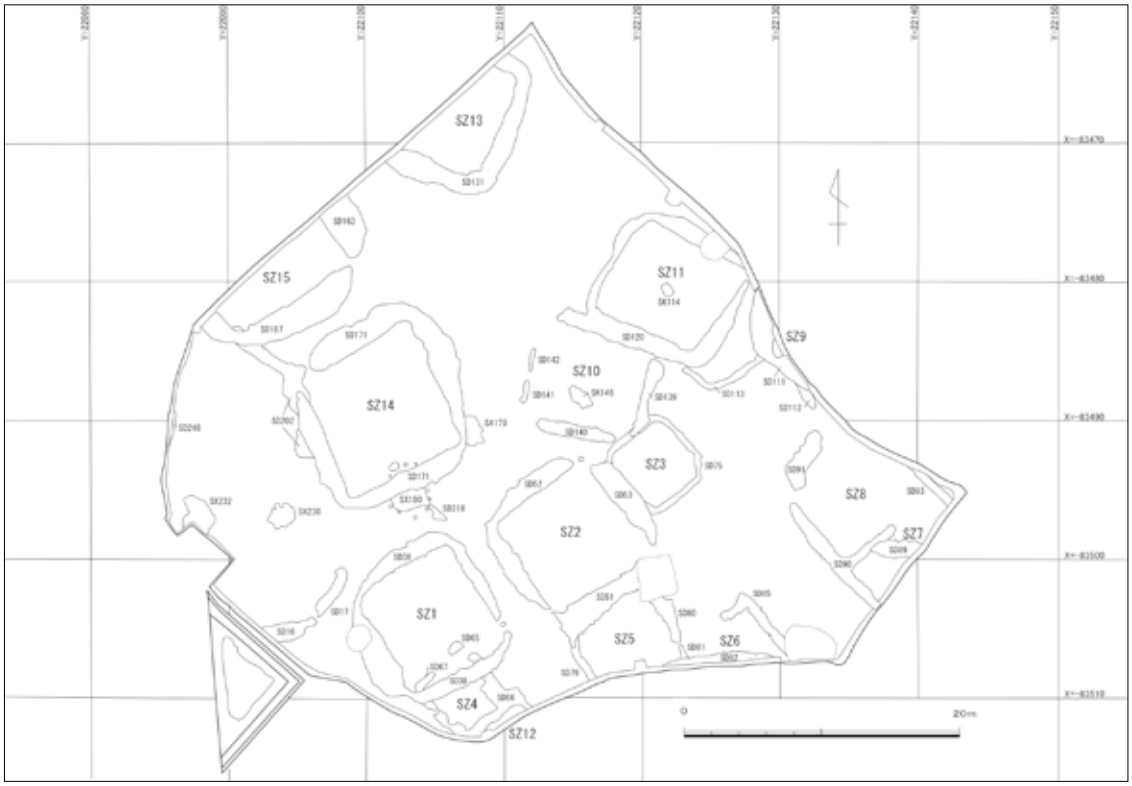


図 11　弥生時代中期の主な遺構図

の深さは約 0.40 mである。北西溝は、最大幅が 1.22 mで、幅が最大の位置の深さは 0.53 mである。南西溝は、最大幅が 1.96 mで、幅が最大の位置の深さは 0.67 mである。南東溝は、最大幅が 1.23 mで、幅が最大の位置の深さは 0.41 mである。

【周溝の堆積状況】

概ね上下 2 層にわかれる。上層は黒褐色粘質土、下層は灰黄褐色砂礫混じり粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

出土遺物は、弥生土器（1･2）と土師器（3）である。

1・2 は弥生土器の鉢である。周溝 SD38 の北隅で溝底より浮いた位置で横位の状態で出土した。出土状況より、周溝内に直接置かれたような状況は認められないため、墳丘上にあった供献土器が転落したものと考えられる。1 は口縁部から体部にかけてのもので、口径 12.6㎝、最大径 22.0㎝、残存部の器高 15.8㎝を測る。頸部がく字形に外屈して短くひらく口縁部を持ち、端部に面をもつ。内外面とも磨滅が激しく調整は不明である。頸部に 2 箇所穿孔が認められる。2 は底部で、底径 5.6㎝、残存部の器高 2.6㎝を測る。外面にハケメが確認される。出土状況より、1･2 は同一個体の可能性が高い。

3 は土師器の高台付皿と思われる。周溝 SD38 検出面での出土であるため混入した可能性

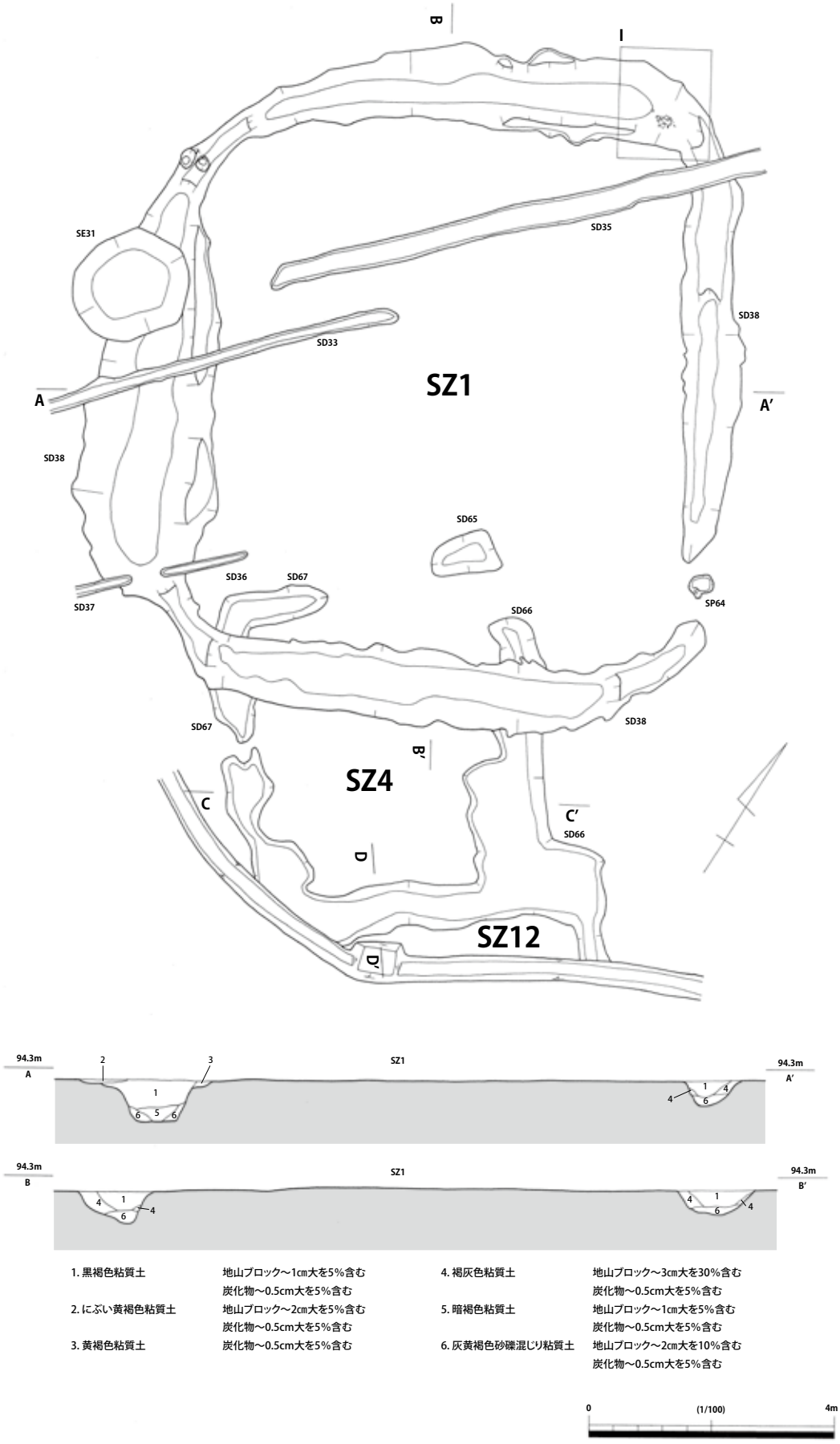


図 12　方形周溝墓（SZ1・SE4）平面図・断面図（1）

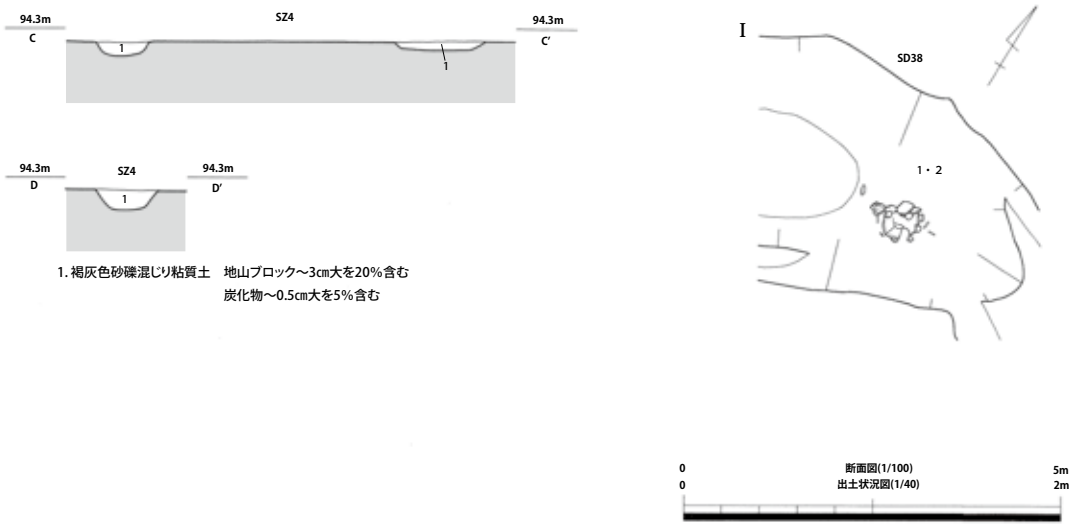


図 13　方形周溝墓（SZ1・SZ4）平面図・断面図（2）

がある。

これら出土遺物より本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期後葉（Ⅳ期）に比定できる。

SZ2（図 14 ～ 16）

【検出位置・重複関係】

調査区の南側に位置しており、周囲には SZ1 が軸を揃えて隣接して築かれている。北東側で SZ3 の周溝を、南東側で SZ5 の周溝をそれぞれ切る。

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は方形で、規模は長軸約 8.3 m × 短軸約 8.3 m、面積は約 68.89㎡を測る。主軸方位はN－ 34°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は各辺中央付近の幅が最大に拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。周溝は北隅と東隅の 2 箇所が途切れているが、前述したように周溝の隅は浅くなる特徴をもっているため、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。北東溝は、最大幅が約 1.74 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.60 mである。北西溝は、最大幅が 1.38 mで、幅が最大の位置の深さは 0.58 mである。南西溝は、最大幅が 1.28 mで、幅が最大の位置の深さは 0.67 mである。南東溝は、最大幅が 1.46 mで、幅が最大の位置の深さは 0.60 mである。

【周溝の堆積状況】

概ね上下 2 層にわかれる。上層は黒褐色粘質土、下層は黄褐色粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

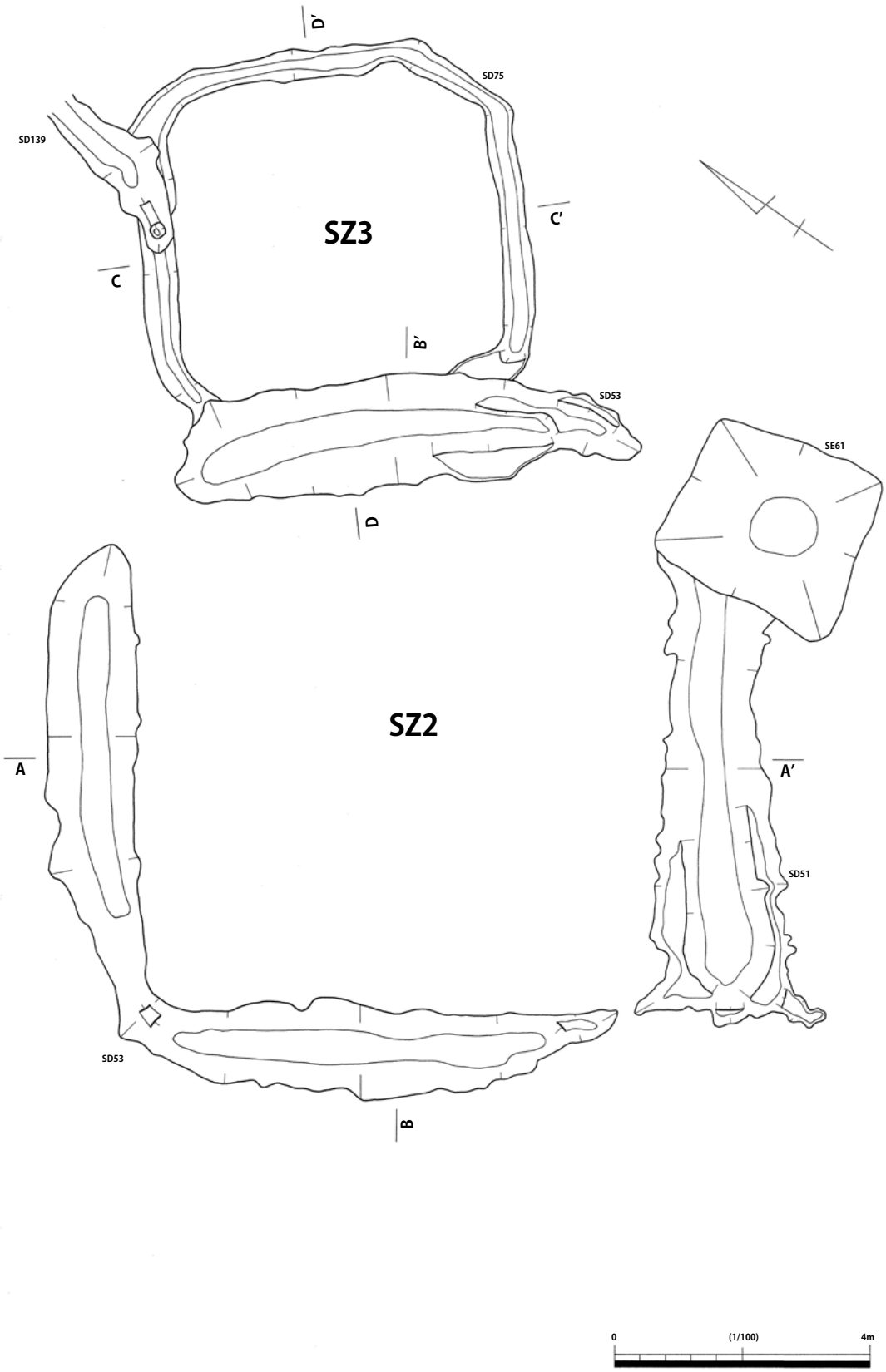


図 14　方形周溝墓（SZ2・SZ3）平面図・断面図（1）

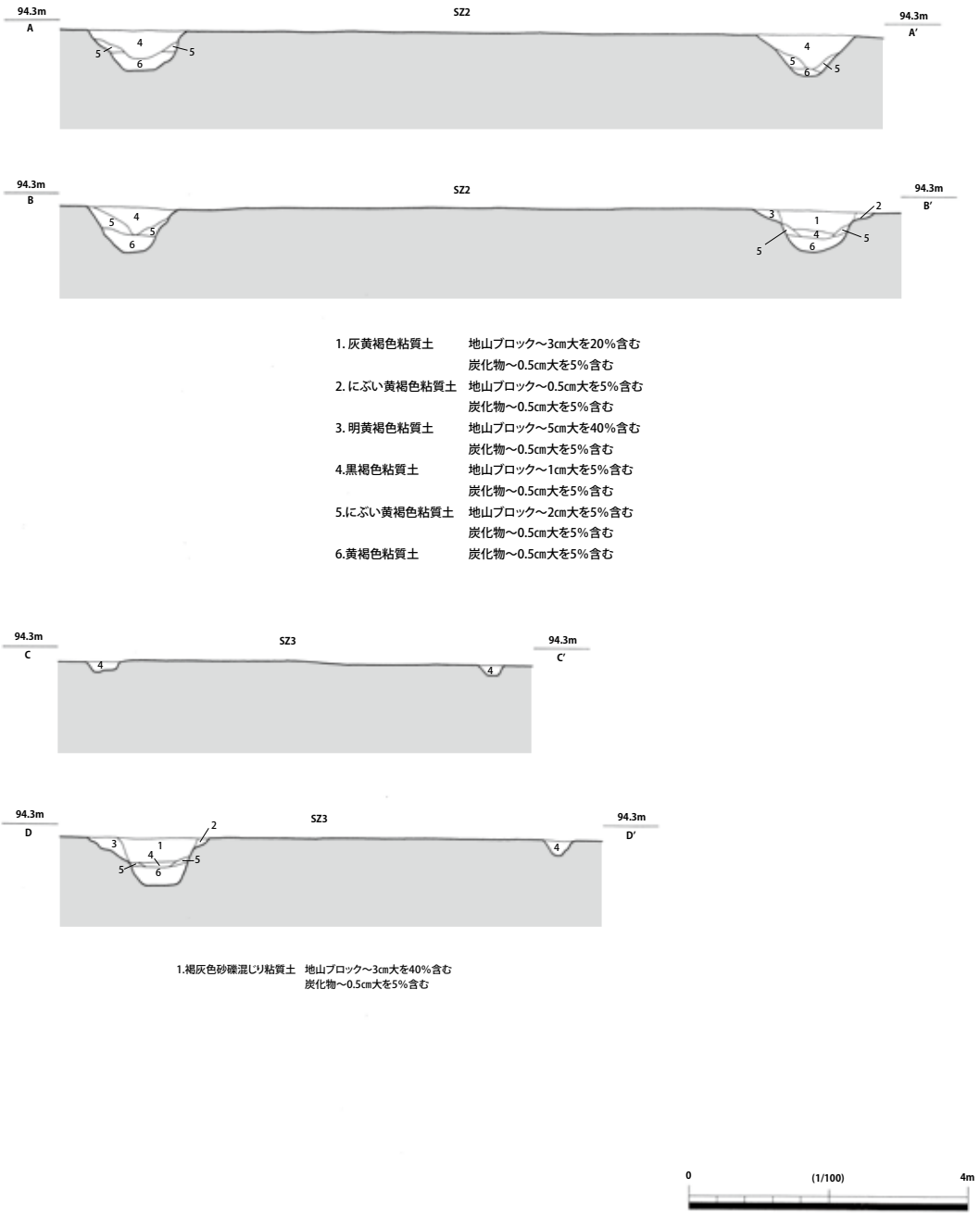


図 15　方形周溝墓（SZ2・SZ3）平面図・断面図（2）

確認されなかった。

【遺物】

出土遺物は、縄文土器（4）である。

4 は縄文土器深鉢の胴部である。周溝 SD51 からの出土である。混入と思われる。

SZ3（図 14･15）

【検出位置・重複関係】

調査区の中央付近に位置しており、周囲には SZ5 が軸を揃えて隣接して築かれている。南西側で SZ2 の周溝に、北西側で SZ10 の周溝にそれぞれ切られる。

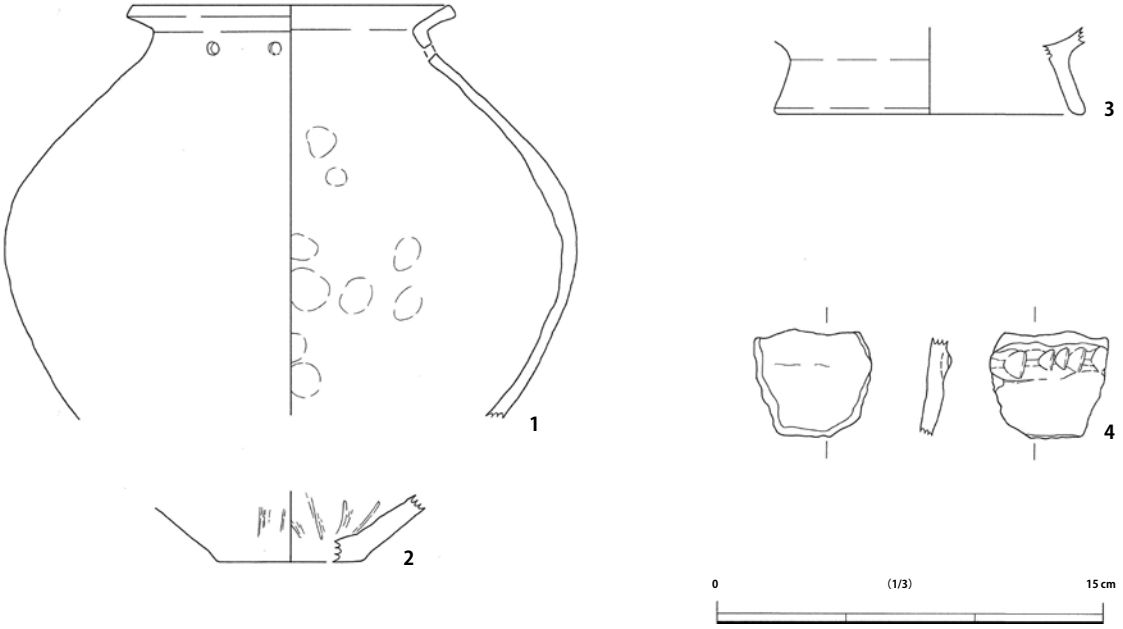


図 16　SZ1・SZ2 出土遺物実測図

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は隅丸方形で、規模は長軸約 5.1 m × 短軸約 4.8 m、面積は約 24.48㎡を測る。主軸方位はN－ 42°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は内側に平行して一定幅である。周溝の深さに関しても、一定しており隅が浅くなるという特徴はない。周溝は途切れることなく方形に廻っている。北東溝は、最大幅が約 0.44 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.22 mである。北西溝は、最大幅が 0.52 mで、幅が最大の位置の深さは 0.16 mである。南西溝は、SZ2 の周溝に切られているため不明である。南東溝は、最大幅が 0.38 mで、幅が最大の位置の深さは 0.16 mである。周溝は非常に浅く、大きく削平をうけている可能性がある。

【周溝の堆積状況】

褐灰色砂礫混じり粘質土の単層である。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

出土しなかった。

SZ4（図 12･13）

【検出位置・重複関係】

調査区の南側に位置しており、周囲には SZ5 や SZ12 が軸を揃えて隣接して築かれている。特に SZ12 に関しては周溝（SD66）を共有して南東側に隣接している。北西側で SZ1 の周溝に切られる。

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は方形で、規模は長軸約 5.1 m × 短軸約 4.8 m、面積は約 24.48㎡を測る。主軸方位はN－ 37°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、幅・深さともに一定しており、隅が狭まったり、浅くなったりする特徴はない。北東溝は、最大幅が約 1.22 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.10 mである。北西溝は、最大幅が 0.54 mで、幅が最大の位置の深さは 0.16 mである。南西溝は、最大幅が 0.72 mで、幅が最大の位置の深さは 0.18 mである。SZ12 と共有する南東溝は、最大幅が 0.80 mで、幅が最大の位置の深さは 0.25 mである。周溝は非常に浅いため、大きく削平をうけている可能性がある。そのため、周溝は 3 箇所で途切れているが、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。

【周溝の堆積状況】

褐灰色砂礫混じり粘質土の単層である。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

出土しなかった。

SZ5（図 17）

【検出位置・重複関係】

調査区の南東側に位置しており、周囲には SZ3 や SZ4、SZ6 が軸を揃えて隣接して築かれている。特に SZ6 に関しては周溝（SD81）を共有して東側に隣接している。北西側で SZ2 の周溝に切られる。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定される。検出できている東西軸で約 6.4 mを測る。主軸方位はN－ 32°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、幅・深さともに一定しており、隅が狭まったり、浅くなったりする特徴はない。北東溝は、最大幅が約 1.40 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.16 mである。北西溝は、SZ2 の周溝に切られているため不明である。南西溝は、最大幅が 0.54 mで、幅が最大の位置の深さは 0.12 mである。南東溝は、調査区外のため不明である。検出できている周溝は非常に浅いため、大きく削平をうけている可能性がある。そのため、周溝は 1 箇所で途切れているが、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。

【周溝の堆積状況】

黄灰色砂礫混じり粘質土の単層である。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

出土しなかった。

SZ6（図 17）

【検出位置・重複関係】

調査区の南東側に位置しており、周囲には SZ3 や SZ5 が軸を揃えて隣接して築かれている。特に SZ5 に関しては周溝（SD81）を共有して西側に隣接している。北西側で SZ2 の周溝に切られる。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定される。検出できている東西軸で約 5.5 mを測る。主軸方位はN－ 36°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、幅・深さともに一定しており、隅が狭まったり、浅くなったりする特徴はない。北東溝は、最大幅が約 0.76 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.21 mである。北西溝は、最大幅が 0.62 mで、幅が最大の位置の深さは 0.22 mである。南西溝は、最大幅が 0.48 mで、幅が最大の位置の深さは 0.16 mである。南東溝は、調査区外のため不明である。検出できている周溝は非常に浅いため、大きく削平をうけている可能性がある。そのため、周溝は 1 箇所で途切れているが、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。

【周溝の堆積状況】

褐灰色砂礫混じり粘質土の単層である。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

出土しなかった。

SZ7（図 18 ～ 20）

【検出位置・重複関係】

調査区の東端に位置しており、周囲には SZ8 が周溝（SD90）を共有して西側に隣接している。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定される。検出できている南北軸で約 8.4 mを測る。主軸方位はN－ 42°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は内側に平行して一定幅で隅が狭まるという特徴はない。しかし、周溝の深さに関しては、隅に向かって浅くなる特徴を有する。北東溝は、最大幅が約 0.58 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.22 mである。北西溝は、最大幅が 0.68 mで、幅が最大の位置の深さは 0.22 mである。南西溝は、最大幅が 0.84 mで、幅が最大の位置の深さは 0.28 mである。南東溝

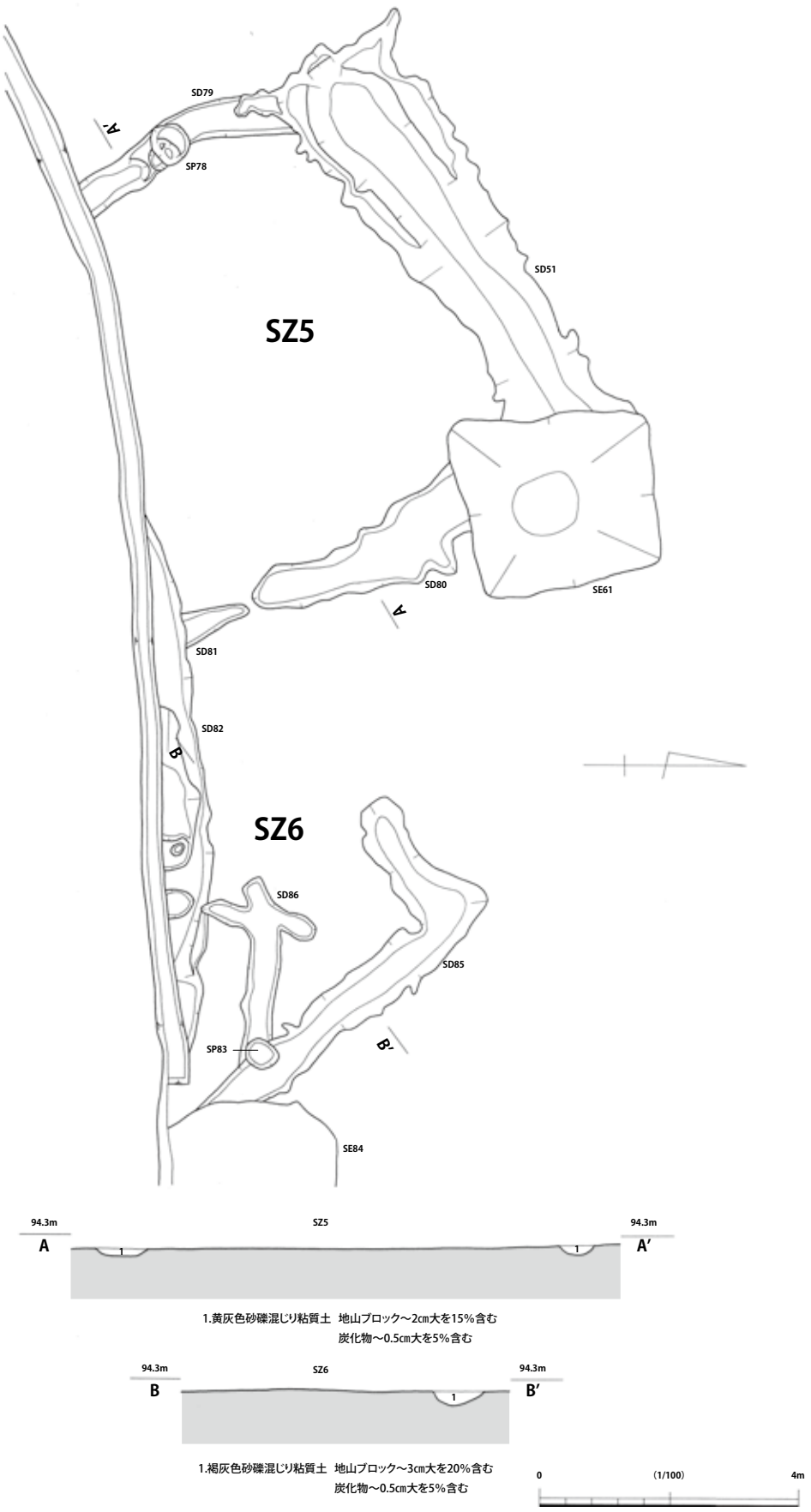


図 17　方形周溝墓（SZ5・SZ6）平面図・断面図

は調査区外のため不明である。周溝は非常に浅く、大きく削平をうけている可能性がある。そのため、周溝は北西溝で1箇所途切れているが、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。

【周溝の堆積状況】

概ね上下2層にわかれる。上層は黒褐色粘質土、下層は黄褐色系の砂礫混じり粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

遺物は、弥生土器（5）、砥石（6）である。

5は弥生土器の細頸壷である。南西周溝SD90で溝底より浮いた位置で、口縁部は欠けていたがほぼ完形のまま横位の状態で出土した。出土状況より、周溝内に直接置かれたような状況は認められないため、墳丘上にあった供献土器が転落したものと考えられる。5は頸部から底部にかけてのもので、底径5.5㎝、最大径19.7㎝、残存部の器高27.9㎝を測る。突出した平底の底部を有す。体部は球状で中位やや下で最大径をもつ。体部と頸部が緩やかな曲線を描いてくびれ、そこから直線的に伸びる口頸部が付く。頸部に櫛描直線紋を3帯巡らせ、体部には中位やや下の最大径を持つ位置で櫛描直線紋を1帯巡らせる。体部の櫛描直線紋から下方はハケメが施され、体部上方から頸部のくびれまでは無文である。

6は砥石で、SZ7とSZ8の共有の周溝SD90からの出土である。

これら出土遺物より本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期前葉（Ⅱ期）に比定できる。

SZ8（図18～20）

【検出位置・重複関係】

調査区の東端に位置しており、周囲にはSZ7が周溝（SD90）を共有して東側に隣接している。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定される。規模は長軸約8.1 m × 短軸約7.2 m、面積は約58.32㎡を測る。主軸方位はN－39°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は内側に平行して一定幅を呈しており、隅が狭まるという特徴はない。しかし、周溝の深さに関しては、隅に向かって浅くなる特徴を有する。北東溝は、最大幅が約0.54 mで、幅が最大の位置の深さは約0.20 mである。北西溝は、最大幅が1.40 mで、幅が最大の位置の深さは0.14 mである。南西溝は、最大幅が1.24 mで、幅が最大の位置の深さは0.10 mである。南東溝は、最大幅が0.68 mで、幅が最大の位置の深さは0.22 mである。周溝は非常に浅く、大きく削平をうけている可能性がある。そのため、周溝は北西溝で1箇所、南東溝で1箇所、西隅で1箇所、合計3箇所で途切れているが、これが当

初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。

【周溝の堆積状況】

灰黄褐色粘質土の単層である。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

遺物は、弥生土器（7･8）である。砥石（6）である。

7・8 は弥生土器の細頸壷である。7 は口縁部で、口径 6.6㎝、残存部の器高 5.6㎝を測り、やや小型である。櫛描直線文の後ヘラ描直線文が施されている。8 は、南西周溝 SD90 で溝底より浮いた位置で横位の状態で出土した。耕作土直下での出土のため、上半部分は失われていた。出土状況より､周溝内に直接置かれたような状況は認められないため､墳丘上にあった供献土器が転落したものと考えられる。口縁部から体部にかけてのもので、口径 15.8㎝、最大径 22.4㎝、残存部の器高は 27.6㎝を測る。体部は球状で中位やや下で最大径をもつ。体部と頸部が緩やかな曲線を描いてくびれ、そこから直線的に伸びる口頸部が付く。全体的に磨滅しているが、口縁部から頸部と、体部の中位やや下の最大径をもつ位置に、複合櫛描紋が認められる。

6 は、前述したとおり、SZ7 と SZ8 の共有溝 SD90 からの出土である。

これら出土遺物より本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期前葉（Ⅱ期）に比定できる。

SZ9（図 21）

【検出位置・重複関係】

調査区の北東端に位置しており、方形周溝墓の南西隅と推定される。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、方形周溝墓の南西隅で、墳丘の平面形は方形ないし長方形と推定される。墳丘を取り囲む周溝の平面形だが、検出できている隅部分は溝幅が狭く、浅くなっていることより、SZ1 や SZ2 の周溝と同様の形状の可能性が高い。すなわち溝の中央部が最大幅・深さを測り、隅に向かって幅が狭まり浅くなる形態の溝である。南西隅の幅は 0.60 mで、その位置での深さは 0.18 mである。

【周溝の堆積状況】

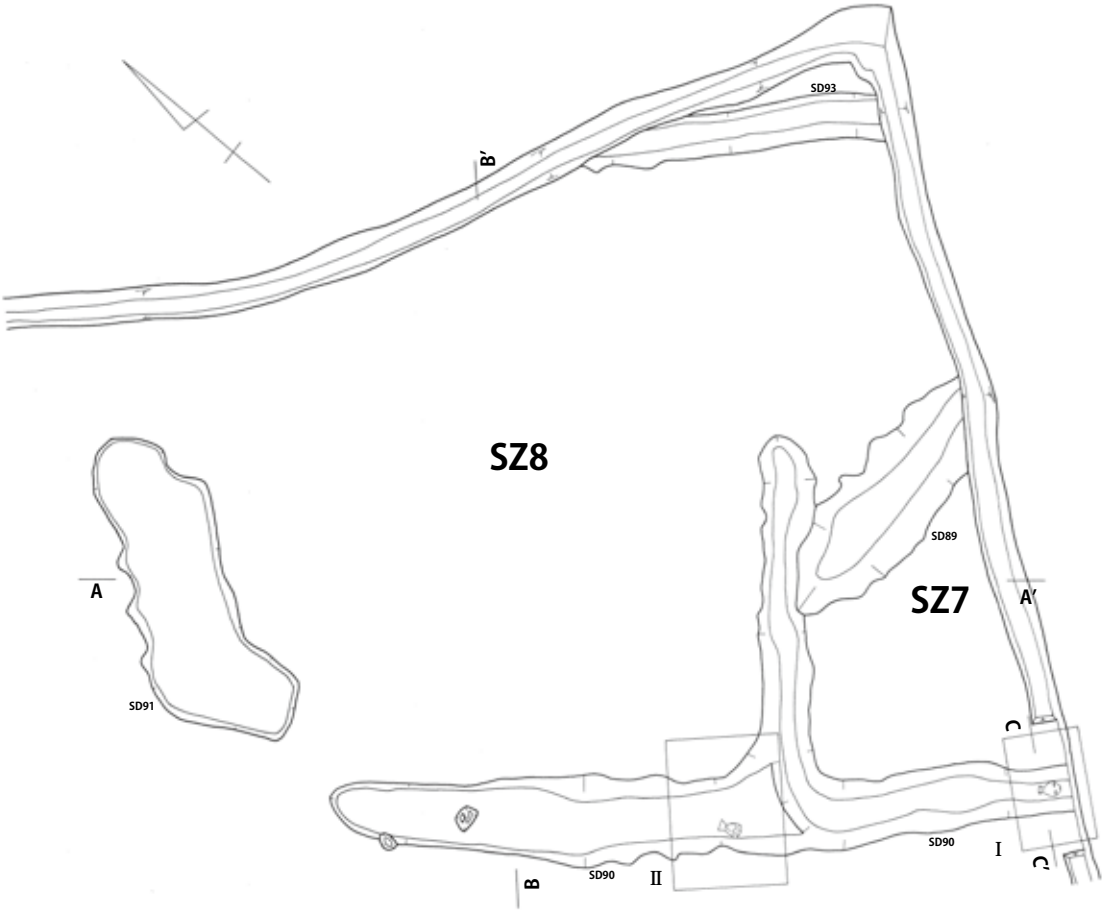
上下 2 層にわかれる。上層は黄灰色粘質土、下層は灰黄褐色砂礫混じり粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

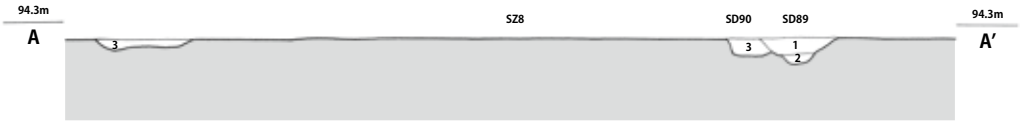
【埋葬施設】

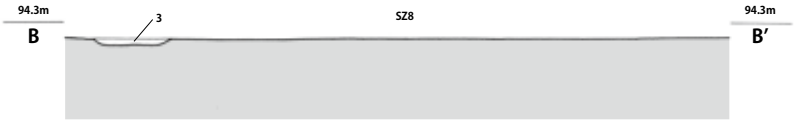
確認されなかった。

【遺物】

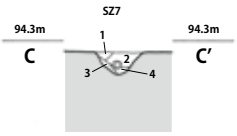
出土しなかった。







1.灰褐色粘質土　地山ブロック～5cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2.褐灰色砂礫混じり粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む



1.にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2.黒褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3.にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
4.灰黄褐色砂礫混じり粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

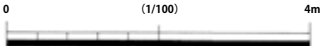


図 18　方形周溝墓（SZ7・SZ8）平面図・断面図（1）

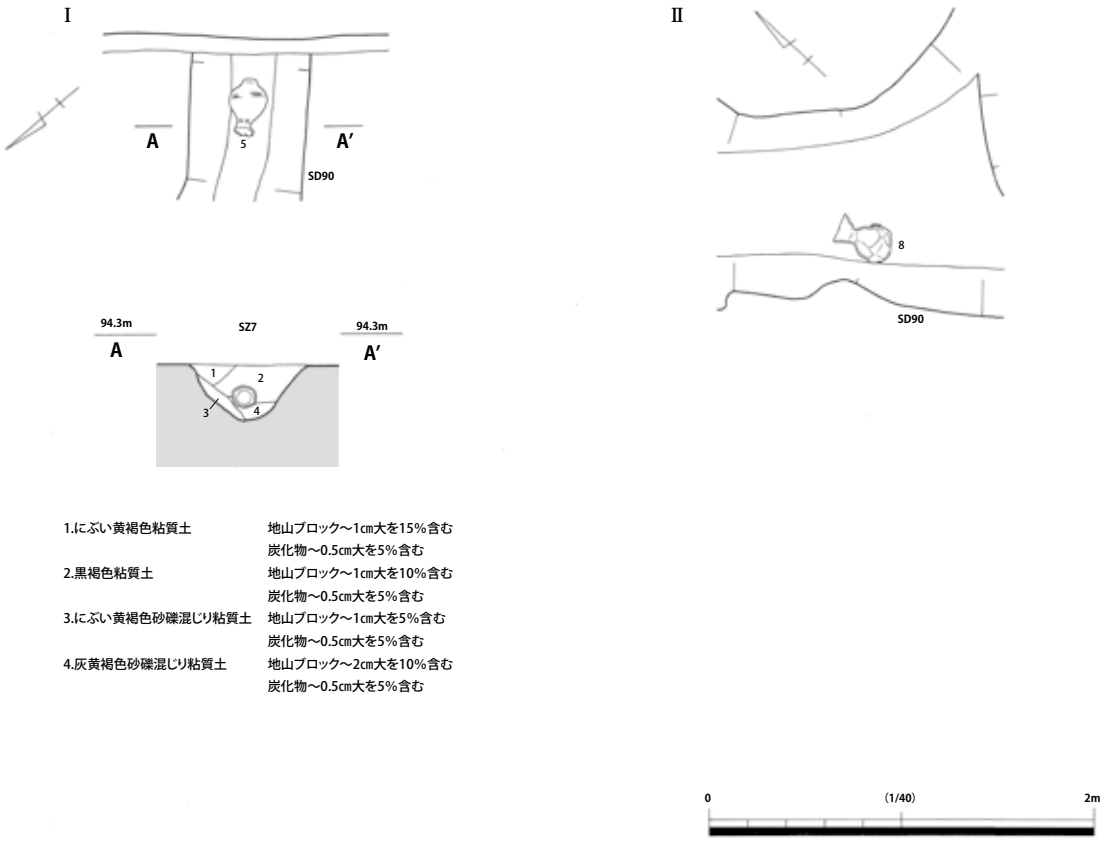


図 19　方形周溝墓（SZ7・SZ8）平面図・断面図（2）

SZ10（図 22 ～ 25）

【検出位置・重複関係】

調査区の中央付近に位置しており、周囲には SZ11 が周溝（SD120）を共有して北東側に隣接している。南東側で SZ3 の周溝を切る。

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は方形で、規模は長軸約 8.2 m × 短軸約 6.7 m、面積は約 54.92㎡を測る。主軸方位はN－ 11°－Eである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は SZ1 や SZ2 ほどではないものの、各辺中央付近の幅が少し拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。周溝は四隅とも途切れているが、前述したように周溝の隅は浅くなる特徴をもっているため、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。SZ11 と共有する北溝は、最大幅が約 1.54 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.42 mである。西溝は、最大幅が 0.24 mで、幅が最大の位置の深さは 0.04 mである。南溝は、最大幅が 1.02 mで、幅が最大の位置の深さは 0.61 mである。東溝は、最大幅が 1.24 mで、幅が最大の位置の深さは 0.52 mである。西溝は幅・深さとも他の 3 辺の溝と比較すると貧弱である。これが当初から形状か、後世の削平により形状かの判断はつかない。

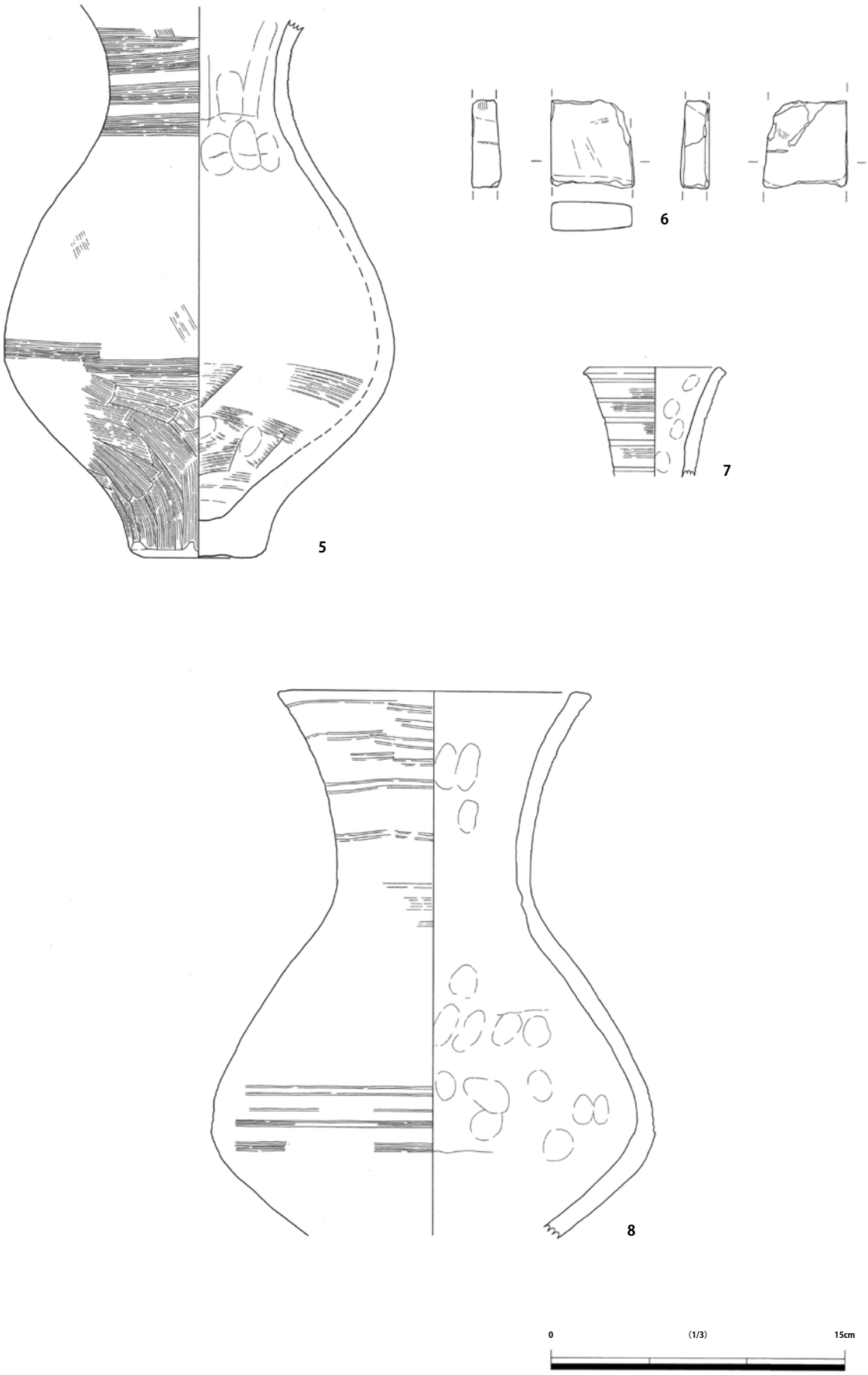


図 20　SZ7・SZ8 出土遺物実測図

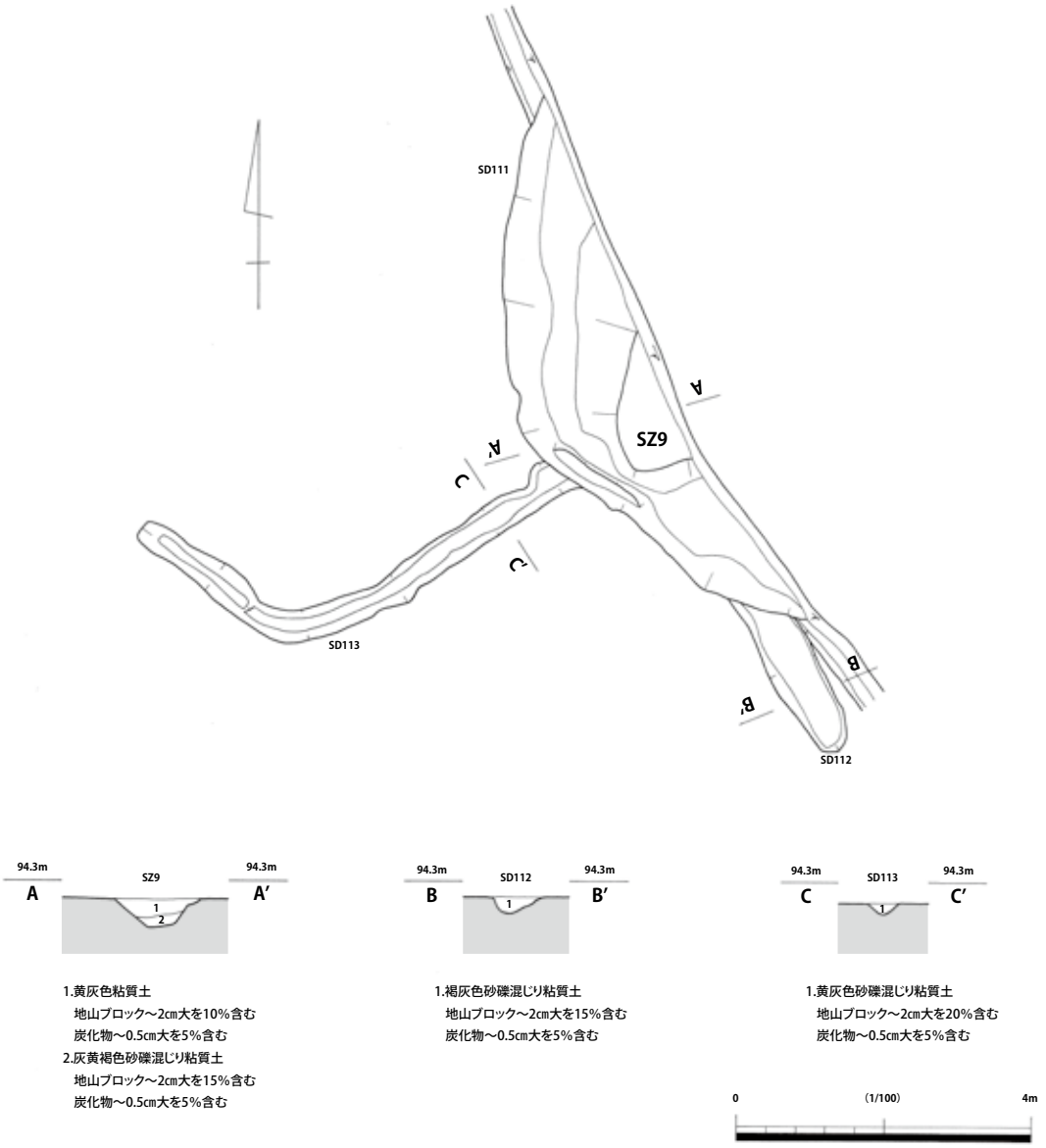


図 21　方形周溝墓（SZ9）平面図・断面図

【周溝の堆積状況】

概ね上中下 3 層にわかれる。上層は褐灰色粘質土、中層は灰黄褐色粘質土、下層はにぶい黄橙色粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

周溝内に土坑 SK146 が検出された。平面形は楕円形で、長さ約 1.95 m、幅約 1.0 m、深さ約 0.14 mを測る。中央付近には、焼土ブロックが僅かに確認される。遺構も浅く残存状況も良好ではないが、墳丘の中心付近に位置しており、周辺に他の時期の遺構も希薄なことから、埋葬施設の可能性があると推定している。

【遺物】

遺物は、弥生土器（9･10）である。

9･10 は弥生土器の壷である。南周溝 SD140 の溝底より浮いた位置で出土した。破片の

みの出土である。9 は体部片である。横位の櫛描紋→縦位の櫛描紋→凹線紋→無紋帯にヘラ磨きが施されている。尾張の貝田町式の紋様構成である。10 は底部で平底を呈す。底径 7.0 ㎝、残存部の器高は 2.2㎝を測る。

これら出土遺物より本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期中葉（Ⅲ期）に比定できる。

SZ11（図 22 ～ 24）

【検出位置・重複関係】

調査区の北東側に位置しており、周囲には SZ10 が周溝（SD120）を共有して南西側に隣接している。

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は方形で、規模は長軸約 8.5 m × 短軸約 7.2 m、面積は約 61.20㎡を測る。主軸方位はＮ－ 33°－Ｅである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は SZ1 や SZ2 ほどではないものの、各辺中央付近の幅が少し拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。周溝は東隅が 1 箇所途切れているが、前述したように周溝の隅は浅くなる特徴をもっているため、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。北東溝は、最大幅が約 1.26 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.32 mである。北西溝は、最大幅が 0.82 mで、幅が最大の位置の深さは 0.29 mである。SZ10 と共有する南西溝は、最大幅が約 1.54 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.42 mである。北東溝は、最大幅が 1.28 mで、幅が最大の位置の深さは 0.44 mである。北西溝は幅・深さとも他の 3 辺の溝と比較すると貧弱である。この状況は隣接する SZ10 と同様である。これが当初から形状か、後世の削平により形状かの判断はつかない。

【周溝の堆積状況】

概ね上下 2 層にわかれる。上層は褐灰色粘質土、下層はにぶい黄橙色粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

周溝内に土坑 SK118 が検出された。平面形は隅丸長方形で、長さ約 0.94 m、幅約 0.65 m、深さ約 0.22 mを測る。遺構も浅く残存状況も良好ではないが、墳丘の中心付近に位置しており、周辺に他の時期の遺構も希薄なことから、埋葬施設の可能性があると推定している。

【遺物】

出土しなかった。

SZ12（図 12・表 13）

【検出位置・重複関係】

調査区の南端に位置しており、周囲には SZ4 や SZ5 が軸を揃えて隣接して築かれている。特に SZ4 に関しては周溝（SD66）を共有して北西側に隣接している。

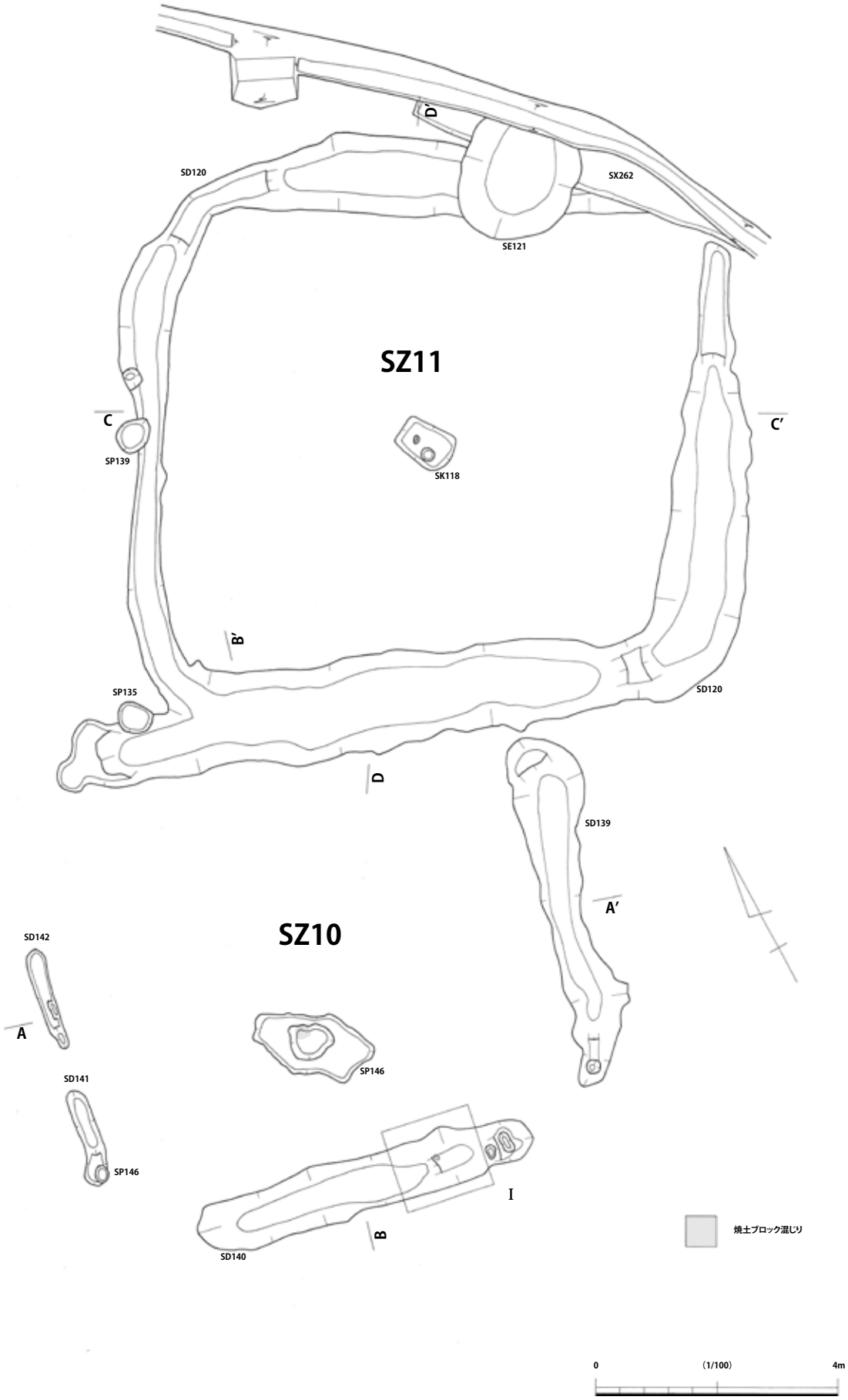
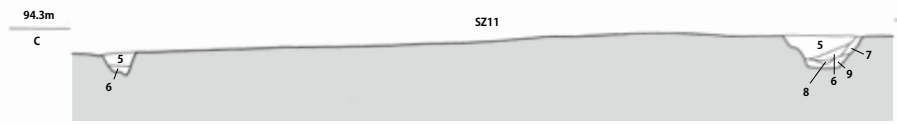
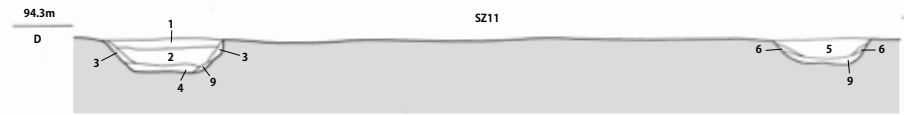


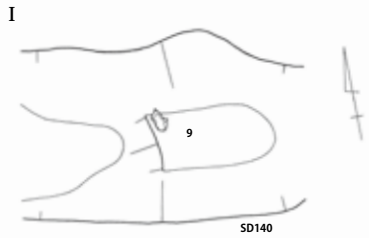
図 22　方形周溝墓（SZ10・SZ11）平面図・断面図（1）

1.褐灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を30%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3.にぶい黄橙色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
しまり強い
4.褐灰色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
5.にぶい褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
6.褐灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
粘性強い
7.にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
8.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を40%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
9.にぶい黄橙色粘質土　地山ブロック～3cm大を30%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
10.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
11.にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を30%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
12.黄灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
粘性強い





1.褐灰色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2.褐灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
粘性強い
3.にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
4.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を40%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
5.褐灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
6.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
7.にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
8.黄灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
9.にぶい黄橙色粘質土　地山ブロック～3cm大を30%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む



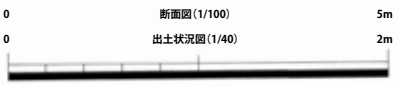


図 23　方形周溝墓（SZ10・SZ11）平面図・断面図（2）

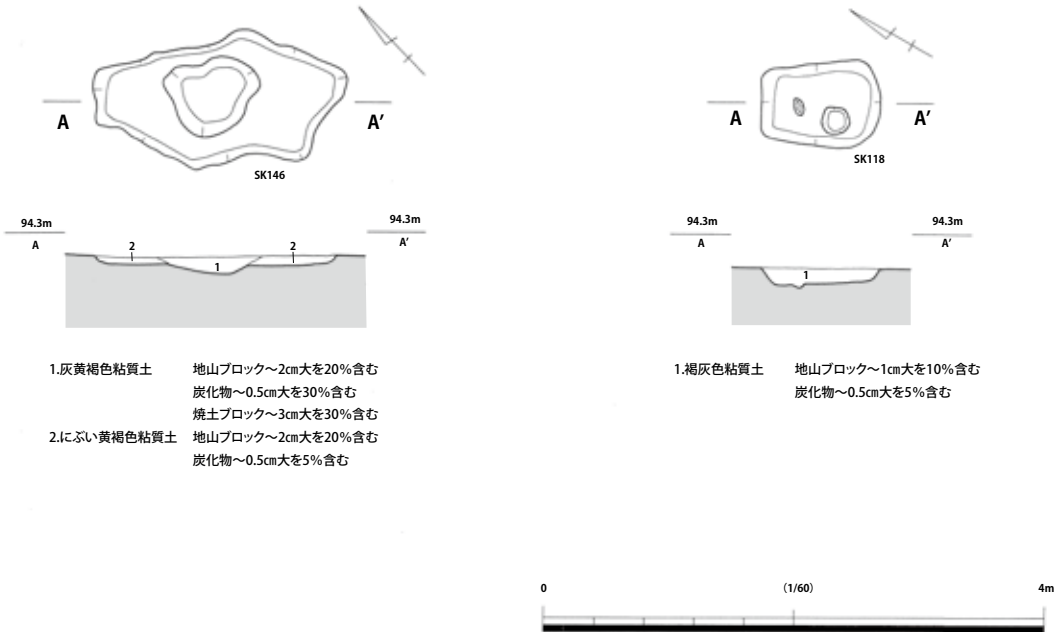


図 24　方形周溝墓（SZ10・SZ11）平面図・断面図（3）

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定されるが墳丘は規模は不明である。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、幅・深さともに一定しており、隅が狭まったり、浅くなったりする特徴はない。SZ4 と共有する周溝 SD66 は、最大幅が 0.80 mで、幅が最大の位置の深さは 0.25 mである。他 3 辺の周溝は調査区外のため不明である。

【周溝の堆積状況】

褐灰色砂礫混じり粘質土の単層である。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

出土しなかった。

SZ13（図 26･27）

【検出位置・重複関係】

調査区の北西端に位置している。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定される。検出できている南北軸で約 8.2 mを測る。主軸方位はN－ 27°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は各辺中央付近の幅が最大に拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。検出

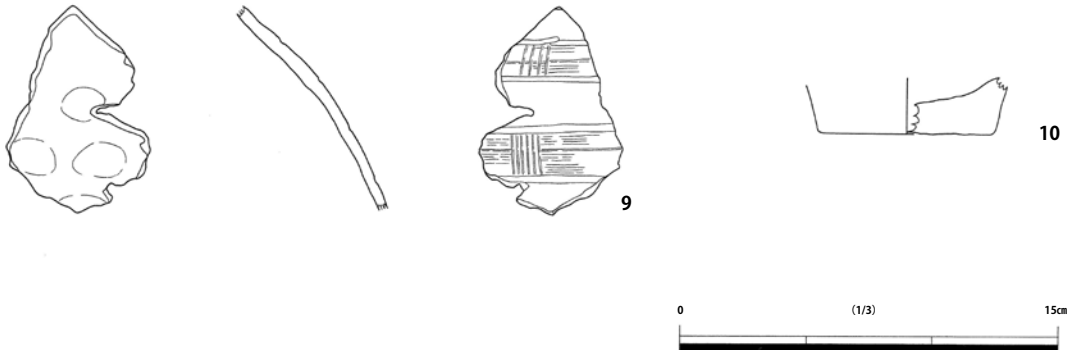


図 25　SZ10 出土遺物実測図

できている範囲では周溝の途切れている箇所はない。北溝は、最大幅が約 1.32 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.61 mである。西溝は、調査区外のため不明である。南溝は、最大幅が 1.86 mで、幅が最大の位置の深さは 0.87 mである。東溝は、最大幅が 1.38 mで、幅が最大の位置の深さは 0.72 mである。

【周溝の堆積状況】

概ね上下 2 層にわかれる。上層は褐灰色粘質土、下層は黄褐色系の粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

遺物は、弥生土器（11･12･13）である。

いずれも、周溝 SD131 の溝底より浮いた位置で出土した。破片のみの出土である。11 は弥生土器の広口壷である。口径 13.4㎝、残存部の器高 5.7㎝を測る。口縁部は外湾してひろがる。12 は壷の底部で、底径 3.8㎝、残存部の器高 3.8㎝を測る。13 は甕の底部で、底径 4.0㎝、残存部の器高 3.3㎝を測る。

これら出土遺物より本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期後葉（Ⅳ期）に比定できる。

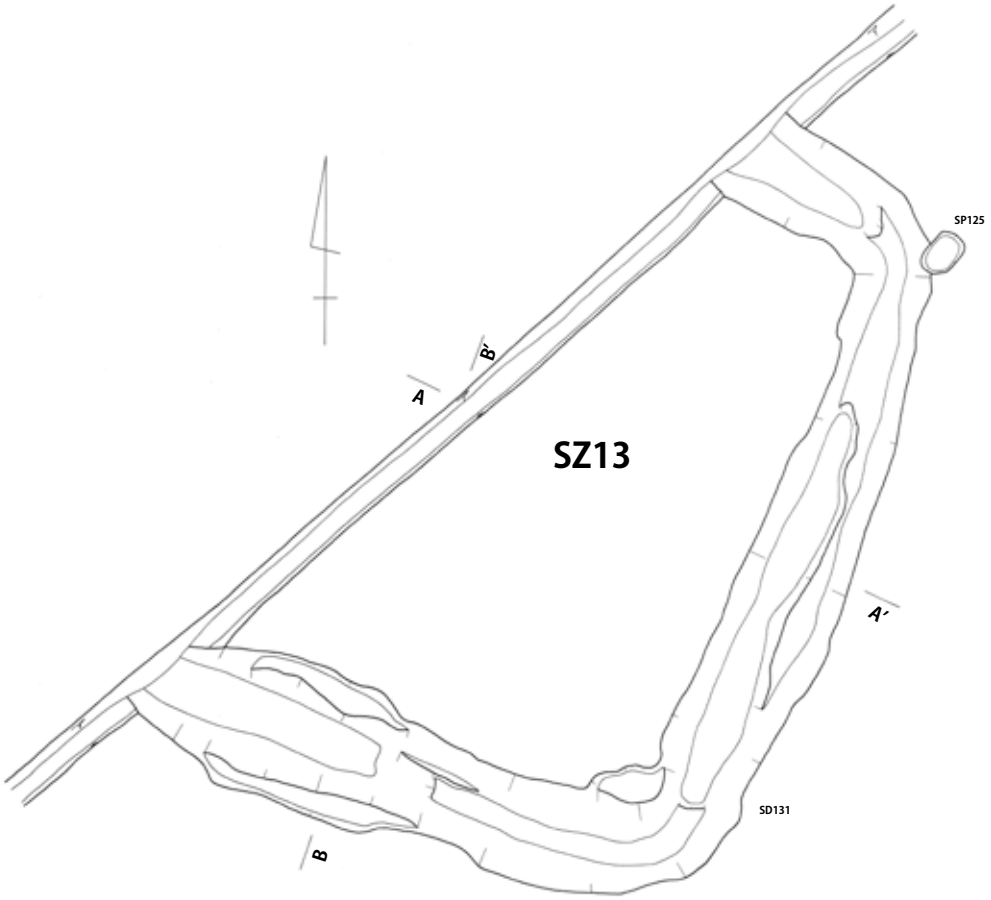
SZ14（図 28･29）

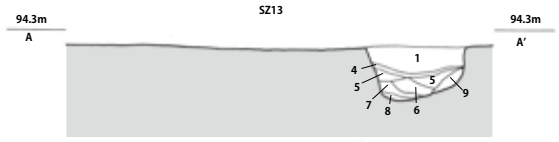
【検出位置・重複関係】

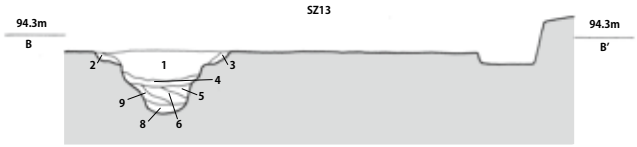
調査区の西側に位置しており、周囲には SZ15 が軸を揃えて隣接して築かれている。

【平面形態・規模】

墳丘の平面形は方形で、規模は長軸約 9.3 m × 短軸約 9.1 m、面積は約 84.63㎡を測る。主軸方位はN－ 25°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は各辺中央付近の幅が最大に拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。周溝は西隅のみ途切れているが、前述したように周溝







1.褐灰色粘質土	地山ブロック～2cm大を15%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
2.にぶい黄橙色粘質土	地山ブロック～2cm大を15%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
3.明黄褐色粘質土	地山ブロック～5cm大を40%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
4.褐灰色粘質土	地山ブロック～2cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
5.暗灰黄色粘質土	地山ブロック～2cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性が強い
6.黄灰色粘質土	地山ブロック～2cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性が強い
7.緑灰色粘質土	地山ブロック～3cm大を20%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性が強い
8.にぶい黄色粘質土	地山ブロック～1cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性が強い
9.にぶい黄褐色粘質土	地山ブロック～2cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性が強い

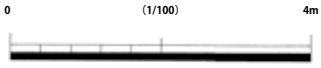


図 26　方形周溝墓（SZ13）平面図・断面図

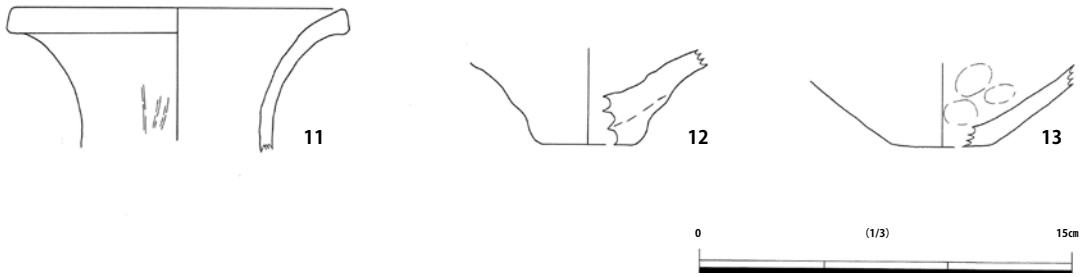


図 27　SZ13 出土遺物実測図

の隅は浅くなる特徴をもっているため、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。北溝は、最大幅が約 2.02 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.62 mである。西溝は、最大幅が 1.42 mで、幅が最大の位置の深さは 0.48 mである。南溝は、最大幅が 1.54 mで、幅が最大の位置の深さは 0.66 mである。東溝は、最大幅が 2.26 mで、幅が最大の位置の深さは 0.65 mである。

【周溝の堆積状況】

概ね上中下 3 層にわかれる。上層は褐灰色粘質土、中層は灰褐色粘質土、下層は灰色粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

遺物は、石器の剥片（14）と土師器（15）である。

15 は土師器の椀と推定され、口径 16.6㎝、残存部の器高 2.3㎝を測る。周溝 SD171 検出面での出土であるため混入の可能性がある。

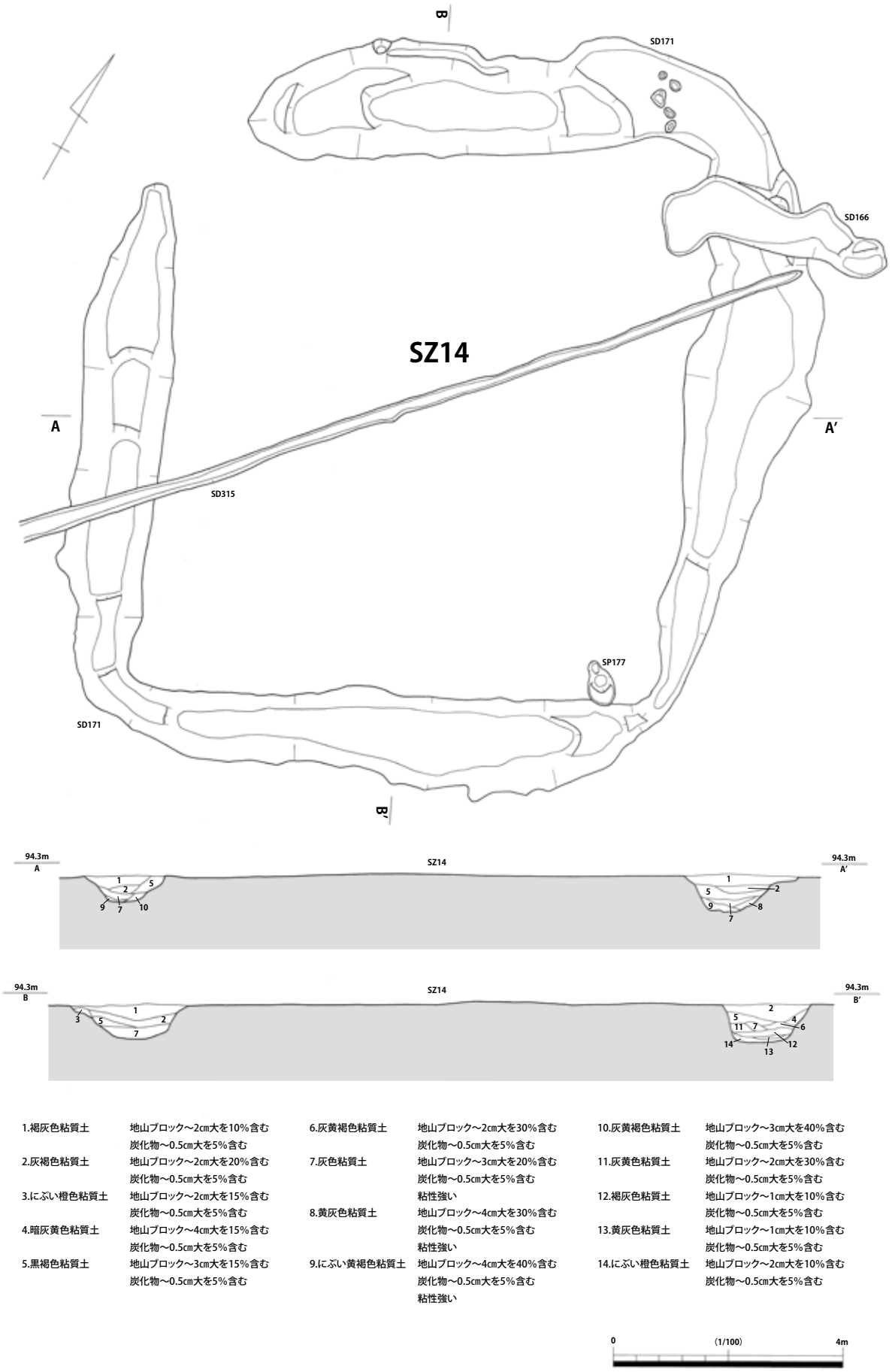
SZ15（図 30･31）

【検出位置・重複関係】

調査区の西端に位置しており、周囲には SZ14 が軸を揃えて隣接して築かれている。

【平面形態・規模】

調査区端にかかるため、周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の平面形は方形と推定される。検出できている東西軸で約 10.0 mを測る。主軸方位はN－ 34°－Wである。墳丘を取り囲む周溝の平面形は、内側（墳丘側）が真っ直ぐで墳丘の方形を強く意識しており、外側は各辺中央付近の幅が最大に拡がり、隅に向かうにつれて狭まる形状である。周溝の深さだが、各辺とも溝の幅が最大となる中央付近が最も深く、隅に向かうにつれて浅くなる。周溝は検出できている範囲では、東隅のみ途切れているが、前述したように周溝の隅は浅くなる特徴をもっているため、これが当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。北東溝は、最大幅が約 2.70 mで、幅が最大の位置の深さは約 0.86 mである。北西溝は、調査区外のため不明である。南西溝は、最大幅が 1.58 mで、幅が最



1.褐灰色粘質土	地山ブロック～2cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む	6.灰黄褐色粘質土	地山ブロック～2cm大を30%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む	10.灰黄褐色粘質土	地山ブロック～3cm大を40%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
2.灰褐色粘質土	地山ブロック～2cm大を20%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む	7.灰色粘質土	地山ブロック～3cm大を20%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性強い	11.灰黄色粘質土	地山ブロック～2cm大を30%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
3.にぶい橙色粘質土	地山ブロック～2cm大を15%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む	8.黄灰色粘質土	地山ブロック～4cm大を30%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性強い	12.褐灰色粘質土	地山ブロック～1cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
4.暗灰黄色粘質土	地山ブロック～4cm大を15%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む	9.にぶい黄褐色粘質土	地山ブロック～4cm大を40%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む 粘性強い	13.黄灰色粘質土	地山ブロック～1cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
5.黒褐色粘質土	地山ブロック～3cm大を15%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む			14.にぶい橙色粘質土	地山ブロック～2cm大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む

図 28　方形周溝墓（SZ14）平面図・断面図

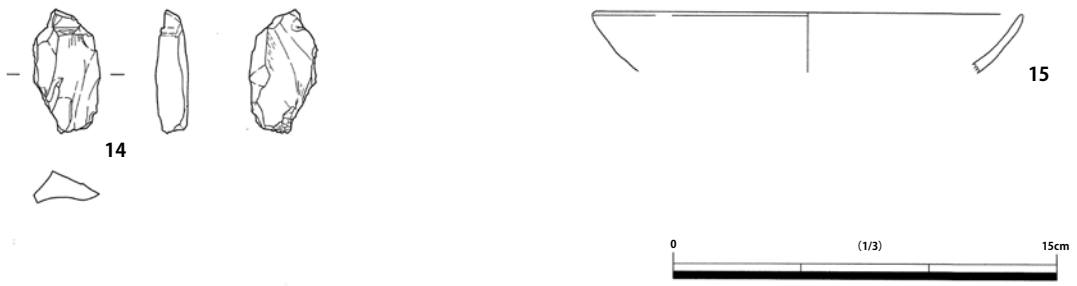


図 29　SZ14 出土遺物実測図

大の位置の深さは 0.78 mである。南東溝は、最大幅が 2.38 mで、幅が最大の位置の深さは 0.80 mである。

【周溝の堆積状況】

概ね上中下 3 層にわかれる。上層は褐灰色粘質土、中層は灰黄褐色粘質土、下層は浅黄橙色粘質土である。下層は墳丘盛土の流入土であると推定される。

【埋葬施設】

確認されなかった。

【遺物】

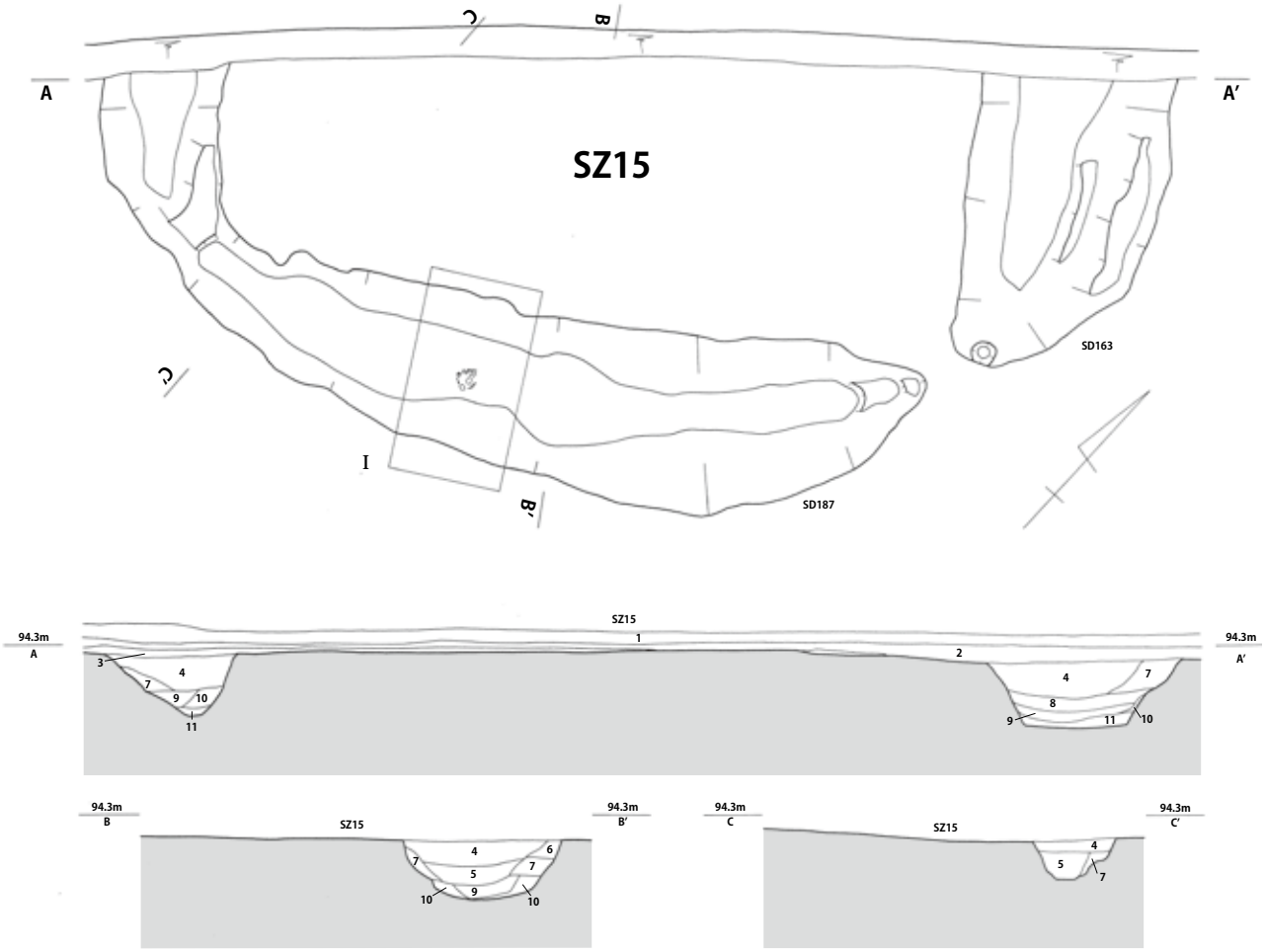
遺物は、弥生土器（16）と砥石（17）と土師器（18）である。

16 は弥生土器の甕で、南東周溝 SD187 の中央付近で溝底より浮いた位置で口縁部を下に向けた状態で出土した。出土状況より、周溝内に直接置かれたような状況は認められないため、墳丘上にあった供献土器が転落したものと考えられる。くの字状口縁甕で、口径 14.9㎝、最大径 23.4㎝、底径 5.9㎝、器高 27.9㎝を測る。く字形に外屈して短くひらく口縁部を持ち、口縁端部に面を作り、2 条の凹線紋が巡る。外面の調整は、体部下方に下向きのケズリ、体部上方に縦方向ハケメが施され、体部中位よりやや上で、刺突紋を横位に巡らせる。底部は平底で、中央に幅 2.0㎝ほどの欠損部があり、焼成後に穿孔された可能性が考えられる。17 は砥石で、16 の近辺で周溝底部より浮いた状態で出土した。長さ 9.8㎝、幅 4.5㎝、厚さ 3.7㎝、重さ 210.5 g を測る。18 は土師器の頸部で、北東周溝 SD163 検出面での出土であるため混入の可能性がある。

(3) 溝（SD16・SD17・SD82・SD89・SD246）

SD16・SD17・SX230・SX232（図 32）

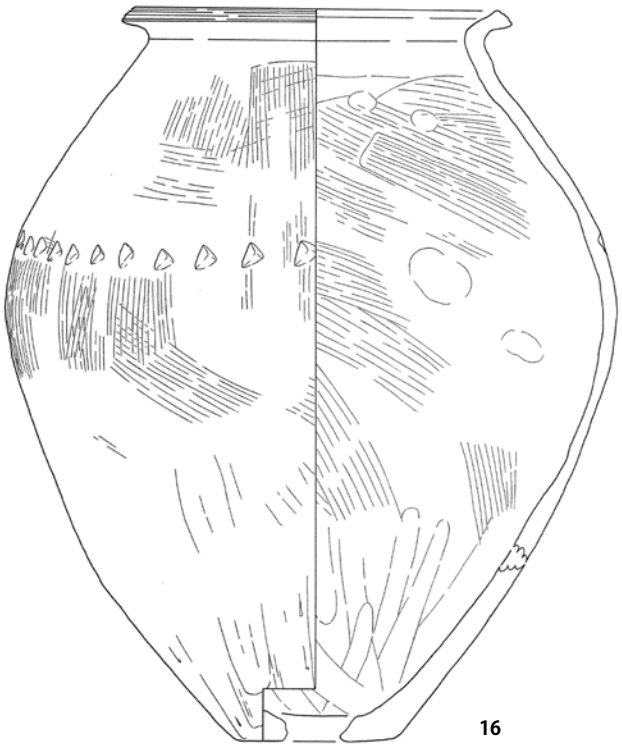
調査区の南西側で検出された溝である。SD16 は検出部の長さは約 3.70 m、幅は約 1.32 m、深さは約 0.29 mで断面はU字状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SD17 の長さは約 3.98 m、幅は約 0.74 m、深さは約 0.22 mで断面U字状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SX230 は平面不整形の窪み状の遺構である。長軸は約 1.88 m、短軸は約 1.70 m、深さは約 0.34 mで、断面は中央部が窪む。埋土は、1 層は黒褐色粘質土、2 層

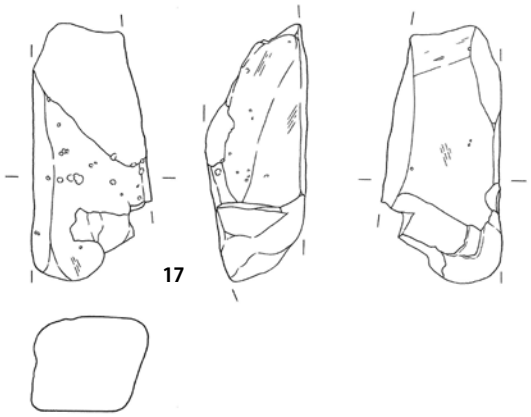


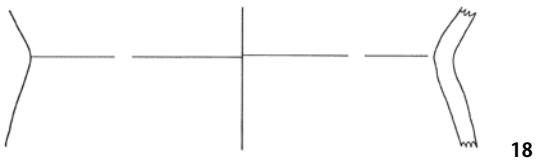
1.暗褐色粘質土【Ⅰ層】(近現代耕作土)
2.にぶい黄褐色粘質土【Ⅱ層】
3.にぶい黄橙色砂礫混じり粘質土
4.褐灰色粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
5.黒褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
6.灰褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を20%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
7.黄灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を40%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
8.灰黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
　炭化物～0.5cm大を30%含む
9.黒色粘土　地山ブロック～1cm大を10%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
10.褐灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を30%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
11.浅黄橙色粘質土　地山ブロック～4cm大を40%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む

0　平面図・断面図(1/100)　5m
0　出土状況図　(1/40)　2m

図 30　方形周溝墓（SZ15）平面図・断面図







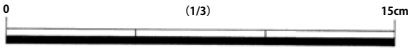


図 31　SZ15 出土遺物実測図

はにぶい黄橙色粘質土の２層である。SX232 は平面不整形の窪み状の遺構である。検出部の長軸は約 2.30 m、短軸は約 1.52 m、深さは約 0.28 mで断面舟底状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の１層である。これらそれぞれの遺構からは遺物も出土しておらず、その性格は不明であるが、周囲はほぼ方形周溝墓しか検出していないにもかかわらず、方形周溝墓の空白地となっていることより、一連の遺構群は大きく削平をうけた周溝の痕跡かもしれない。しかし、確かな根拠はない。

SD82（図 33）

調査区の南端で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 8.26 m、幅は約 0.79 m、深さは約 0.30 mを測る。埋土は、１層は黒褐色粘質土、２層は褐灰色粘質土の２層である。中央部が拡がる形状と埋土の状況より、方形周溝墓の周溝であると推定される。

SD89（図 33）

調査区の南東端で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 3.60 m、幅は約 1.32 m、深さは約 0.44 mを測る。埋土は概ね上下２層にわかれており、上層は灰褐色粘質土、下層は褐灰色系の粘質土である。方形周溝墓 SZ7 と SZ8 の共有の周溝 SD90 を切っている。小片のため図化できなかったが、弥生土器ないし土師器の小片が出土している。性格・時期は SZ7・SZ8 以降という以外、判然としない。

SD246（図 33）

調査区の西端で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 2.76 m、幅は約 0.24 m、深さは約 0.22 mを測る。埋土は、黒褐色粘質土の１層である。中央部が拡がる形状と埋土の状況より、方形周溝墓の周溝であると推定される。

SD202（図 34）

調査区西側で検出された溝である。方形周溝墓 SZ14 の周溝 SD171 に切られている。長さは約 8.68 m、幅は約 0.84 m、深さは約 0.16 mを測り、溝の底部は平坦である。出土遺物がないため、SZ14 以前としか言えない。遺構の性格・時期とも判然としない。

（4）土坑（SX179・SX180）

SX179（図 35）

調査区の中央付近で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺約 2.20 m、短辺は残存部で約 1.26 m、深さは約 0.16 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の１層である。遺物は出土しておらず、方形周溝墓 SZ14 の周溝 SD171 に切られていることより、それ以前ということしかわからない。

SX180（図 35）

調査区の中央付近で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺約 2.46 m、短辺は

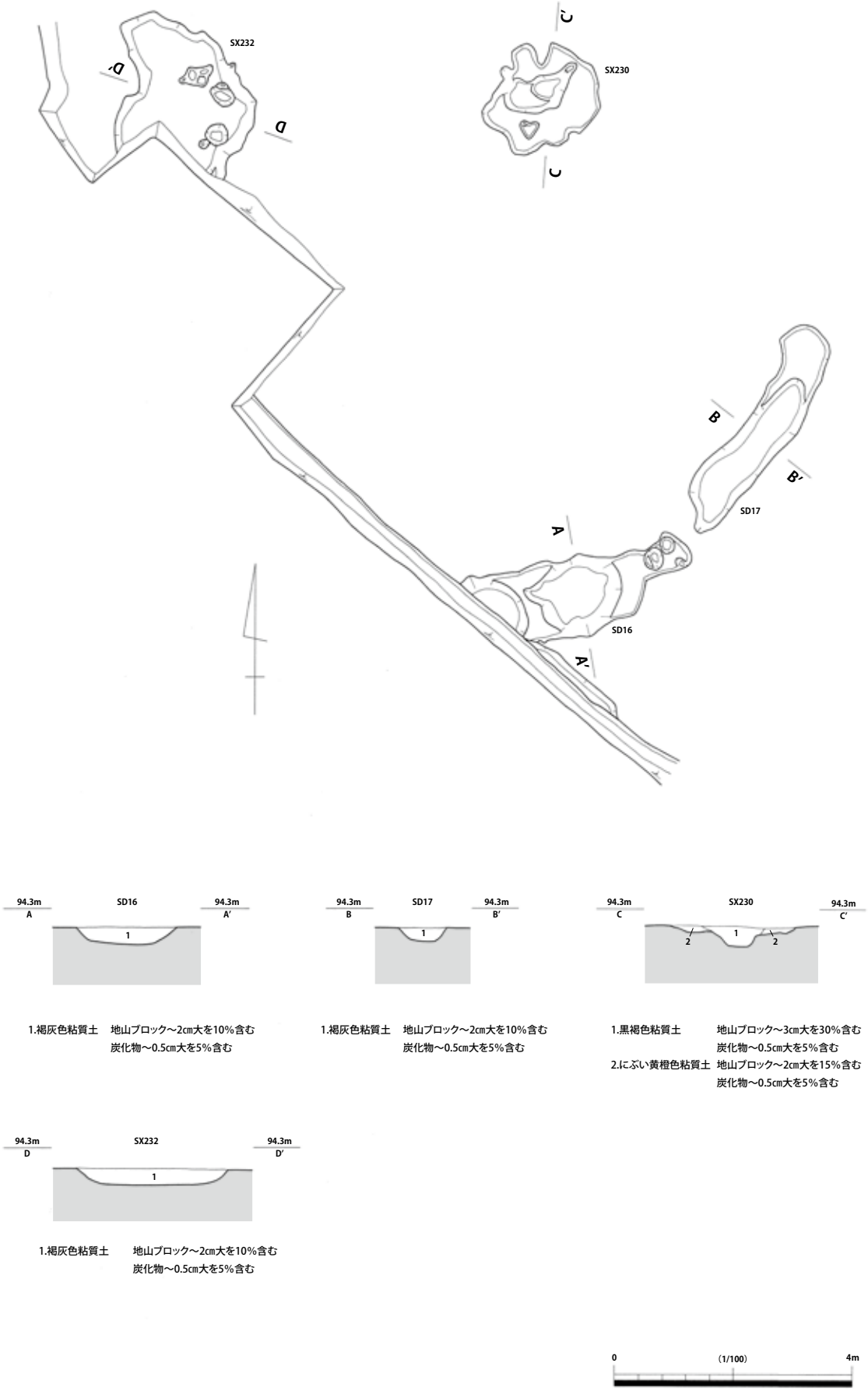
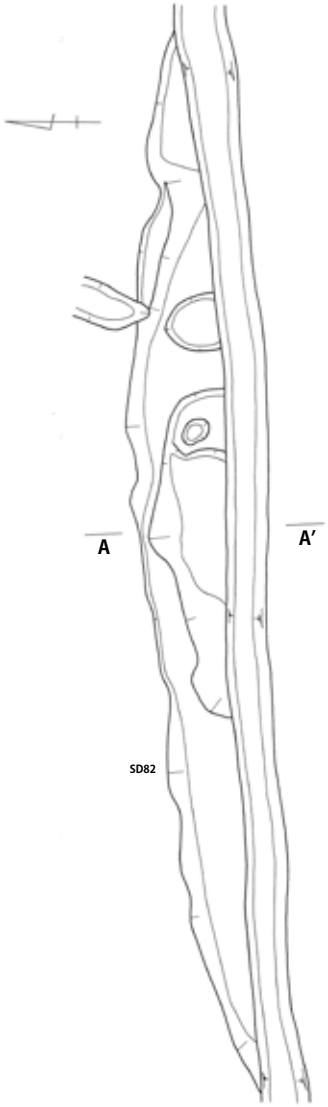
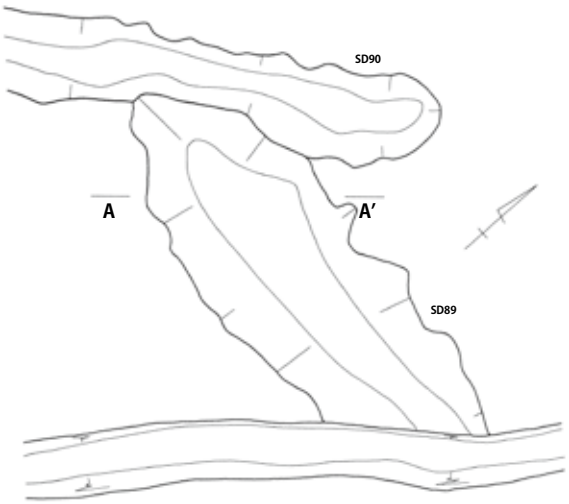
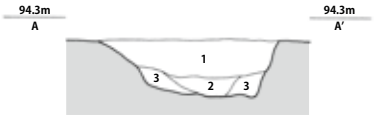


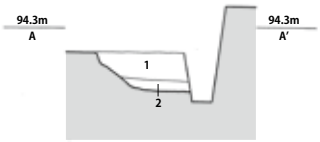
図 32　各遺構（SD16・SD17・SX230・SX232）平面図・断面図



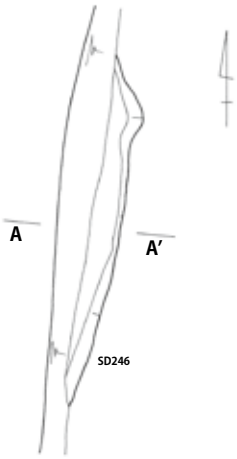


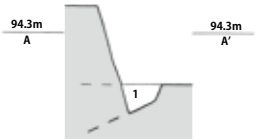


1. 灰褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 褐灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 灰黄褐色砂礫混じり粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む



1. 黒褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 褐灰色粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む





1. 黒褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

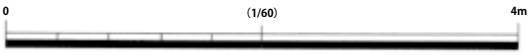


図 33　各遺構（SD82・SD89・SD246）平面図・断面図

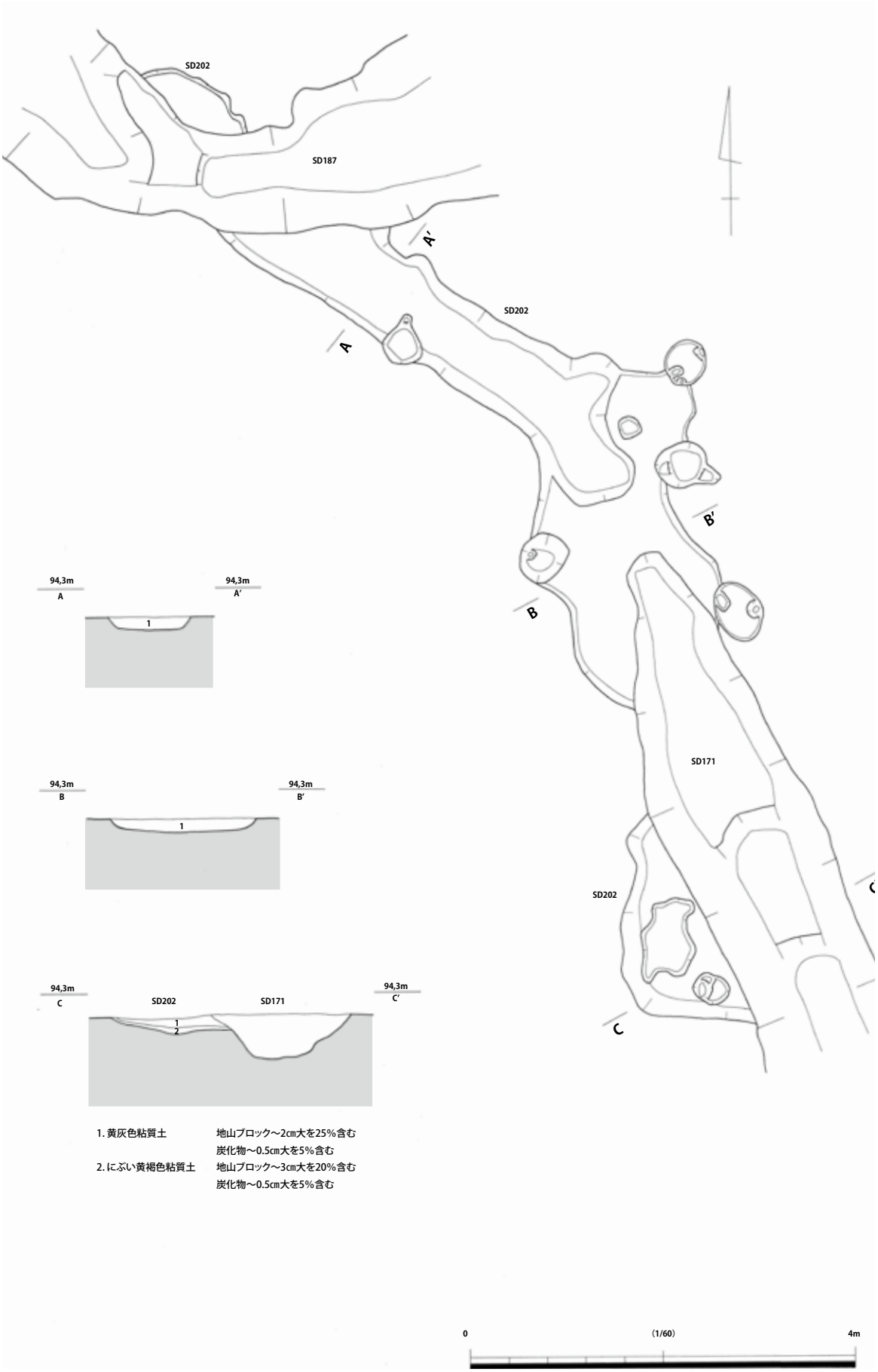


図 34　各遺構（SD202）平面図・断面図

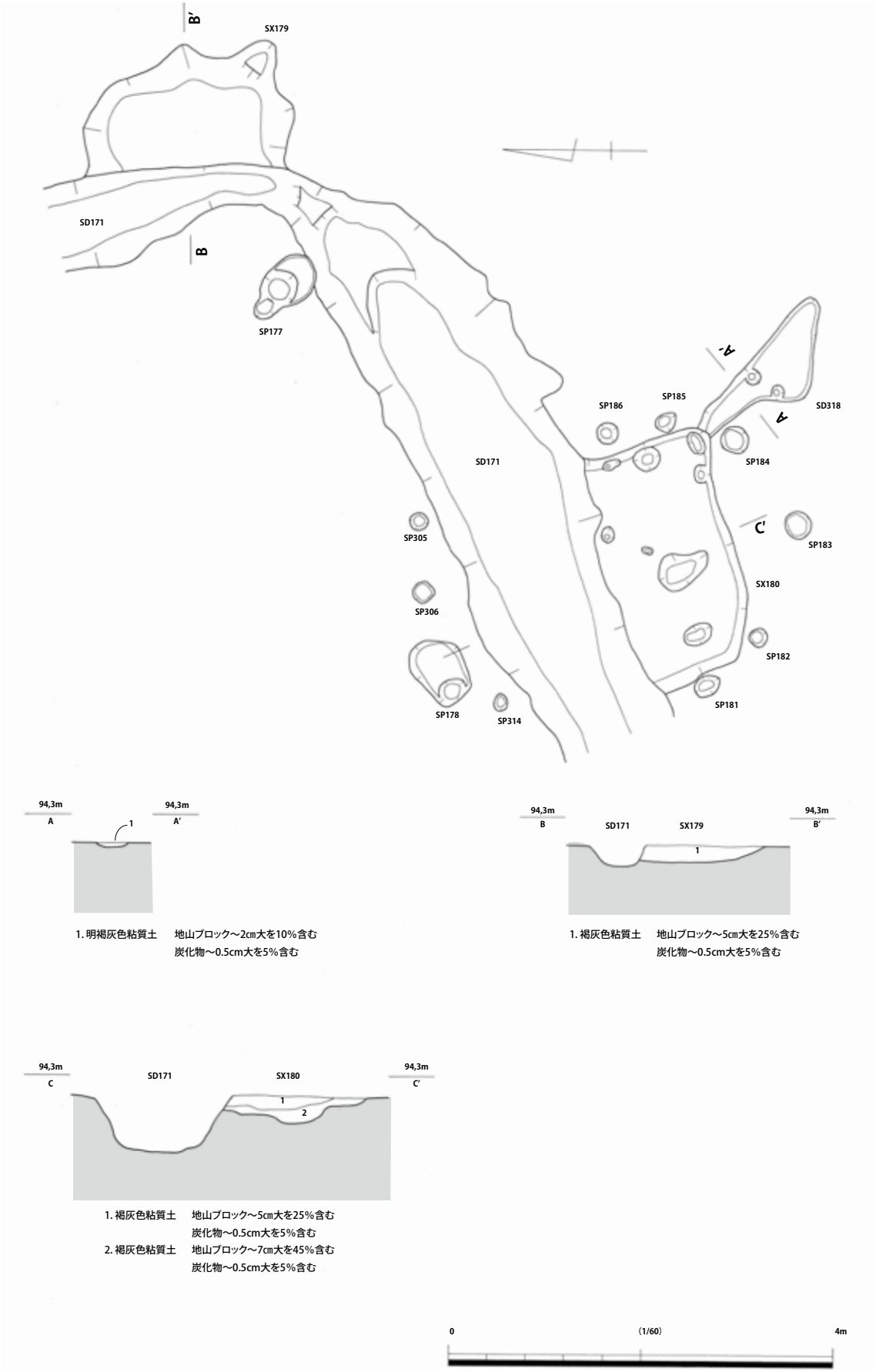


図 35　各遺構（SX179・SX180・SD318）平面図・断面図

残存部で約 1.40 m、深さは約 0.28 mを測る。埋土は褐灰色粘質土で、ブロックの混じりの多寡で上下層に分けられる。SX179 同様、遺物は出土しておらず、方形周溝墓 SZ14 の周溝 SD171 に切られていることより、それ以前ということしかわからない。遺構の性格も判然としないが、周囲に小穴が点在していることより、これらと一帯となる遺構であると推定される。

(5) 小結

今回の調査区では、全域にわたって弥生時代中期の墓域を確認した。墓域は方形周溝墓で構成されており、その数は 15 基で、一部調査区端にかかっている溝もあるため、さらに拡がる可能性がある。検出した方形周溝墓は、墳丘の規模や軸方向、周溝の形態や規模、周溝の共有の有無など様々な属性の組合わせを有しており、多種多様な様相を確認した。また、その構築時期も弥生時代中期前葉から後葉（Ⅱ期からⅣ期）にわたっており、同じ墓域の中で時期の進展と方形周溝墓の変化を検討することができる調査成果である。

参考文献

伊庭功　1997「近江弥生中期土器の地域色」『滋賀考古』第 18 号

伊庭功　2003「近江南部の中期弥生土器―様式と器種構成―」『古代文化』第 55 巻第 5 号

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会　1985『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』

彦根市　1960『彦根市市』上冊

第３節　奈良時代～平安時代前期

（1）概要（図 36）

遺構密度は低いが、奈良時代から平安時代前期にかけての集落関連遺構を検出した。主な遺構は掘立柱建物２棟、柵４条、複数の土坑、井戸１基であった。遺構は調査区北東側に纏まっている。

（2）掘立柱建物（SB1・SB2）

SB1（図 37、表 3･4）

調査区の西側で検出された掘立柱建物である。SB2 と隣接して建っている。建物のプランは梁行２間（約 3.95 m）× 桁行５間（7.35 m）、建物面積は約 29.03㎡の規模を持ち、建物の主軸はＮ－ 58°－Ｅの方位をとる。柱間は梁行で約 1.30 m～ 3.95 m、桁行で約 1.30 m～ 1.72 mを測る。柱穴は、SP278 ～ SP280・SP283・SP325 ～ SP329・SP333 ～ SP336 で構成され、掘り方の平面形は円形で、直径は約 0.36 ～ 0.59 m、深さは 0.15 ～ 0.49 mを測る。建物を構成する柱穴からの出土遺物はないが、SP335 を切る SP164 より 10 世紀代の灰釉薬陶器が出土していることより、当該期が SB1 の下限と推定される。また、調査区全体や SE61 の出土遺物は概ね８～９世紀代で纏まっていることより、現段階では、SB1 の時期は奈良時代～平安時代前期と考えておきたい。

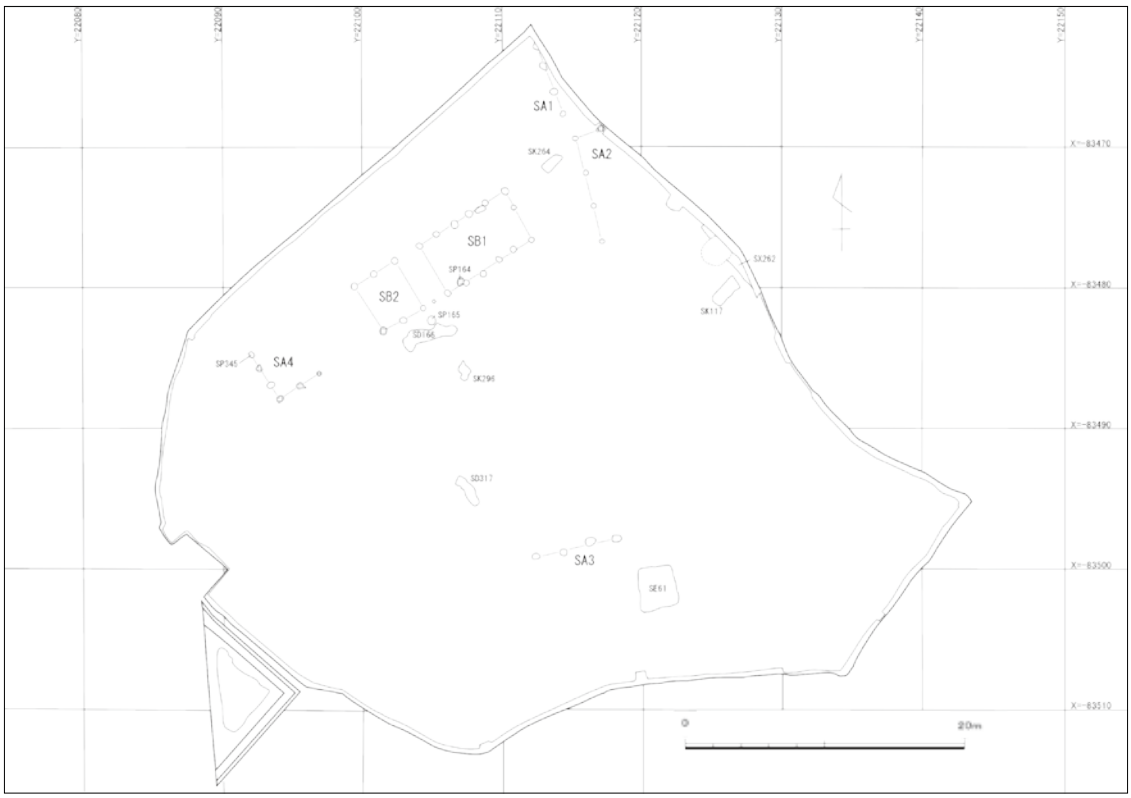


図 36　奈良時代～平安時代前期の主な遺構図

SB2（図 38、表 3･4）

調査区の西側で検出された建物である。SB1 と隣接して建っている。建物のプランは梁行 1 間（3.95 m）× 桁行 2 間（3.45 m）、建物面積は約 13.55㎡の規模を持ち、建物の主軸は N－58°－E の方位をとる。柱間は梁行で約 3.95 m、桁行で約 1.65 ～ 1.78 m を測る。柱穴は、SP297･SP330 ～ SP332･SP337･SP338 で構成され、掘り方の平面形は円形で、直径は約 0.42 ～ 0.55 m、深さは約 0.32 ～ 0.42 m を測る。建物を構成する柱穴からの出土遺物がないため、時期は判然としないが、隣接する SB1 と同時期と推定される。

（3）柵（SA1・SA2・SA3・SA4）

SA1（図 39、表 4）

調査区の北端で検出された柵である。主軸方向は N－21°－W の方位を示す。柱間は約 1.54 ～ 1.70 m を測る。柱穴は、SP124・SP126 ～ SP128 で構成され、掘り方の平面形は楕円形を基本とし、長軸は約 0.46 ～ 0.68 m、短軸は約 0.32 ～ 0.38 m、深さは約 0.08 ～ 0.28 m を測る。柵を構成する柱穴からの出土遺物がないため、時期は不明である。

SA2（図 39、表 4）

調査区の北端で検出された柵である。主軸方向は N－14°－W の方位を示す。柱間は約 1.92 ～ 2.60 m を測る。柱穴は、SP129・SP266・SP270 ～ SP272 で構成され、掘り方の平面形は楕円形を基本とし、直径は約 0.33 ～ 0.47 m、深さは約 0.12 ～ 0.20 m を測る。柵を構成する柱穴からの出土遺物がないため、時期は不明である。

SA3（図 40、表 4）

調査区の南側で検出された柵である。主軸方向は N－77°－E の方位を示す。柱間は約 1.94 ～ 2.10 m を測る。柱穴は、SP56・SP58 ～ SP60 で構成され、掘り方の平面形は円形を基本とし、直径は約 0.45 ～ 0.53 m、深さは約 0.09 ～ 0.12 m を測る。

遺物は SP56 から須恵器（21）が出土した。

21 は須恵器の坏身の底部である。底径は 10.0㎝、残存器高 1.2㎝を測る。

SA4（図 36、表 4）

調査区の西側で検出された柵である。主軸方向は N－58°－E の方位を示す。柱間は約 1.15 ～ 1.71 m を測る。柱穴は、SP340 ～ SP345 で構成され、掘り方の平面形は円形を基本とし、直径は約 0.39 ～ 0.55 m、深さは約 0.13 ～ 0.44 m を測る。

遺物は SP345 から須恵器（25）が出土した。

25 は須恵器の坏身である。口径 13.0㎝、底径 7.2㎝、器高は 3.9㎝を測る。立ち上がりは内傾度が高く先端を丸める。SA4 は SB1・SB2 の南西延長線上に位置し、主軸方向も同じくするため一連の遺構と推定される。

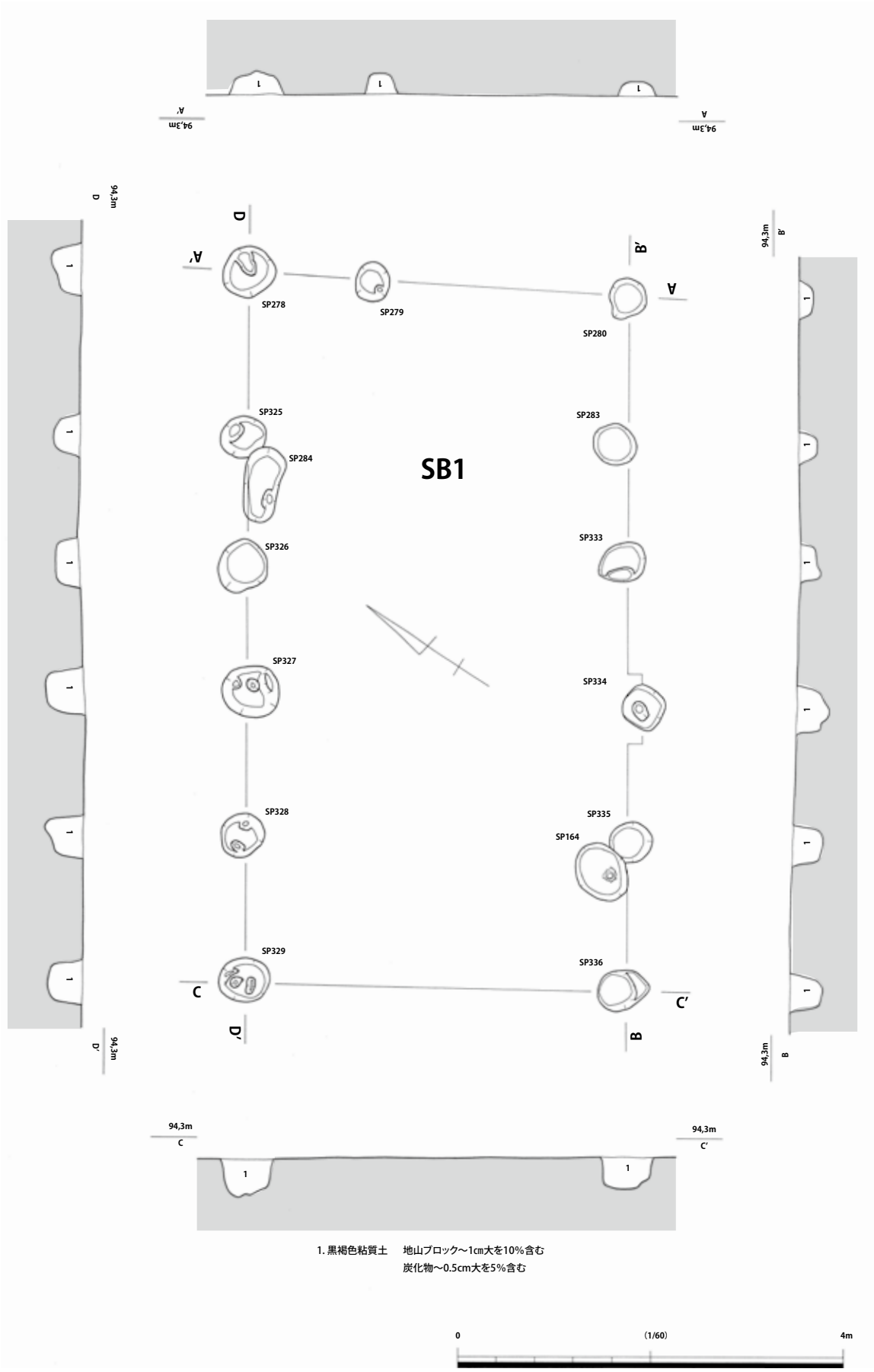
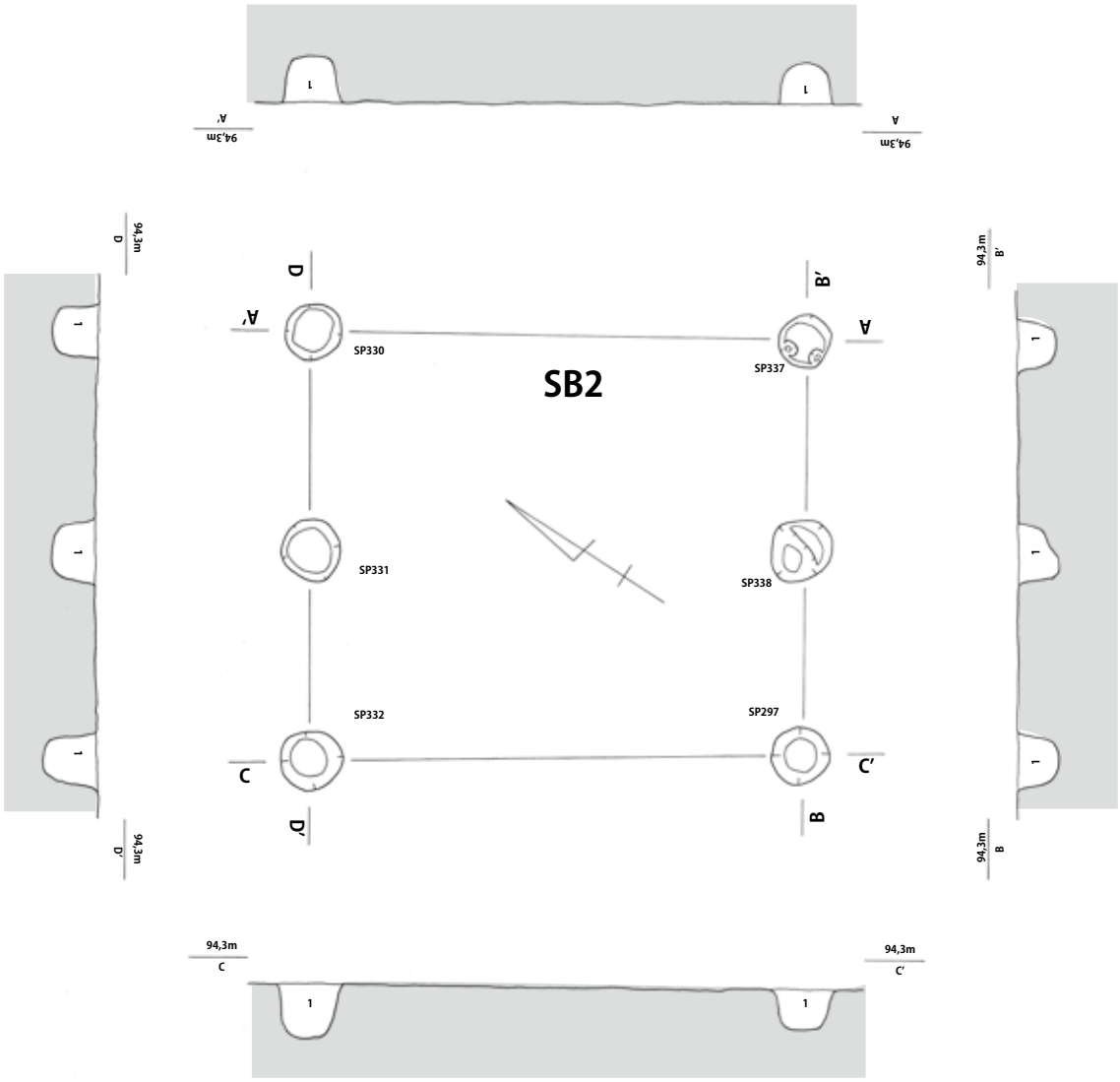


図 37　掘立柱建物（SB1）平面図・断面図



1.灰褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

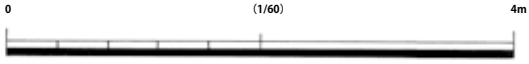


図 38　掘立柱建物（SB2）平面図・断面図

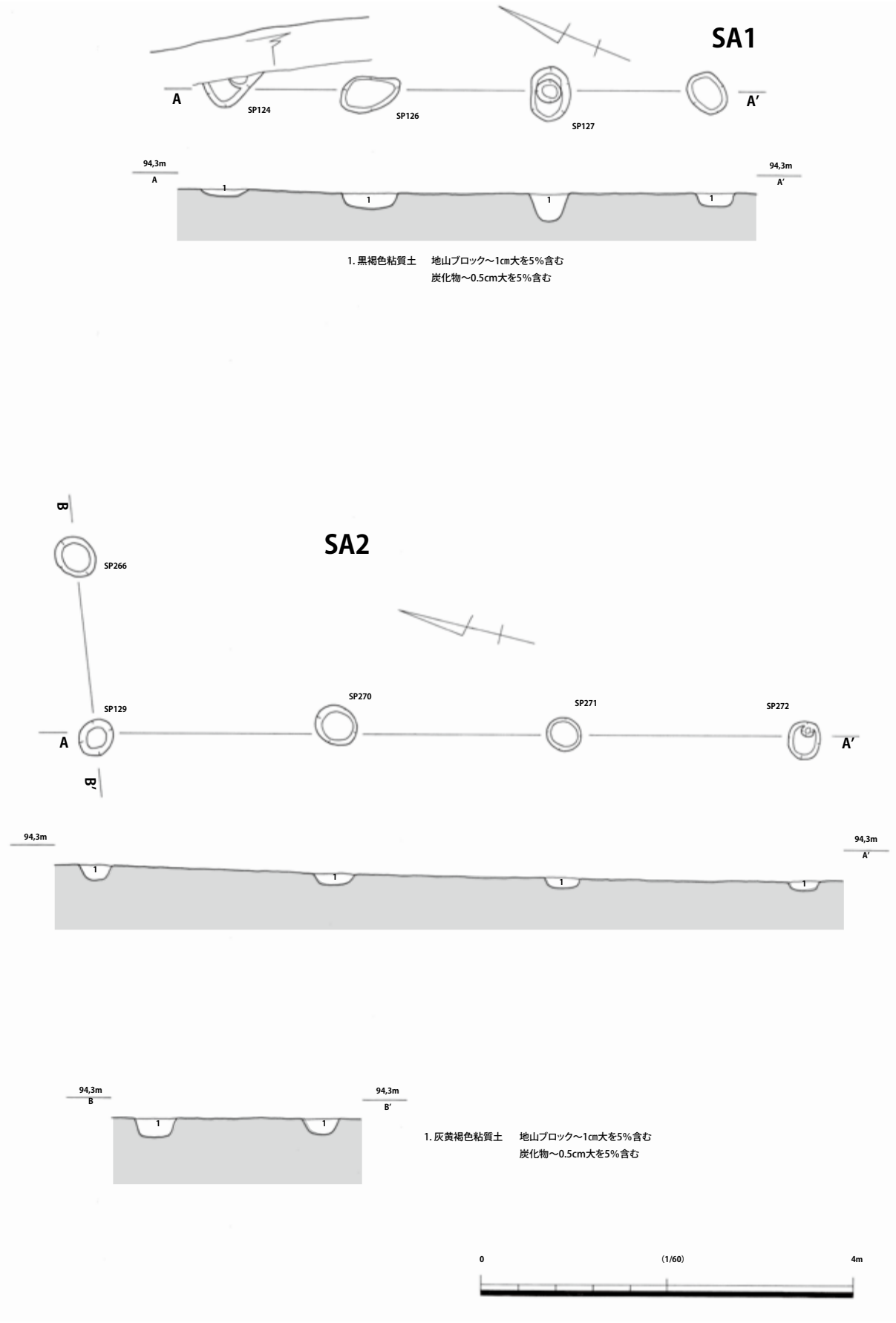


図 39　柵（SA1・SA2）平面図・断面図

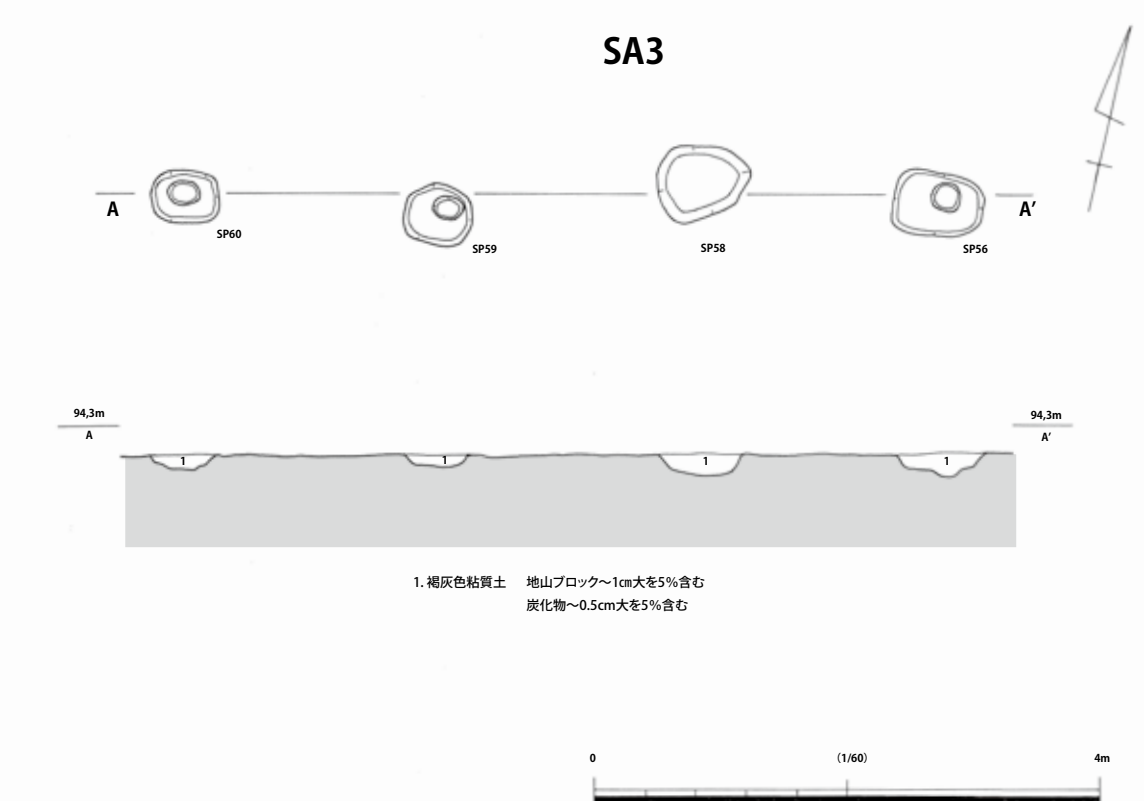


図 40　柵（SA3）平面図・断面図

(4) 溝（SD166・SD317）

SD166（図 41）

調査区の西側で検出された溝である。長さ約 4.05 m、幅約 0.86 m、深さ約 0.23 mで断面U字状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD317（図 41）

調査区の中央付近で検出された溝である。長さ約 2.46 m、幅約 0.75 m、深さ約 0.05 m で非常に浅い。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、土師器（19）と砥石（20）が出土した。

19 は土師器の甕で、口径 19.6㎝、残存器高 7.2㎝を測る。頸部がく字形に外屈して短くひらく口縁部を持ち、端部に面をもつ。体部外面にタタキが施される。20 は砥石で長さ 14.3㎝、幅 8.3㎝、厚さ 4.6㎝、重さ 659 g を測る。

(5) 土坑（SK117）

SK117（図 41）

調査区の東側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約 2.20 m、短辺は約 0.88 m、深さは約 0.08 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は出土しておらず、時期は判然としない。

表３　掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行（間）	梁行長（m）	桁行長（m）	床面積（㎡）	主軸方位	挿図	写真図版
SB1	2×5	3.95	7.35	29.03	N－58°－E	37	26
SB2	1×2	3.95	3.43	13.55	N－58°－E	38	26

表４　掘立柱建物、柵柱穴一覧

建物	遺構	平面形	規模（m）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
			長さ（長幅）	幅（短幅）	深さ				
SB1	SP278	円	0.55	0.49	0.32			37	26
	SP279	円	0.40	0.36	0.22			37	26
	SP280	円	0.44	0.40	0.15			37	26
	SP283	円	0.47	0.42	0.19			37	26
	SP325	円	0.49	0.42	0.29		SP284に切られている。	37	26
	SP326	円	0.57	0.51	0.25			37	26
	SP327	円	0.59	0.52	0.40			37	26
	SP328	円	0.47	0.44	0.49			37	26
	SP329	円	0.53	0.46	0.36			37	26
	SP333	円	0.52	0.41	0.22			37	26
	SP334	円	0.48	0.44	0.34			37	26
	SP335	円	0.45	0.41	0.32		SP164に切られている。	37	26
	SP336	円	0.54	0.41	0.34			37	26
SB2	SP297	円	0.47	0.46	0.33		SD171を切っている。	38	26
	SP330	円	0.47	0.42	0.38			38	26
	SP331	円	0.52	0.47	0.35			38	26
	SP332	円	0.50	0.49	0.42			38	26
	SP337	円	0.43	0.42	0.33			38	26
	SP338	円	0.55	0.49	0.32			38	26
SA1	SP124	楕円	0.46	0.36	0.08			39	27
	SP126	楕円	0.68	0.37	0.15			39	27
	SP127	楕円	0.56	0.42	0.28			39	27
	SP128	円	0.46	0.38	0.13			39	27
SA2	SP266	円	0.47	0.40	0.20			39	27
	SP129	円	0.41	0.35	0.17			39	27
	SP270	円	0.47	0.41	0.12			39	27
	SP271	円	0.38	0.35	0.12			39	27
	SP272	円	0.40	0.33	0.12			39	27
SA3	SP56	隅丸方	0.70	0.49	0.20	須恵器（21）		40	—
	SP58	楕円	0.74	0.55	0.18			40	—
	SP59	円	0.53	0.48	0.09			40	—
	SP60	円	0.52	0.45	0.12			40	—
SA4	SP340	円	0.40	0.39	0.44		SD171を切っている。	—	—
	SP341	円	0.52	0.43	0.42		SD202を切っている。	—	—
	SP342	円	0.52	0.45	0.32		SD202を切っている。	—	—
	SP343	円	0.55	0.44	0.13			—	—
	SP344	円	0.43	0.40	0.26		SD202を切っている。	—	—
	SP345	円	0.49	0.43	0.32	須恵器（25）	SD202を切っている。	—	—

（　）内は残存長、又は復元数値

SX262（図 41）

調査区の北東端で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明だが、平面形は隅丸（長）方形と推定される。検出部の長辺は約 5.92 m、短辺は約 0.76 m、深さは 0.12 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、須恵器（26）が出土している。

26 は須恵器の坏蓋である。口径 13.0㎝、残存器高 1.2㎝を測る。口縁端部をわずかに下

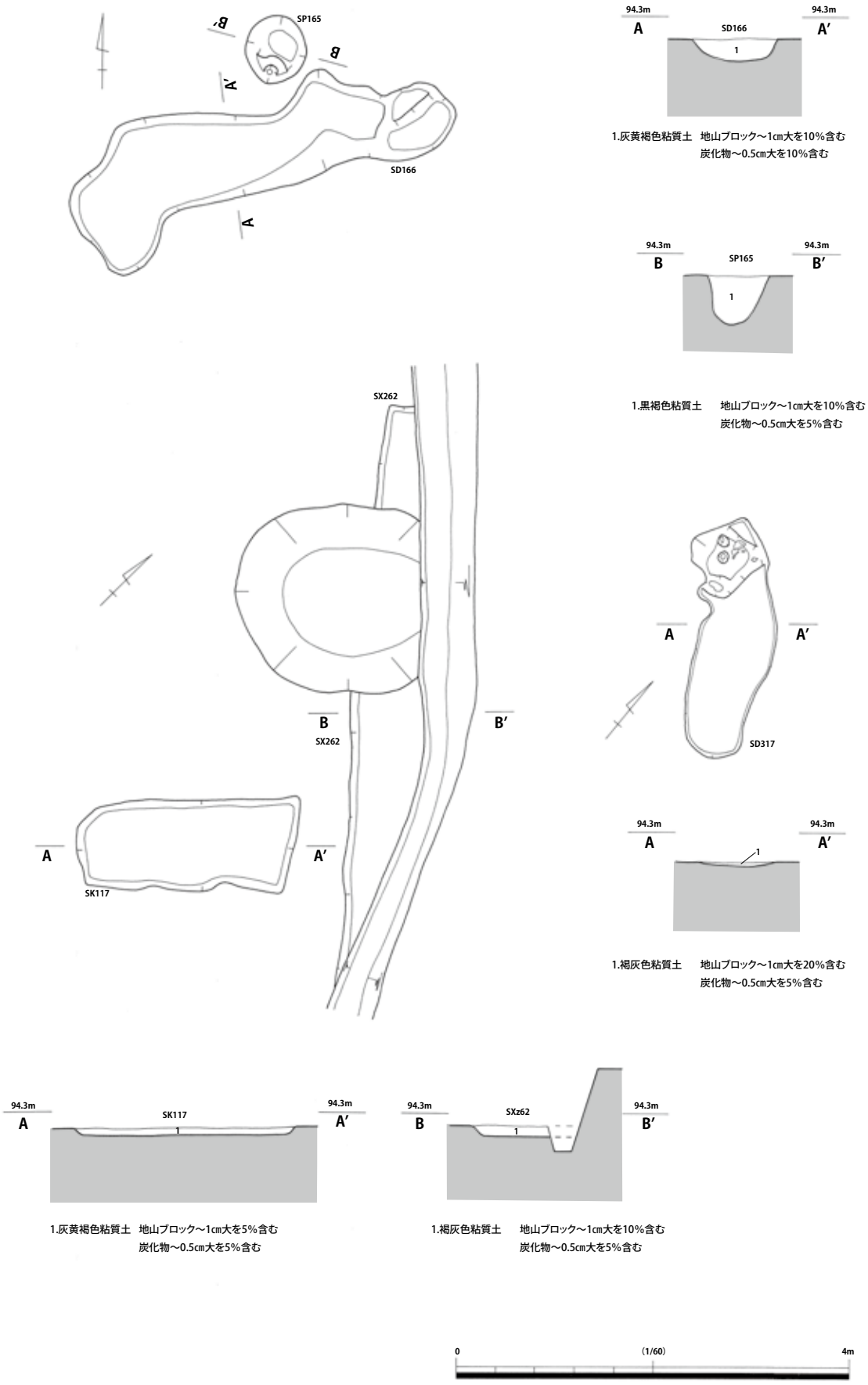


図 41　各遺構（SK117・SP165・SD166・SX262・SD317）平面図・断面図

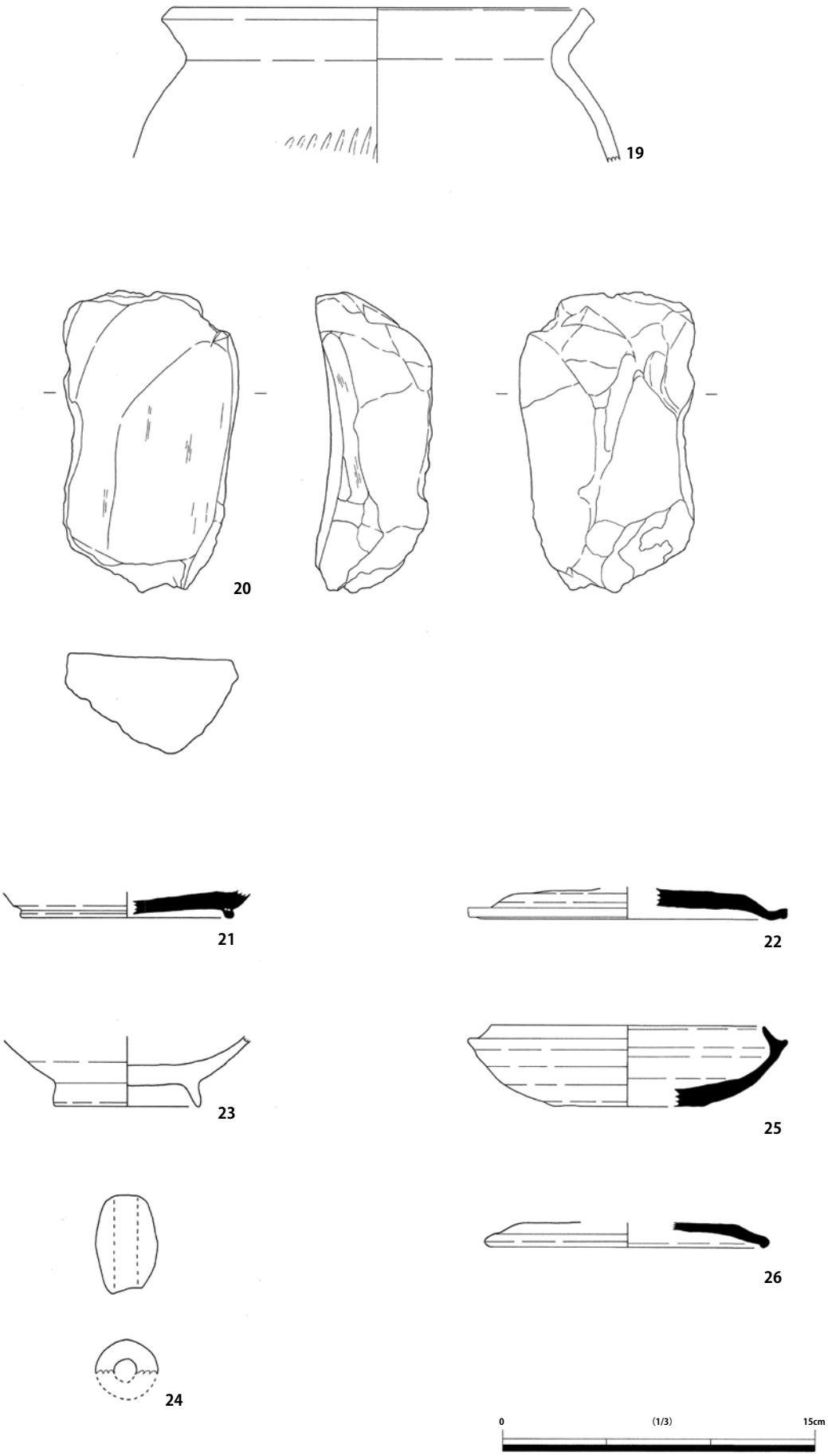
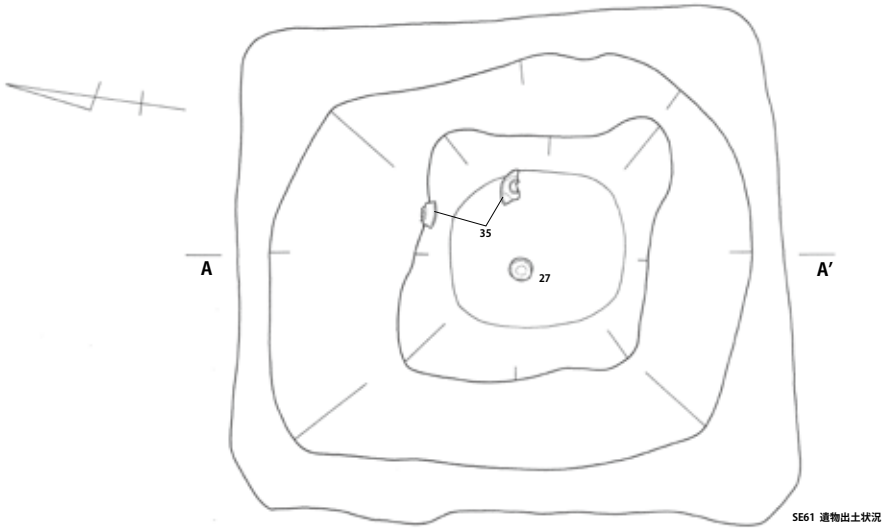
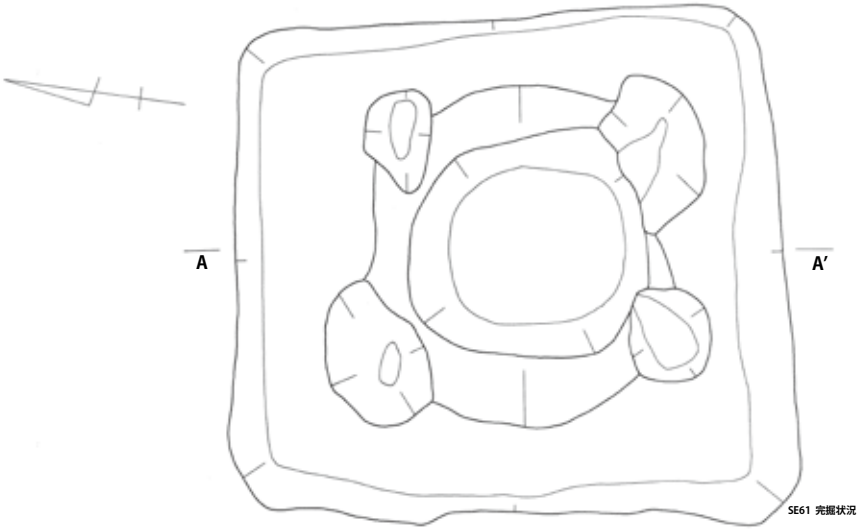


図 42　各遺構出土遺物実測図





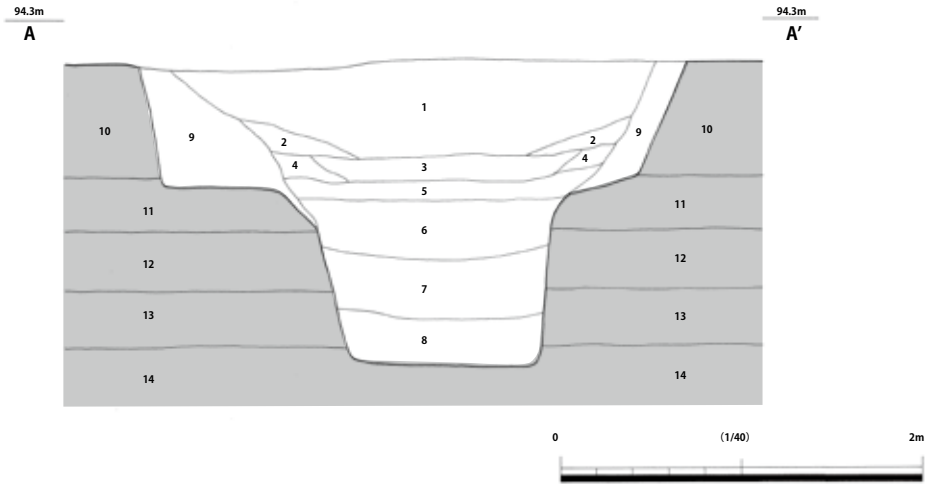


図 43　井戸（SE61）平面図・断面図

1. 灰黄褐色砂礫混じり粘質土	地山ブロック～3㎝大を20%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
2. にぶい黄褐色粘質土	地山ブロック～2㎝大を30%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 灰黄褐色粘質土	地山ブロック～3㎝大を30%含む 炭化物～0.5cm大10%含む
4. にぶい黄橙色粘質土	地山ブロック～2㎝大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
5. 褐灰色粘質土	地山ブロック～3㎝大を30%含む 炭化物～0.5cm大を15%含む
6. 暗褐灰色粘質土	地山ブロック～2㎝大を10%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
7. 黒褐灰色粘質土	地山ブロック～1㎝大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
8. 黒褐灰色粘土	地山ブロック～0.5㎝大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
9. 暗褐灰砂礫混じり色粘質土	地山ブロック～3㎝大を30%含む 炭化物～0.5cm大を10%含む
9. 明黄褐色粘質土	
10. 明褐色粘質土	
11. オリーブ灰色粘質土	
12. オリーブ黒色粘土	
13. 灰色砂層（湧水層）	

方に屈曲させる。8 世紀後半～ 9 世紀初頭頃と思われる。

調査区端にかかっており、わずかしか検出できていないため遺構の性格は不明だが、今回の調査の北隣で実施した第 13 次調査において、平面形態・主軸方向・遺構の深さなどが非常に似た遺構が確認されている。13 次調査では竪穴建物として報告されており、銅製差金など特殊な遺物も出土している。

（6）井戸（SE61）

SE61（図 43･44）

調査区の南側で検出された井戸である。平面形は隅丸方形を呈し、長辺は約 3.15 m、短辺は 2.95 mを測る。約 1.7 mの深さで湧水層に達している。井戸枠の部材などは確認されなかったが、井戸枠の抜き取り痕と井戸の掘り方の埋土の境界が明確に識別されたため、井戸廃絶後の埋土、井戸の掘り方埋土の順に掘削をおこなった。井戸廃絶後の埋土を丁寧に除去した結果、四隅で井戸枠の痕跡と思われる柱穴が確認された。この柱穴が隅柱の痕跡と考えると、約 1.5 m四方の方形の隅柱どめの井戸枠であった公算が高い。すなわち、縦板組隅柱横桟どめ、または、横板組隅柱どめのいずれかの井戸枠であったと推定される。

SE6 の埋土は 9 層に分かれている。その内、井戸廃絶後の埋土は第 1 ～ 8 層で、井戸の掘り方は第 9 層である。

1 層からの出土遺物は、土師器（27・28）と須恵器（29 ～ 33）、灰釉陶器（34・35）、土製品（36・37）である。

27・28 は土師器の坏である。1 は全く割れておらず完形の形で出土した。口径 14.0㎝、底径 7.0㎝、器高は 3.9㎝を測る。底部より緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部を有し、端部にタール痕が認められる。2 は、口径 12.7㎝、底径 6.7㎝、器高 3.6㎝を測る。若干上げ底気味の底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部を有す。器表の内外面に赤褐色の顔料を塗布している。29 は須恵器の坏蓋で、口径 14.0㎝、残存器高 0.9㎝を測る。天井部が平坦で端部は丸める。30 ～ 32 は須恵器の坏身である。いずれも平底の坏身で底部と体部との境界が明瞭に屈曲する。口縁は緩やかに内湾にしながら立ち上がる。30 は口径

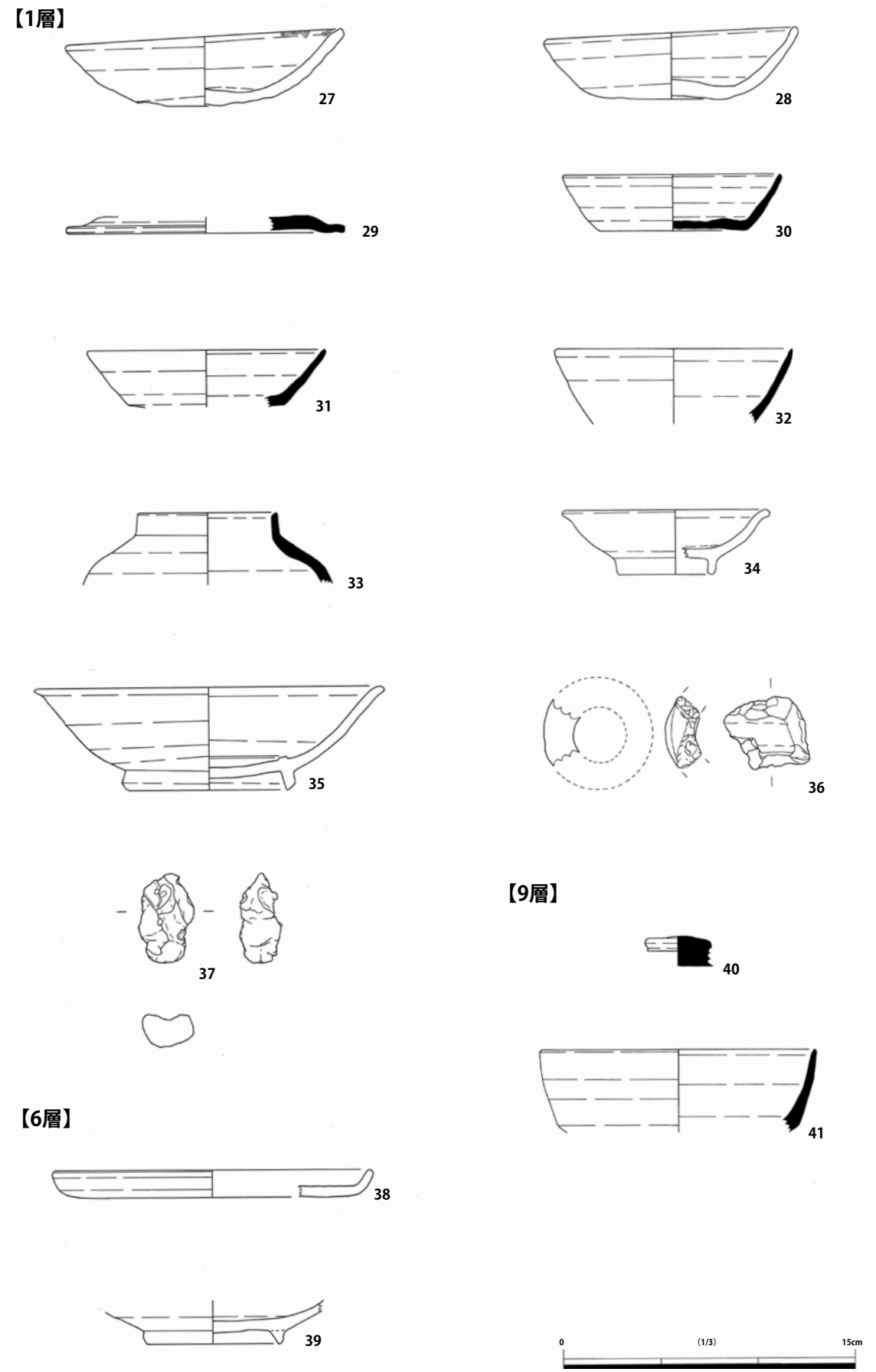


図 44　SE61 出土遺物実測図

11.0㎝、底径 7.3㎝、器高 2.9㎝、31 は口径 12.0㎝、底径 8.0㎝、器高 2.9㎝、32 は口径 12.0㎝、残存器高 3.8㎝を測る。33 は須恵器の短頸壷である。口径 7.0㎝、残存器高 3.7㎝を測る。

34・35 は灰釉陶器の椀である。34 は口径 10.3㎝、底径 4.8㎝、器高 3.3㎝を測る。口縁端部は弱く外反する。35 は口径 17.8㎝、底径 8.2㎝、器高 5.2㎝を測る。施釉は外面は高台より上部、内面は全体に施される。また、内面には重ね焼きの痕跡が認められる。36 は鞴の羽口である。縦 3.5㎝、横 4.4㎝、厚さ 1.5㎝を測る小片であるが、径を復元すると、外径 5.6㎝前後、内径 2.7㎝前後を測る。36 も鞴の羽口か。縦 5.1㎝、横 2.8㎝、厚さ 2.1㎝を測る。一部溶解して黒色にガラス質化している。

6 層からの出土遺物は、土師器（38）と灰釉陶器（39）である。

38 は土師器の皿である。口径 16.0㎝、底径 14.7㎝、器高 1.4㎝を測る。平底に口縁部が短く立ち上がる。器表の内外面に赤褐色の顔料を塗布している。39 は灰釉陶器の椀である。底径 6.7㎝、残存器高 2.2㎝を測る。外面の高台部分、内面見込みには施釉されていない。

9 層からの出土遺物は、須恵器（40・41）である。

40 は須恵器坏蓋の宝珠である。宝珠の直径 3.4㎝、残存器高は 1.5㎝を測る。偏平な擬宝珠形の摘まみである。41 は須恵器の坏身である。口径 14.0㎝、残存器高 4.2㎝を測る。

遺構の年代であるが、井戸廃絶後の埋土である 1・6 層からの出土遺物は概ね 9 世紀代におさまる。一方、掘り方の埋土である 9 層から出土した須恵器の宝珠（40）は 8 世紀代と考えられる。掘り方の遺物が少ないため、混入の可能性は否定できないが、現段階では井戸 SE61 の構築時期は 8 世紀代、廃絶時期は 9 世紀代と考える。

（7）小結

今回の調査区では、奈良時代から平安時代前期の集落関連遺構・遺物を確認した。検出した遺構は、掘立柱建物 2 棟、柵 4 条、複数の土坑、井戸 1 基などである。遺構密度は決して高くなかったが、柱通りの良好な掘立柱建物、区画施設である柵、大型の井戸、また井戸から出土した鋳造関連遺物である鞴の羽口など、福満遺跡周辺の古代集落の様相を検討する上で、重要な成果を得ることができた。

参考文献

大﨑哲人　1993「土師器甕の変遷とその背景　―近江型土師器成立への諸段階―」『紀要』第 6 号　財団法人滋賀県文化財保護協会

葛野泰樹・吉田秀則　1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会

田辺昭三　1981『須恵器大成』 角川書店

第４節　中世以降

（1）概要（図 45）

中世以降の遺構として、耕作に伴う素掘り溝と石組みの井戸を確認した。

（2）溝（SD33・SD35 ～ SD37・SD188・SD315）

SD33・SD35 ～ SD37・SD188・SD315（図 45）

調査区の南西側で確認された溝である。幅 0.3 m前後を測り、N－ 40°－E方向にまっすぐ伸びる。耕作に伴う素掘り溝と思われるが遺構の時期を示す出土遺物がないため、遺構との切り合い関係より、現段階では中世以降としておく。

（3）井戸（SE84）

SE84（図 44）

調査区南東端で確認された井戸である。河原石を使った石組の井戸で、口の部分が窄まる袋状の形態である。出土遺物がないため時期は判然としない。彦根市内の石組井戸の調査事例を見ると、佐和山城跡の城下で、複数の石組井戸の調査が実施されているが、いずれも近世のものである。

（4）小結

今回の調査区では、素掘り溝と石組の井戸を検出した。出土遺物がないため、現段階では中世以降としたが、今後も周辺の調査を進める中で更なる検討を進めていきたい。

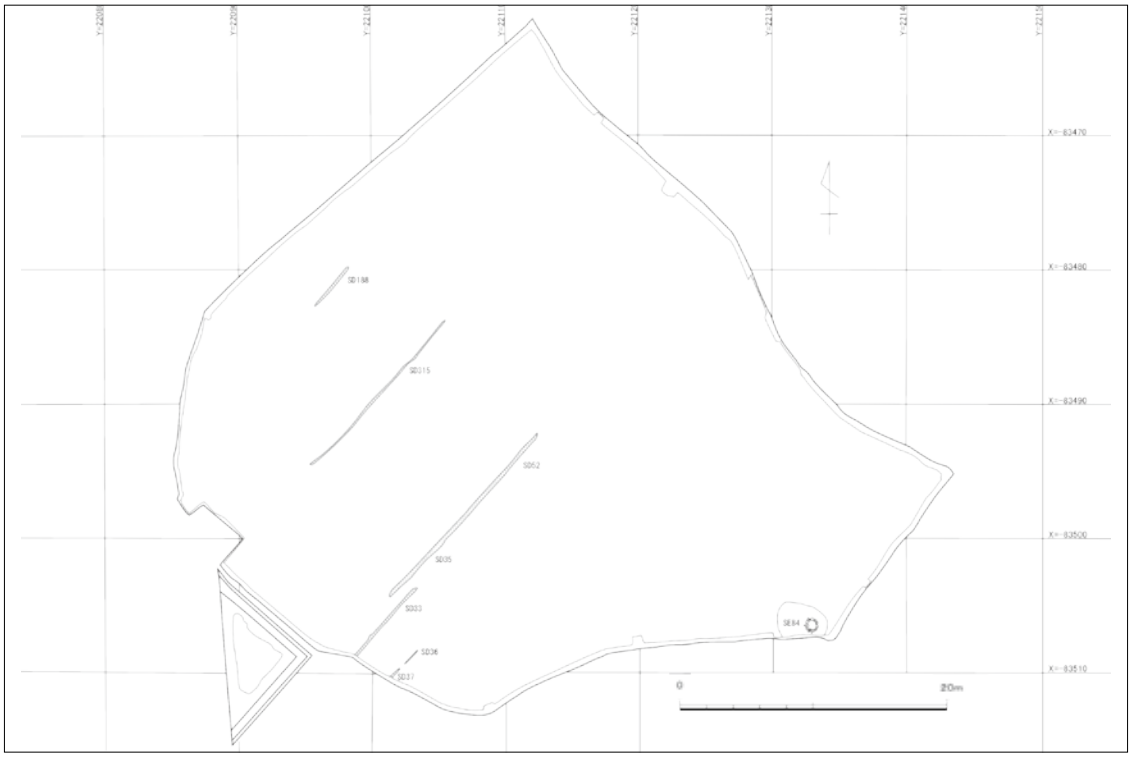
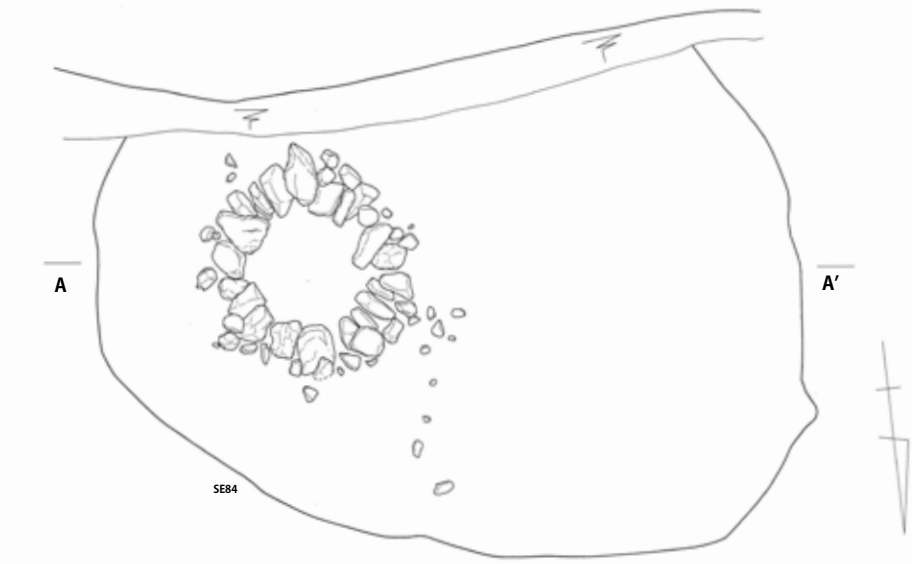
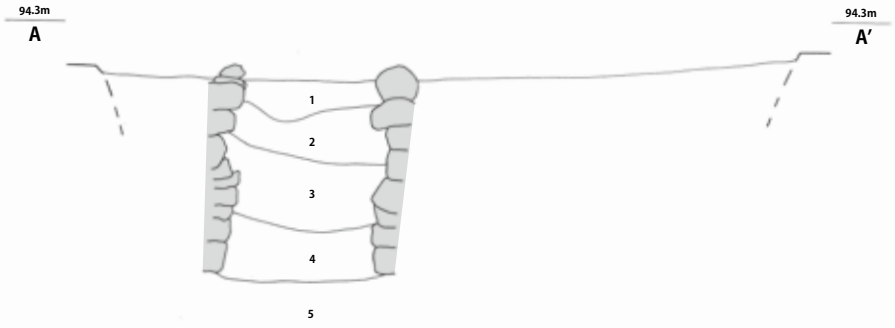
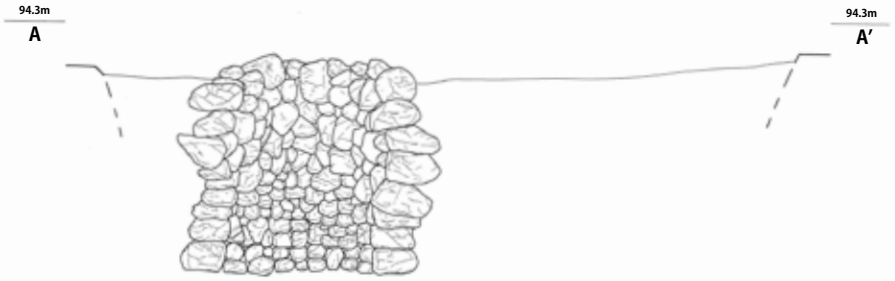


図 45　中世以降の主な遺構図







1. 灰黄褐色砂礫混じり粘質土	地山ブロック～0.5cm大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰黄色粘質土	地山ブロック～0.5cm大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 暗灰黄色粘質土	地山ブロック～0.5cm大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
4. オリーブ黄色砂礫土	地山ブロック～0.5cm大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む
5. 褐灰色砂礫混じり粘質土	地山ブロック～0.5cm大を5%含む 炭化物～0.5cm大を5%含む

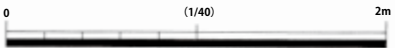


図 46　井戸（SE84）平面図・断面図

第3章 総　括

第1節　福満遺跡における方形周溝墓の群構成とその変遷について

(1) はじめに

今回の福満遺跡第25次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓群が検出された。検出された方形周溝墓は合計15基におよび、これだけ纏まった数の方形周溝墓が確認されたのは犬上川流域では初めてである。また、中期にまで遡る方形周溝墓も、同流域では初めてのことであり、犬上川流域ないし湖東平野北部における弥生墓制を検討する上で、重要な調査成果を得ることができたと言える。そこで、本章では、ここまで事実報告を行ってきた方形周溝墓群について、その群構成と変遷について整理・検討を加えまとめにかえたい。

(2) 墓域のひろがり（図4）

今回、調査区全域で15基の方形周溝墓を検出したが、検出した方形周溝墓の中には、調査区端にかかるものも複数あり、墓域がさらにひろがる可能性がある。福満遺跡では、これまで24次にわたる調査実績があり、今回の調査区の周辺でもこれまで複数の調査が実施されている。そこで、ここでは、それら周辺の調査成果を参考に、墓域のひろがりについて検討する。まず、調査区の北東側について検討する。北東側では、宅地造成や個人住宅の調査など、複数の調査を実施しており、調査密度も高い。隣接地の第16次調査では、方形周溝墓の周溝の一部が確認されている。今回の調査区との位置関係より、一連の墓域を形成するものと推定される。しかし、さらに北東側に位置する、第12・16・19次調査では、方形周溝墓が全く確認されなくなるため、墓域の北東限は第16次調査区周辺と推定される。

次に、北西側についてみる。北西側は、SZ13、SZ14が調査区端にかかる形で検出されているため、さらに北西側への墓域のひろがりが想定される。第8次調査区で、方形周溝墓が1基確認されているが、古墳時代初頭のものとみられるため、今回の方形周溝墓群とは時期的な開きが大きく、一連の墓域であるかどうかは不明といわざるを得ない。第15次調査区では、SD2が周溝の形状に近いが、6世紀末の古墳に伴う周濠と報告されており、方形周溝墓は検出されていない。以上の状況より、北西側にはある程度墓域はひろがると考えられるが、その北西限は不明と言わざるを得ない。第8次調査区の方形周溝墓が一連の墓域の中に入ってくるのかどうかの判断は、更なる周辺地域の調査成果を待たなければならない。

次に、南西側についてみる。南西側は、調査区内でも方形周溝墓の密度が薄く、確実に調査区端にかかる方形周溝墓もない。今回の調査区の道路を挟んだ第17次調査区では、方形周溝墓は検出されておらず、弥生時代の遺構・遺物も一切確認されていない。以上の状況より、墓域の北西限は概ね今回の調査区内におさまると推定される。

最後に、南東側についてみる。南東側は、SZ5、SZ6、SZ7、SZ12が調査区端にかかる

形で検出されているため、さらに南東側への墓域のひろがりが想定される。しかし、南東側に関しては、これまで調査の実績がないためこれ以上情報がないため、墓域の南東限は不明といわざるを得ない。

以上、第 25 次調査区を中心とした墓域のひろがりについて検討してきたが、簡単にまとめると、北東側と南西側については、これ以上それほどのひろがりは想定されない。しかし、北西側と南東側に関しては、不明な要素も多分に含まれるが、ある程度墓域がさらにひろがることが想定されるため、今後の調査でも注意を要する地域と言えよう。

(3) 平面形態・規模（図 47・表 5）

検出された方形周溝墓の墳丘部の平面形は全て方形であった。規模ついてだが、周溝の墳丘側下端間で計測を行った。概ね、3 ～ 6 m前後（SZ3 ～ SZ6･SZ12）、8 ～ 10 m前後（SZ1・SZ2・SZ7・SZ8・SZ10 ～ SZ11・SZ13 ～ SZ15）の 2 種類の大きさに分けられる。最少のものは、SZ4 で 4.5 m ×3.3 m、最大のものは SZ14 で 9.3 m ×9.1 mである。また調査区端にかかっているため、すべてを検出できているわけではないが、SZ15 について検出部分で計測したところ 10 mを測り、調査区内で最大規模の可能性を有する。

次に、溝の形態だが、大きく分けると溝を共有するものとしないものに分けられる。溝を共有するものは、概ね溝の幅が一定しているが、共有しないものは、中央付近で外側に溝幅が拡がる傾向がある。そのため、墳丘部と周溝部を含めた平面規模をみると、墳丘部の規模がほぼ同一であっても、溝を共有しないもののほうが大きな規模を持つ傾向にある。周溝隅

図 47　方形周溝墓配置図

の途切れついてだが、調査区端にかかるSZ12・SZ13とSZ3を除いて、すべての周溝墓で1～3箇所の隅で途切れが確認されるが、いずれも、当初から途切れていたものか、後世の削平により途切れたものかの判断はつかない。

(4) 群構成とその変遷

検出した15基に関して、次の点に留意しながらグルーピングを行った。

(1) 墳丘の規模

(2) 軸の方向

(3) 周溝の共有の有無

(4) 周溝の形態

(5) 周溝の規模

(6) 連結の有無とその状態

以上の点に留意しながらグルーピングを行った結果、概ねA～Dの4群にわけることができた。以下に、各群ごとにグルーピングの根拠について説明する。

【A群】(図48・表5)

SZ3・SZ4・SZ5・SZ6・SZ12で構成されるグループである。墳丘規模は3～6m前後と小規模で軸が揃っており、周溝を共有する。周溝の幅は一定で、その深度も浅い。SZ3に関しては周溝を共有しないため、さらに区分が可能であるかもしれないが、他の属性で一致する点が多いため、現段階では同グループとしておく。

【B群】(図49・表5)

SZ7・SZ8で構成されるグループである。墳丘規模は8m前後で軸が揃っており、周溝も共有する。周溝の幅は一定で、その深度はA群に比べると深い。また2基の方形周溝墓が横並びで連結している。

【C群】(図50・表5)

SZ10・SZ11で構成されるグループである。墳丘規模は8m前後で軸が揃っており、周溝を共有する。周溝の幅は一定で深度はA群に比べると深い。B群との違いは、軸方向が異なり、周溝も北東側だけ幅が狭く浅い。また、2基の方形周溝墓が横並びでなく、少しずれた位置で連結している点が異なっていることより、別のグループとして区分した。

SZ13に関しては、規模・軸方向など本群に入る可能性があるが、調査区端にかかっており全体が不明な上、SZ10・SZ11から少し離れていることもあり、現段階ではC群に入れないでおく。

【D群】(図51・表5)

SZ1･SZ2･SZ14･SZ15で構成されるグループである。墳丘規模8～10m前後で軸が揃っており､周溝を共有しない。周溝は中央付近の幅が拡がる形態をとり､周溝の深度は全グループで一番深い。本グループの中でも、詳細にみるとSZ1とSZ2に比べるとSZ14・SZ15の方が墳丘規模が若干大きいため、さらに区分が可能であるかもしれないが、その差も小さく、

他の属性で一致する点が多いため、現段階では同グループとしておく。

【変遷】（表 5）

今回検出して方形周溝墓群は、上記のような 4 つの群構成に分かれると考える。それでは次に、その変遷について検討する。遺構の切り合い関係より、A 群は C 群と D 群に切られているため、少なくとも A 群→ C 群、A 群→ D 群の変遷は確実である。

次に周溝内出土遺物をみると、A 群からは出土遺物がない。B 群からは、SZ7 から弥生時代中期前葉（Ⅱ期）に比定できる細頸壷（5）が、SZ8 からも同じく弥生時代中期前葉（Ⅱ期）に比定できる細頸壷（8）が、いずれも墳丘上にあった供献土器が転落したと考えられる状況で出土している。以上より、B 群は弥生時代中期前葉（Ⅱ期）の造墓時期と考えられる。C 群からは、SZ10 から弥生時代中期中葉（Ⅲ期）に比定できる細頸壷（9）が出土している。出土状況は、破片のみで墳丘上の供献土器が転落した状況ではない点は慎重に検討する余地はあるが、現段階ではこの出土遺物を時期決定の根拠とする。すなわち、C 群は弥生時代中期中葉（Ⅲ期）の造墓時期と考えられる。D 群は、SZ1 から弥生時代中期後葉（Ⅳ期）に比定できる鉢（1）が、SZ15 からも同じく弥生時代中期後葉（Ⅳ期）に比定できるくの字状口縁甕（16）が、いずれも墳丘上にあった供献土器が転落したと考えられる状況で出土している。以上より、D 群は弥生時代中期後葉（Ⅳ期）の造墓時期と考えられる。

以上のように、遺構の切り合いと出土遺物に関して検討してきたが、その群構成の変遷についてまとめると、A 群と B 群に関しては、その前後関係を示す客観的根拠がないため並列とし、A 群・B 群→ C 群→ D 群という変遷が想定される。そして、その変遷は概ね調査区の東から西にひろがるということができる。すなわち、今回の調査で確認された方形周溝墓群は、4 群に分かれ、弥生時代中期前葉から中葉、後葉へと時期を経ながら、墓域がひろがっていく状況が確認されたのである。

表 5　方形周溝墓一覧

群	遺構名	台状部						周溝					備考
		平面形	規模（m）			面積	主軸方位	最大幅（m）	最大深度（m）	器種	器形	時期	
			長軸	×	短軸								
A	SZ3	方形	5.1	×	4.8	24.48	N－42°－W	0.52	0.21	—	—	—	
	SZ4	方形	4.5	×	3.3	14.85	N－37°－W	0.8	0.29	—	—	—	SZ12と溝の一辺を共有
	SZ5	方形	6.4	×	—	—	N－32°－W	1.4	0.15	—	—	—	SZ6と溝の一辺を共有
	SZ6	方形	5.5	×	—	—	N－36°－W	0.76	0.28	—	—	—	SZ5と溝の一辺を共有
	SZ12	方形か	—	×	—	—	—	0.8	0.26	—	—	—	SZ4と溝の一辺を共有
B	SZ7	方形	8.4	×	—	—	N－42°－W	0.84	0.45	弥生土器	細頸壷（5）	Ⅱ期	SZ8と溝の一辺を共有
	SZ8	方形	8.1	×	7.2	58.32	N－39°－W	1.4	0.27	弥生土器	細頸壷（7・8）	Ⅱ期	SZ7と溝の一辺を共有
C	SZ10	方形	8.2	×	6.7	54.92	N－11°－E	1.1	0.75	弥生土器	壷（9・10）	Ⅲ期	SZ11と溝の一辺を共有
	SZ11	方形	8.5	×	7.2	61.2	N－33°－E	1.54	0.51	—	—	—	SZ10と溝の一辺を共有
D	SZ1	方形	8.6	×	7.7	66.22	N－31°－W	2.42	0.74	弥生土器	甕（1・2）	Ⅳ期	
	SZ2	方形	8.3	×	8.3	68.89	N－34°－W	2.14	0.71	—	—	—	
	SZ14	方形	9.3	×	9.1	84.63	N－25°－W	2.26	0.66	石器	剥片（14）	—	
	SZ15	方形	10	×	—	—	N－34°－W	2.7	0.98	弥生土器・石製品	甕（16）、砥石（17）	Ⅳ期	
—	SZ9	方形か	—	×	—	—	—	1.78	0.46	—	—	—	
—	SZ13	方形	8.2	×	—	—	N－27°－E	2	0.94	弥生土器	壷（11・12）、甕（13）	Ⅳ期	

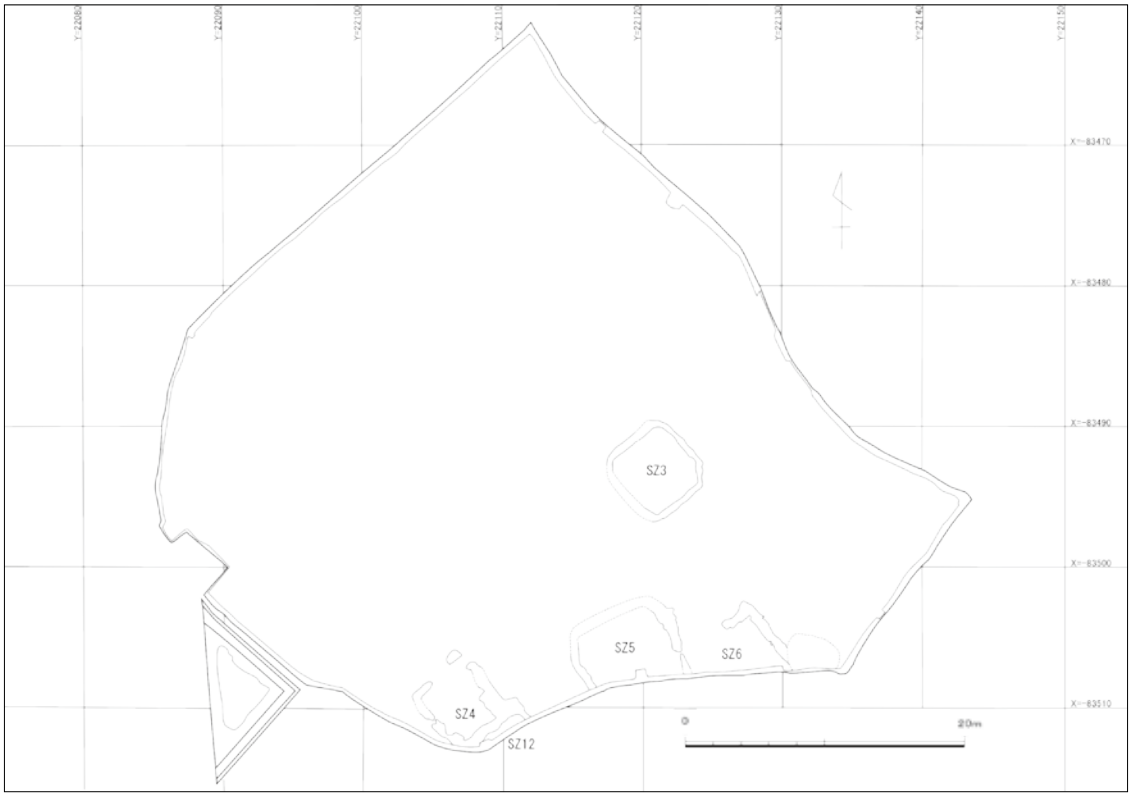


図 48　A 群の方形周溝墓配置図

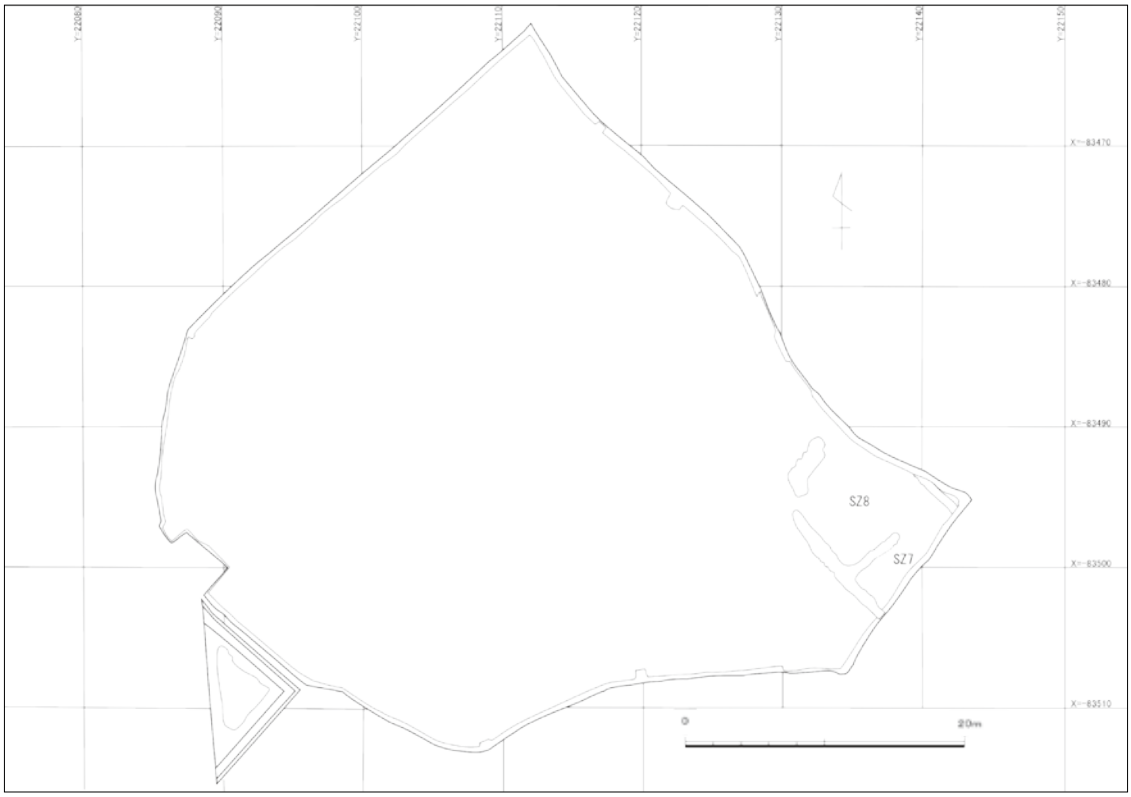


図 49　B 群の方形周溝墓配置図

図 50　C 群の方形周溝墓配置図

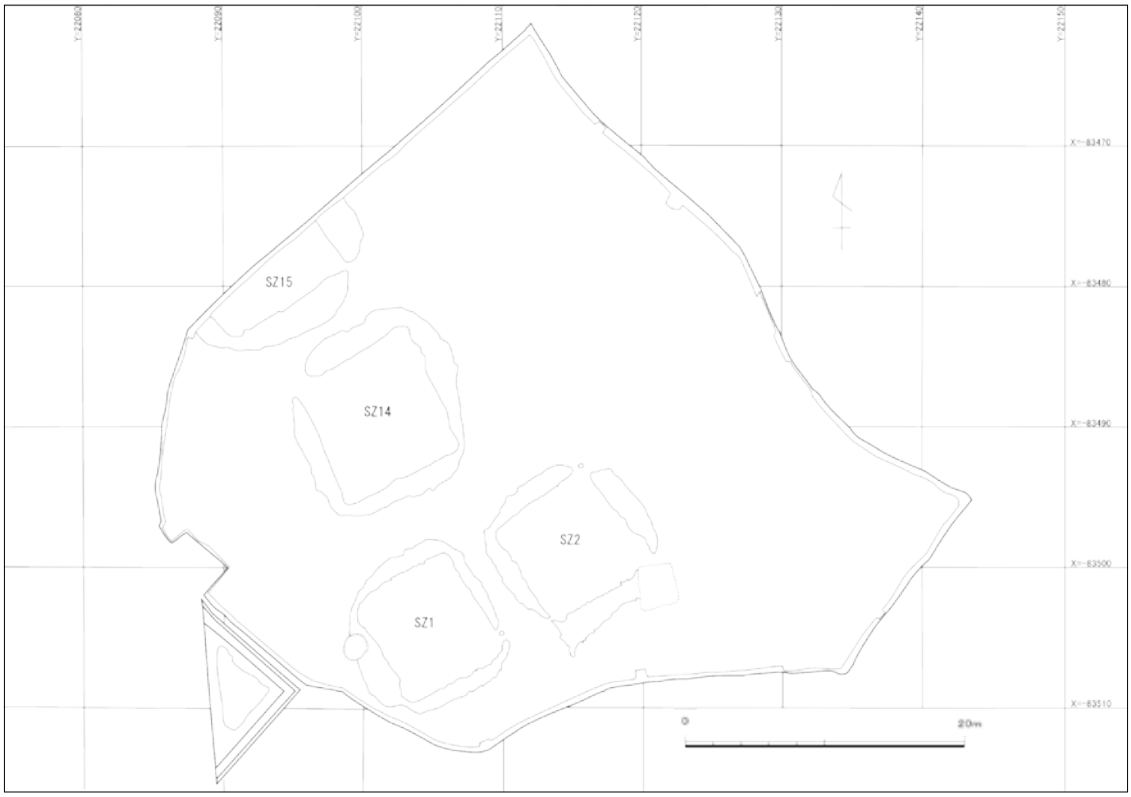


図 51　D 群の方形周溝墓配置図

(5) おわりに

今回の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓群が確認された。墓域は 15 基の方形周溝墓で構成されていたが、その墳丘や周溝の形態・規模は様々で各属性の整理を通して、4 群にグルーピングすることができた。そして、その 4 群が調査区の概ね東から西に向かって、弥生時代中期前葉→中葉→後葉と順に進展、ひろがっていく具体的状況を押さえることができたのは、大きな成果と言えよう。今後、墓域のひろがりや規模の確認、集落との関係など重要な課題の検討を進めていく必要がある。福満遺跡を初め、周辺地域には弥生時代中期の集落が未だ確認されておらず、その様相は不明と言わざるを得ない。墓域と集落のセット関係の解明・検討は、今回の調査地を含め、当該地域の墓制の理解には欠かすことができない重要事項と考える。それらの検討を深化させた上で、さらに県内の他地域との比較など多くの課題が残されているが、それは今後に委ねる。いずれにせよ、犬上川流域ないし湖東平野北部における弥生時代の墓制を検討する上で重要な成果を得られたことは間違いがない。今後、より鮮明な地域社会像に迫るためにも、更なる周辺地域の調査の蓄積、それに基づいた課題の検討が重要になってくると考える。

※今回、方形周溝墓と弥生土器の整理・検討にあたり、滋賀県立安土城考古博物館の伊庭功氏、福西貴彦氏より多大なるご指導・ご教授を賜った。ここに改めて感謝の意を表したい。

参考文献

伊庭功　1997「近江弥生中期土器の地域色」『滋賀考古』第 18 号

伊庭功　2003「近江南部の中期弥生土器―様式と器種構成―」『古代文化』第 55 巻第 5 号

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会　1985『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

表６　出土遺物一覧

掲載No.	出土地点			器種	器形	部位	残存率	法量(cm) 口径(長さ)	最大径(幅)	底部径(厚さ)	器高	胎土	焼成	色調 外面		内面		備考
1	SZ1	SD38	5層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	2/5	12.6	22.0	—	15.8	粗い	良	7.5YR	7/4にぶい橙	5YR	6/8橙	
2	SZ1	SD38	5層	弥生土器	甕	底部	1/10	—	—	5.6	2.6	やや粗	良	10YR	4/2灰黄褐	2.5Y	3/1黒褐	
3	SZ1	SD38	1層	土師器	高台付皿	底部	1/10	—	—	11.8	3.4	緻密	良好	2.5Y	7/3浅黄	2.5Y	6/1黄灰	
4	SZ2	SD38	1層	縄文土器	深鉢	胴部	1/10	—	—	—	3.9	粗い	良	10YR	6/3にぶい黄橙	7.5YR	7/4にぶい橙	色調(胎土)5Y3/1オリーブ黒
5	SZ7	SD90	2層	弥生土器	細頸壷	頸部～底部	7/10	—	19.7	5.5	27.9	密	やや不良	7.5YR	7/4にぶい橙	N	4/灰	
6	SZ7, SZ8	SD93	3層	石製品	砥石	—	—	4.3	4.2	1.5	4.3	—	—	2.5Y	7/3浅黄	2.5Y	7/3浅黄	重さ41.0g、SZ7・SZ8共有溝
7	SZ8	SD91	3層	弥生土器	細頸壷	口縁部	1/10	6.6	—	—	5.6	やや粗	やや不良	2.5Y	8/1灰白	2.5Y	8/2灰白	色調(胎土)N2/黒
8	SZ8	SD91	3層	弥生土器	細頸壷	口縁部～胴部	2/5	15.8	22.4	—	27.6	密	良	7.5YR	7/6橙	5Y	5/1灰	
9	SZ10	SD140	12層	弥生土器	壷	胴部	1/10	—	—	—	7.9	やや粗	やや不良	10YR	7/4にぶい黄橙	10YR	7/2にぶい黄橙	
10	SZ10	SD140	12層	弥生土器	壷	底部	1/10	—	—	7.0	2.2	やや粗		5YR	6/6橙	5YR	6/6橙	
11	SZ13	SD131	1層	弥生土器	広口壷	口縁部	1/10	13.4	—	—	5.7	やや粗	良	10YR	8/3浅黄橙	10YR	8/3浅黄橙	
12	SZ13	SD131	1層	弥生土器	壷	底部	1/10	—	—	3.8	3.8	やや粗	良	7.5YR	5/6明褐	10YR	6/4にぶい黄橙	
13	SZ13	SD131	1層	土師器	甕	底部	1/10	—	—	4.0	3.3	やや粗	良	2.5Y	4/1黄灰	2.5Y	8/2灰白	
14	SZ14	SD171	7層	石器	剥片	—	—	4.8	2.6	1.2	4.8			5Y	5/1灰	5Y	5/1灰	重さ12.5g
15	SZ14	SD171	1層	土師器	椀か	口縁部	1/10	16.6	—	—	2.3	密	やや不良	2.5Y	8/2灰白	2.5Y	8/2灰白	
16	SZ15	SD187	9層	弥生土器	甕	口縁部～底部	4/5	14.9	23.4	5.9	27.9	やや粗	良	10YR	8/4浅黄橙	10YR	5/1褐灰	くの字状口縁甕
17	SZ15	SD187	9層	石器	砥石	—	—	9.8	4.5	3.7	—	—	—	10Y	7/1灰白	10Y	7/1灰白	石材:硬質砂岩,重さ210.5g
18	SZ15	SD187	4層	土師器	不明	頸部	1/10	—	—	—	5.5	密	やや不良	2.5Y	8/2灰白	2.5Y	8/2灰白	
19		SD317	1層	古式土師器	甕	口縁部	1/10	19.6			7.2	密	やや不良	2.5Y	8/2灰白	2.5Y	8/2灰白	※近畿タタキ甕
20		SD317	1層	石器	砥石	—	—	14.3	8.3	4.6	—	—	—	10YR	7/3にぶい黄橙	10YR	7/3にぶい黄橙	重さ659.0g
21		SP56	1層	須恵器	坏身	底部	—	—	—	10.0	(1.2)	密	やや不良	7.5YR	7/1灰白	7.5YR	7/1灰白	
22		SP165	1層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	1/4	15.0	—	—	(1.4)	密	良	2.5Y	6/1黄灰	2.5Y	6/1黄灰	
23		SP164	1層	灰釉陶器	椀	底部	—	—	—	6.8	(3.3)	密	良	2.5Y	8/1灰白	2.5Y	8/1灰白	
24		SP165	1層	土製品	土錘	—	1/2	4.7	3.0	0.9	—	粗	不良	10YR	4/1褐灰	10YR	5/2灰黄褐	孔径1.1cm
25		SP345	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	1/6	13.0	—	7.2	(3.9)	密	良	7.5YR	5/2灰褐	N	5/灰	
26		SX262	1層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	1/12	13.0	—	—	(1.2)	密	良	N	6/灰	N	6/灰	
27		SE61	1層	土師器	皿	口縁部～底部	1	14.0	—	7.0	3.9	密	良	10YR	8/3浅黄橙	10YR	8/3浅黄橙	口縁部にタール痕
28		SE61	1層	土師器	皿	口縁部～底部	5/6	12.7	—	6.7	3.6	密	良	10YR	8/3浅黄橙	10YR	8/3浅黄橙	表面彩色（5YR5/6明赤褐）塗布
29		SE61	1層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	1/12	14.0	—	—	(0.9)	密	良	N	6/灰	N	6/灰	
30		SE61	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	1/11	11.0	—	7.3	2.9	密	良	N	5/灰	N	5/灰	
31		SE61	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	1/10	12.0	—	8.0	2.9	密	良	N	5/灰	N	5/灰	
32		SE61	1層	須恵器	坏身	口縁部～底部	1/6	12.0	—	—	(3.8)	密	良	N	5/灰	N	5/灰	
33		SE61	1層	須恵器	短頸壺	口縁部～肩部	1/6	7.0	—	—	(3.7)	密	良	N	4/灰	N	6/灰	
34		SE61	1層	灰釉陶器	椀	口縁部～底部	1/5	10.3	—	4.8	3.3	密	良	5Y	6/2灰オリーブ	5Y	6/2灰オリーブ	
35		SE61	1層	灰釉陶器	椀	口縁部～底部	1	17.8	—	8.2	5.2	密	良	5Y	6/4オリーブ黄	5Y	6/4オリーブ黄	
36		SE61	1層	土製品	鞴羽口	—	—	3.5	4.4	1.5	—	粗	良	7.5YR	6/1褐灰	7.5YR	7/4にぶい橙	
37		SE61	1層	土製品	鞴羽口か	—	—	5.1	2.8	2.1	—	粗	良	5YR	4/4にぶい赤褐	5YR	4/4にぶい赤褐	ガラス質（7.5YR3/1黒褐）付着
38		SE61	6層	土師器	皿	口縁部～底部	1/12	16.0	—	14.7	1.4	密	良	5YR	5/6明赤褐	5YR	5/6明赤褐	表面彩色塗布
39		SE61	6層	灰釉陶器	椀	底部	—	—	—	6.7	(2.2)	密	良	2.5Y	7/1灰白	2.5Y	7/1灰白	
40		SE61	9層	須恵器	坏蓋	天井部	—	—	3.4	—	(1.5)	密	良	7.5Y	4/3暗オリーブ	10YR	7/1灰白	外面に自然釉
41		SE61	9層	須恵器	坏身	口縁部～体部	1/12	14.0	—	—	(4.2)	密	不良	5Y	7/1灰白	5Y	7/1灰白	

※（数値）は残存値

図版一

調査前風景〔東より〕

調査前風景〔西より〕

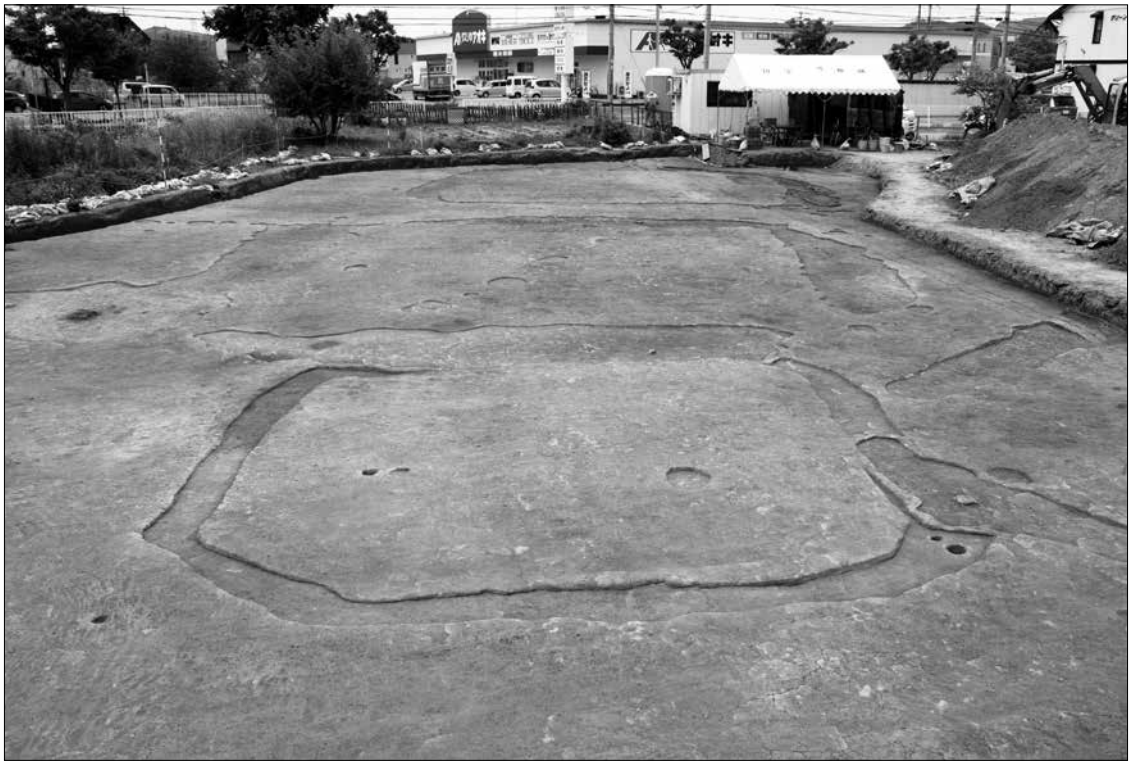
南東地区全景〔南西より〕

南東地区全景〔東より〕

図版三

北西地区全景〔南西より〕

北西地区全景〔北東より〕



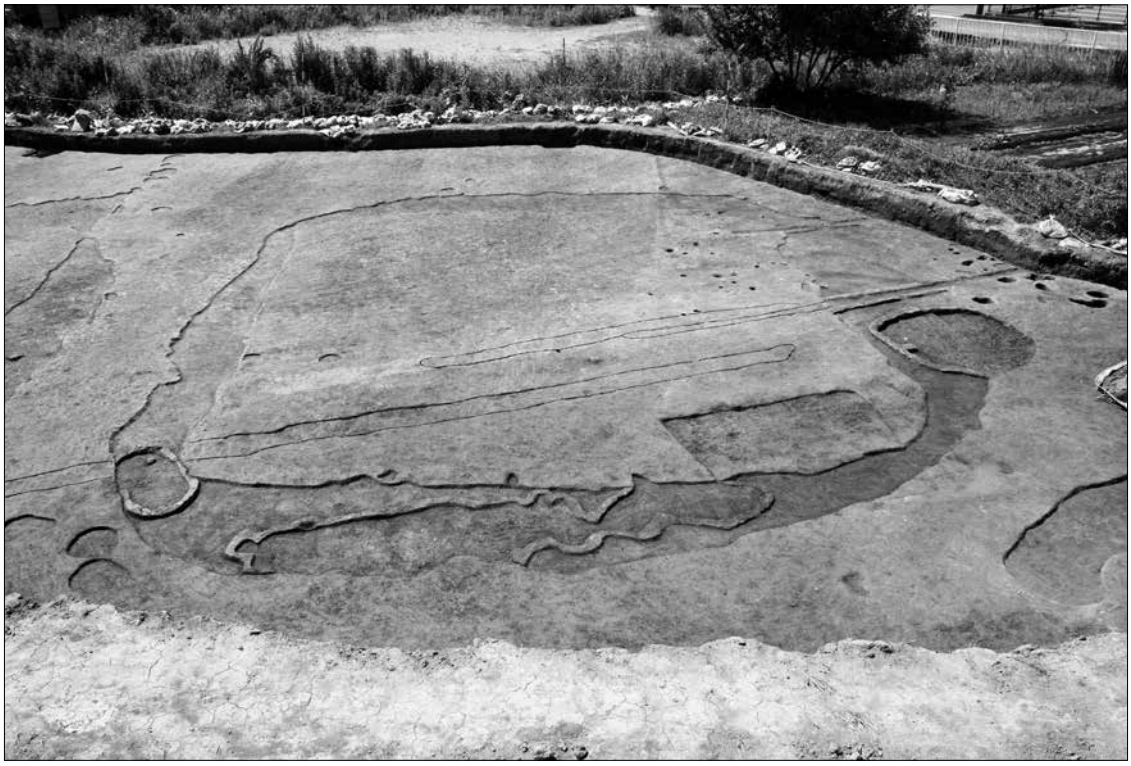
方形周溝墓（SZ1・SZ2・SZ3）検出状況〔北東より〕

方形周溝墓（SZ1・SZ2・SZ3）完掘状況〔北東より〕

図版五

方形周溝墓（SZ1・SZ2）検出状況〔北より〕

方形周溝墓（SZ1・SZ2）完掘状況〔北より〕



方形周溝墓（SZ1）検出状況〔北西より〕

方形周溝墓（SZ1）完掘状況〔北西より〕

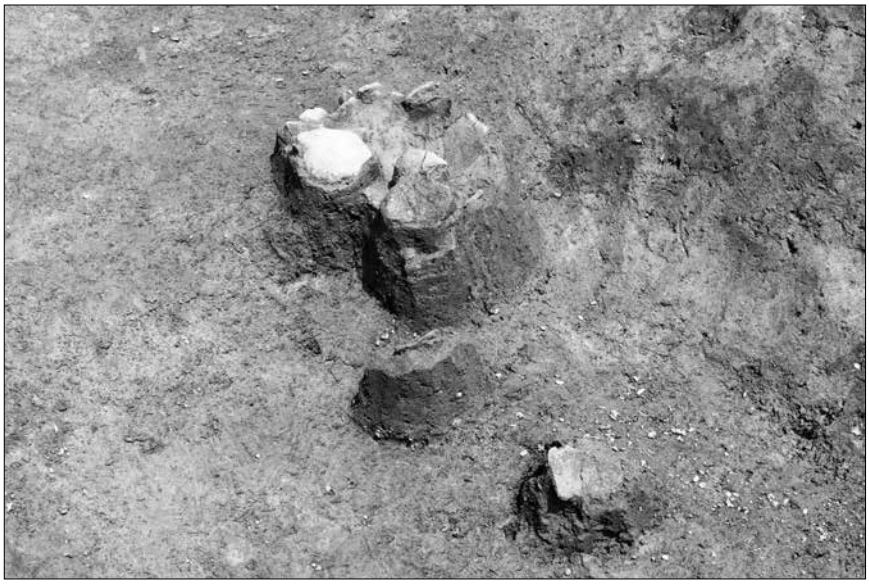
図版七

SZ1 周溝 B' アゼ
土層断面〔南西より〕

SZ1 周溝 A アゼ
土層断面〔南東より〕

SZ1 周溝 B アゼ
土層断面〔南西より〕

SZ1 周溝 A' アゼ
土層断面〔南東より〕



SZ1 周溝
遺物（1・2）出土状況
〔北西より〕

SZ1 周溝
遺物（1・2）出土状況
〔北西より〕

図版九

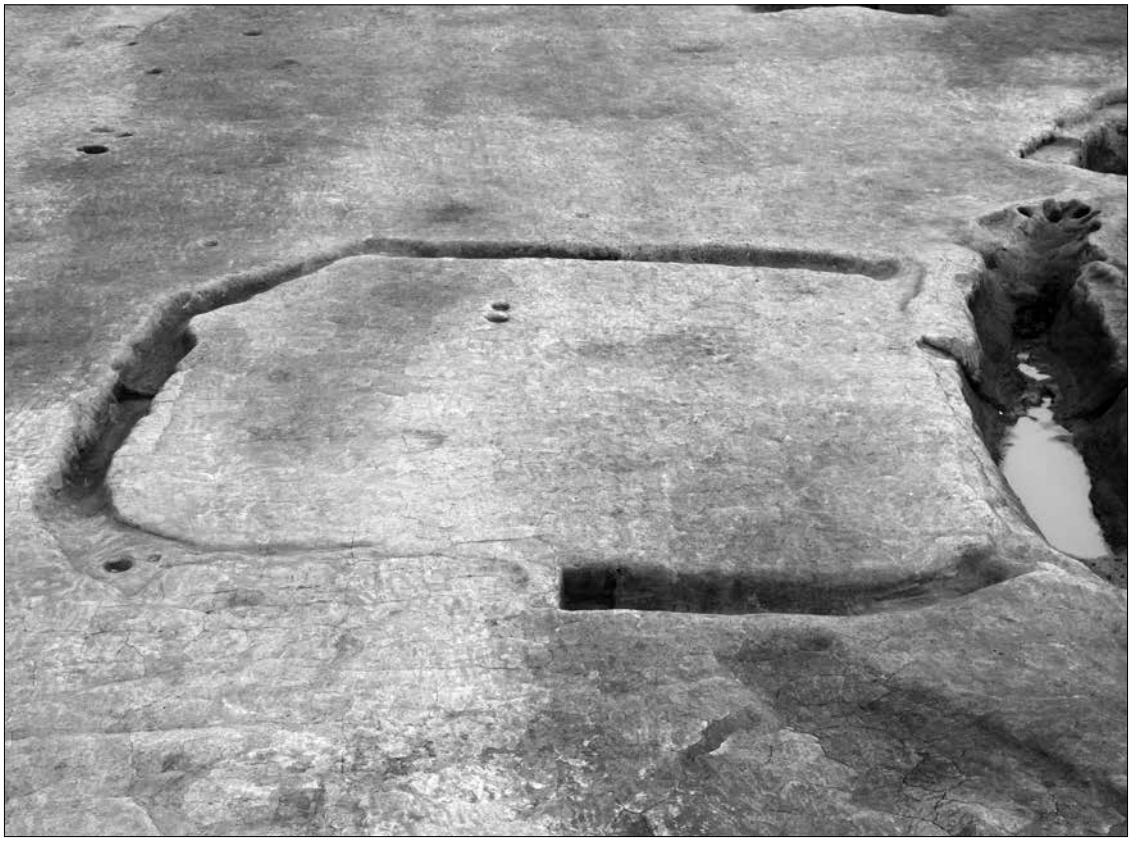
方形周溝墓（SZ2）完掘状況〔北西より〕

SZ2 周溝 A' アゼ土層断面〔南西より〕

SZ2 周溝 B アゼ土層断面〔南東より〕

SZ2 周溝 A アゼ土層断面〔南西より〕

SZ2 周溝 B' アゼ土層断面〔南東より〕



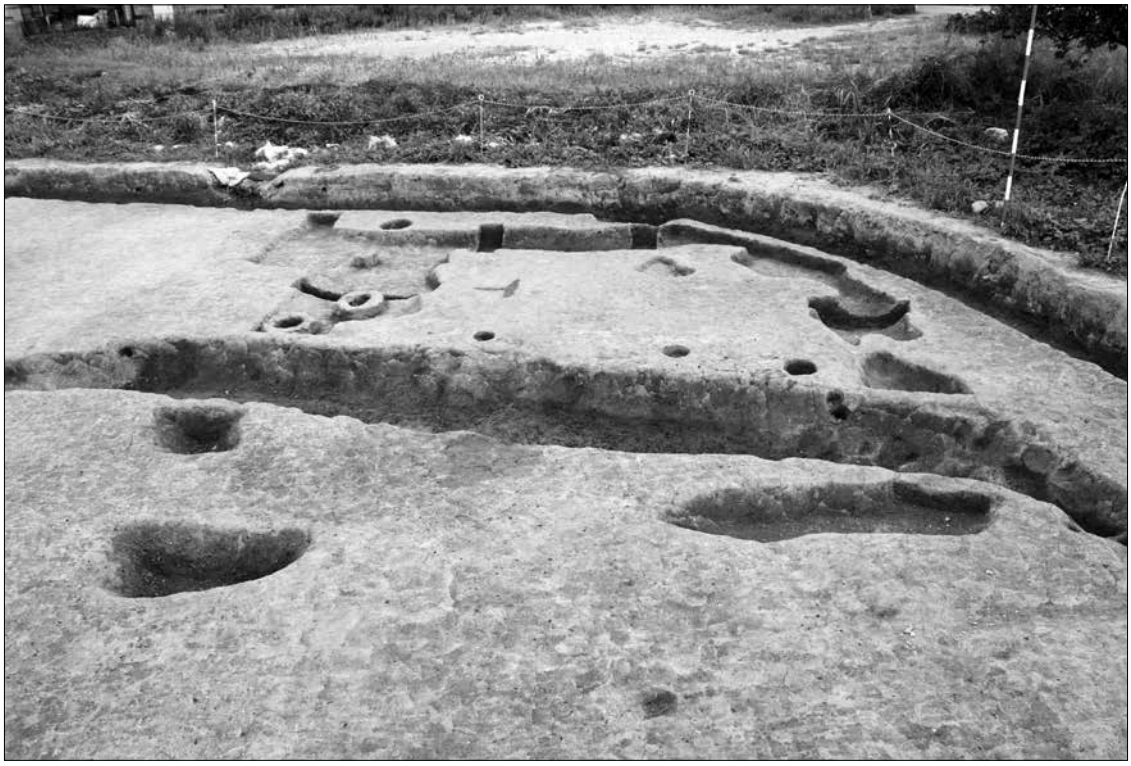
方形周溝墓（SZ3）完掘状況〔北西より〕

方形周溝墓（SZ2・SZ3 周溝）完掘状況〔北より〕

SZ3 周溝 C' アゼ土層断面〔南西より〕

SZ3 周溝 C アゼ土層断面〔南西より〕

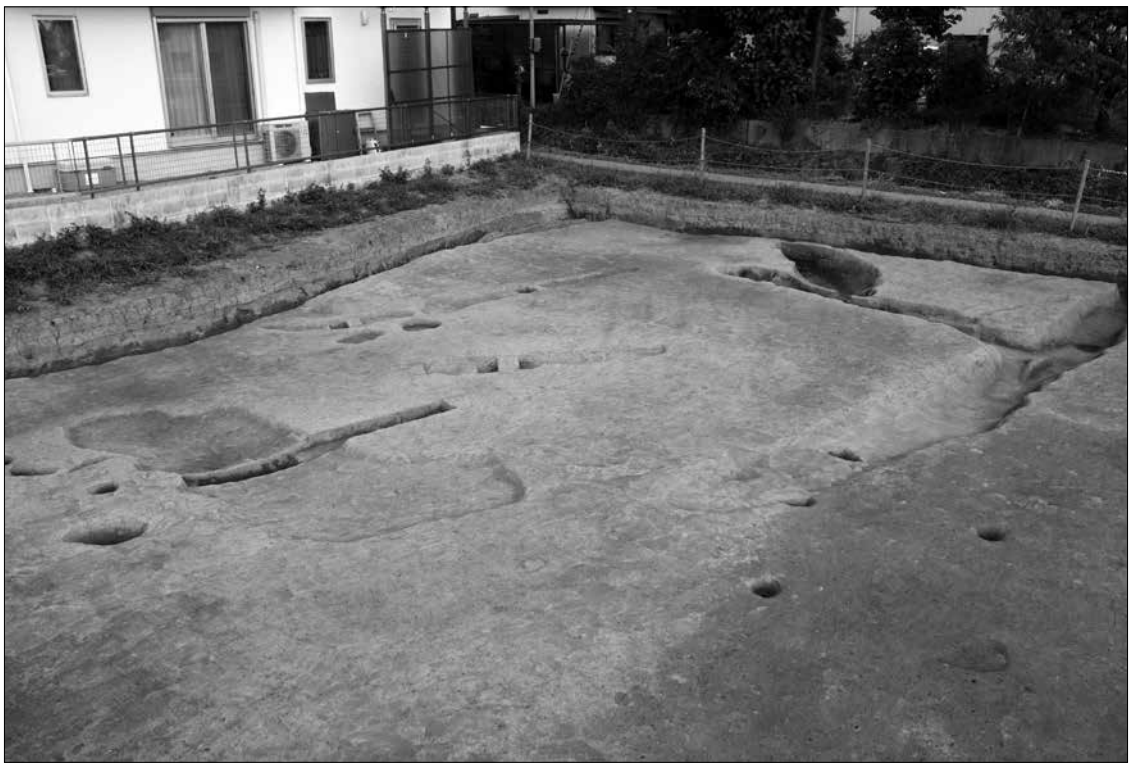
SZ3 周溝 D' アゼ土層断面〔南東より〕



方形周溝墓（SZ4）完掘状況〔北西より〕

方形周溝墓（SZ5）完掘状況〔北西より〕

方形周溝墓（SZ6）完掘状況〔北東より〕

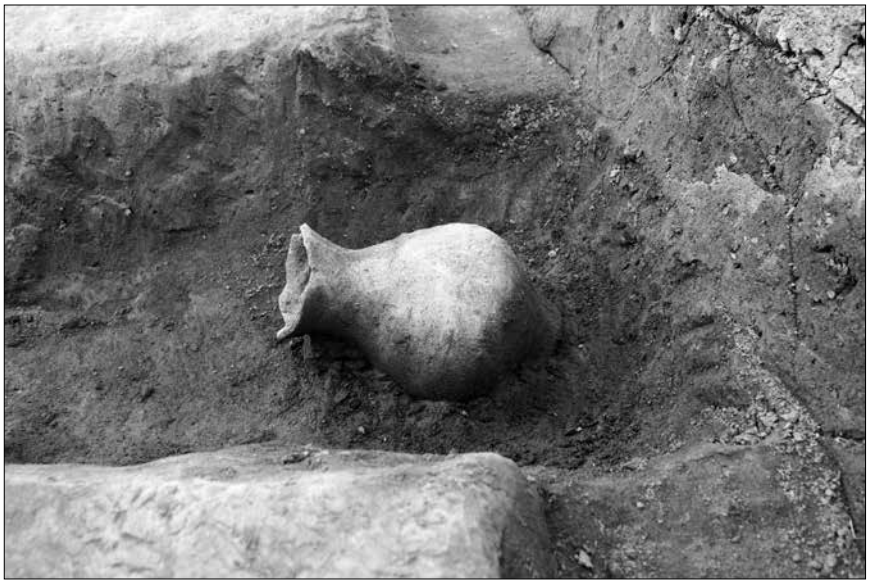


方形周溝墓（SZ7・SE8）完掘状況〔西より〕

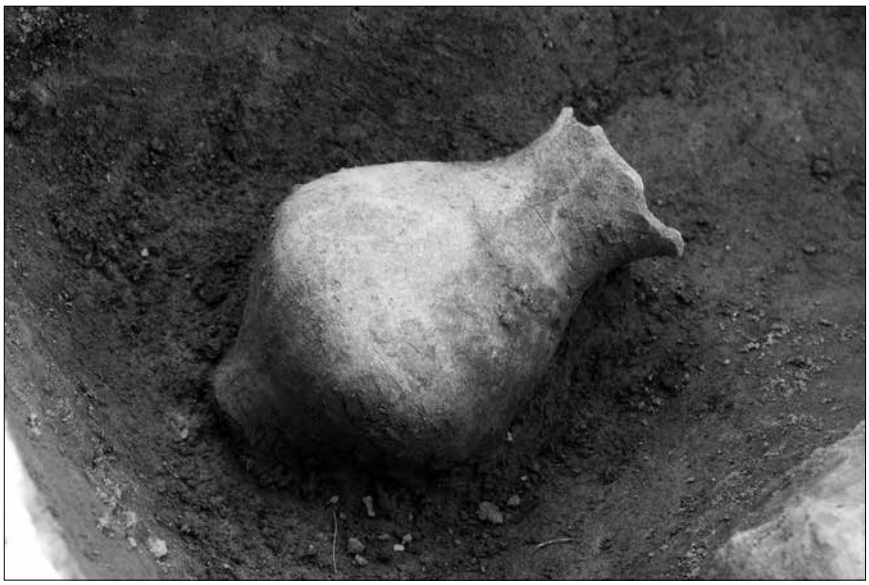
方形周溝墓（SZ7）完掘状況〔南西より〕

SZ7 周溝 C–C' アゼ土層断面〔北西より〕

SZ7 周溝
遺構（5）出土状況
〔北より〕



SZ7 周溝
遺構（5）出土状況
〔南西より〕



SZ7 周溝
遺構（5）出土状況
〔北東より〕

方形周溝墓（SZ8）完掘状況〔南西より〕

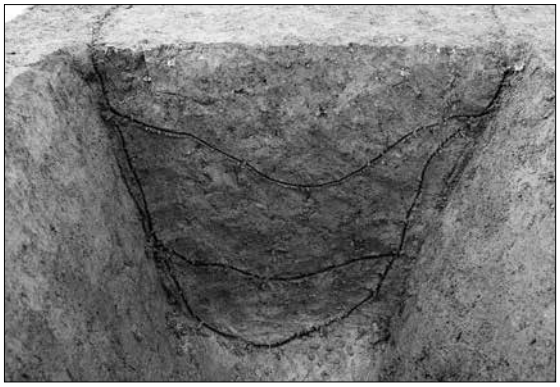
SZ8 周溝遺物（8）出土状況〔北東より〕

SZ8 周溝
遺構（8）出土状況
〔北西より〕

方形周溝墓（SZ9）
完掘状況〔西より〕

SZ9 周溝 A–A' アゼ
土層断面〔北より〕

方形周溝墓（SZ10・SZ11）完掘状況〔南より〕

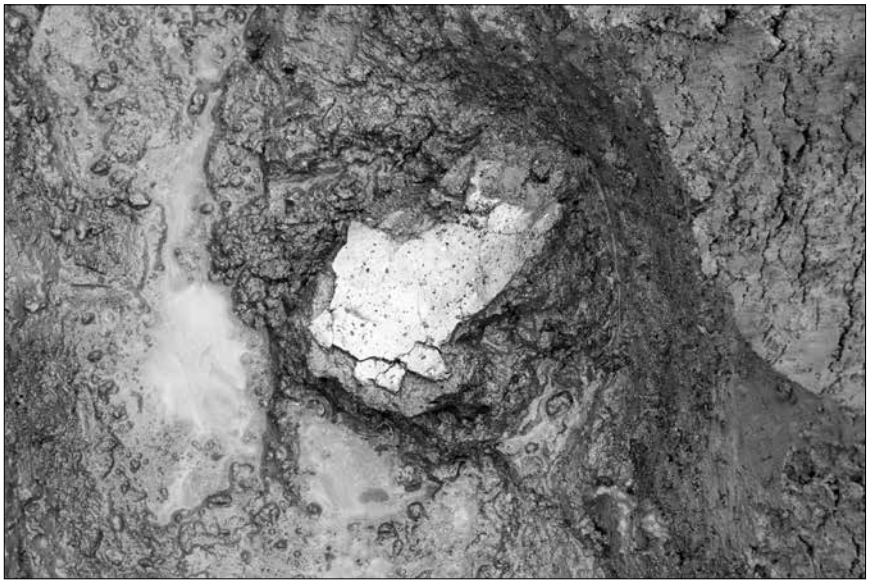


SZ10 周溝 A' アゼ土層断面〔南より〕

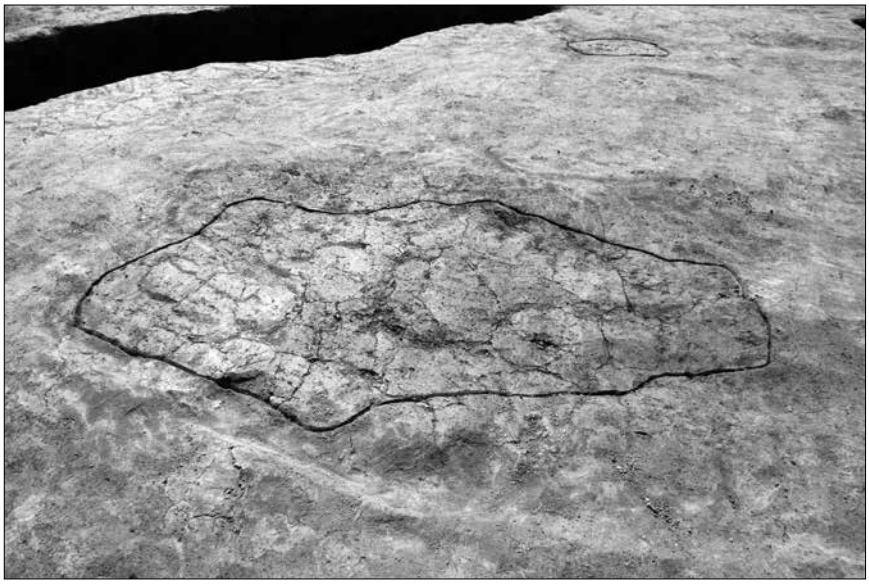
SZ10 周溝 B アゼ土層断面〔東より〕

SZ10 周溝 A アゼ土層断面〔南より〕

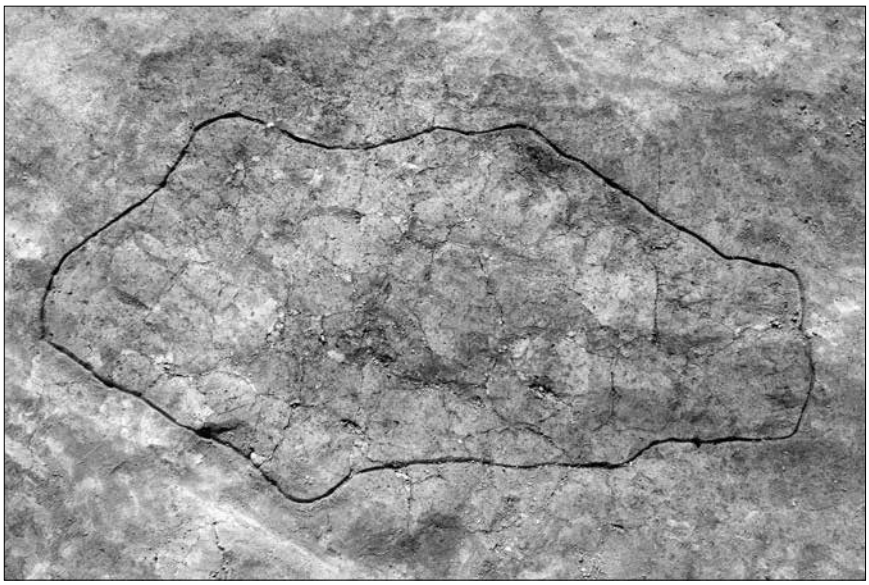
SZ10 周溝 B' アゼ土層断面〔東より〕



SZ10 周溝
遺物（9）出土状況
〔南より〕



土杭（SK146）
検出状況〔南西より〕



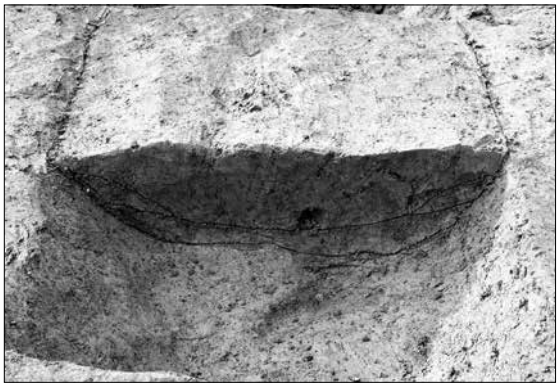
土杭（SK146）
検出状況〔南西より〕

方形周溝墓（SZ11）完掘状況〔南東より〕

SZ11 周溝 C' アゼ土層断面〔南西より〕

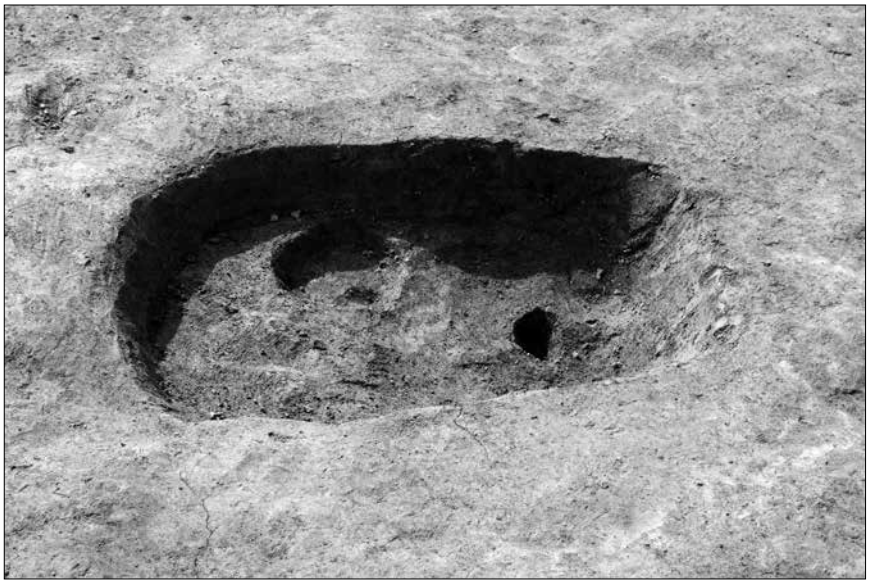
SZ11 周溝 D アゼ土層断面〔南東より〕

SZ11 周溝 C アゼ土層断面〔南西より〕



SZ11 周溝 D' アゼ土層断面〔南東より〕

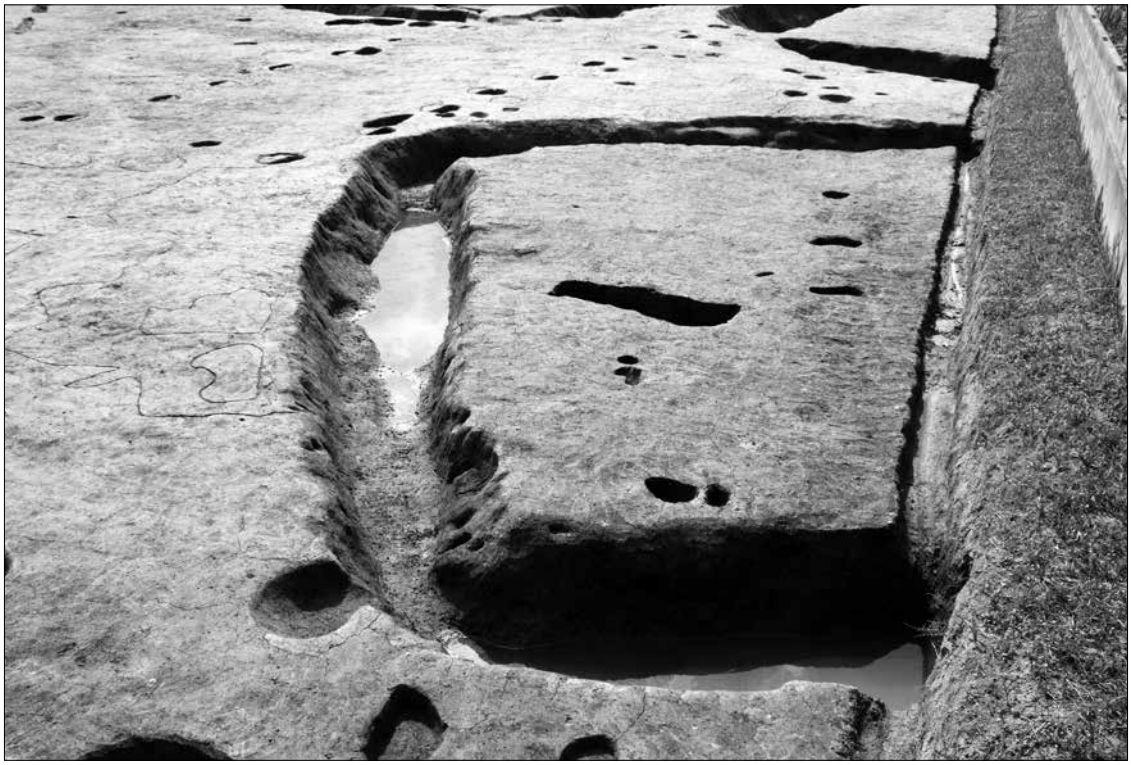
SZ11 北西周溝
完掘状況〔北東より〕



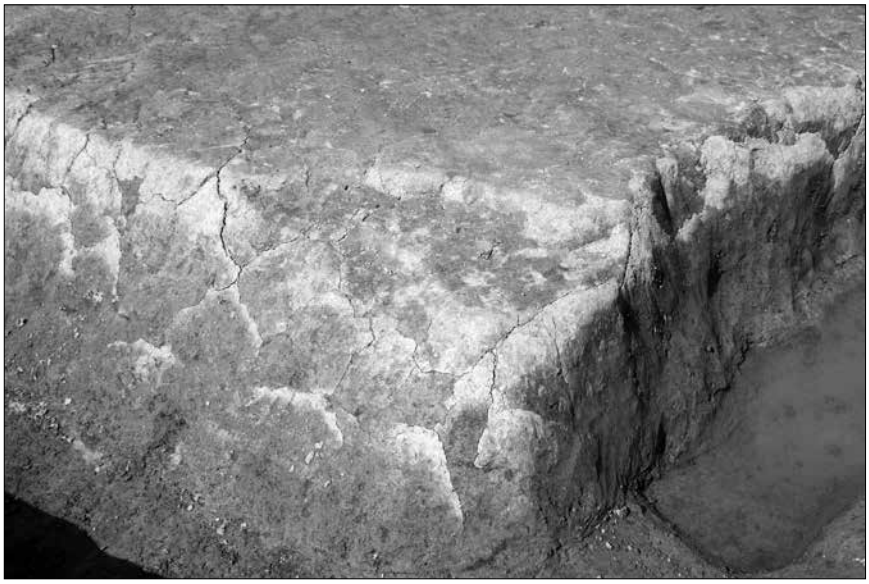
土杭（SK118）
完掘状況〔北東より〕

土杭（SK117）
完掘状況〔南東より〕

方形周溝墓（SZ13）完掘状況〔東より〕



方形周溝墓（SZ13）完掘状況〔北東より〕



SZ13 墳丘南隅
〔南より〕

SZ13 周溝 A–A' アゼ
土層断面〔南より〕

SZ13 周溝 B–B' アゼ
土層断面〔東より〕

方形周溝墓（SZ14）完掘状況〔南東より〕

SZ14 周溝 B' アゼ土層断面〔南西より〕

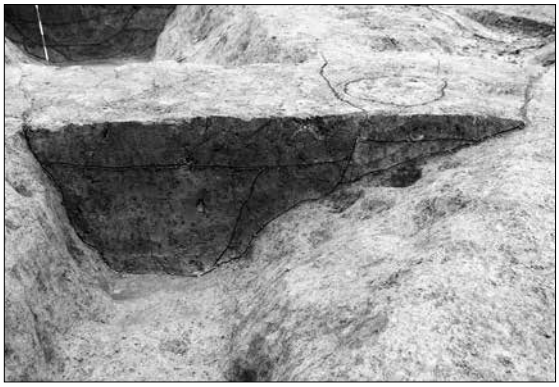
SZ14 周溝 A アゼ土層断面〔南東より〕

SZ14 周溝 B アゼ土層断面〔南西より〕

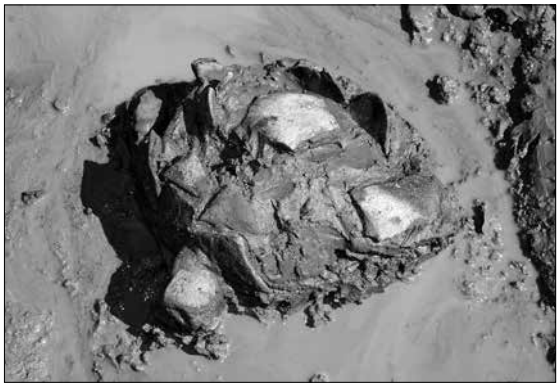
SZ14 周溝 A' アゼ土層断面〔南東より〕

方形周溝墓（SZ15）完掘状況〔東より〕

SZ15 周溝 B–B' アゼ土層断面〔南西より〕



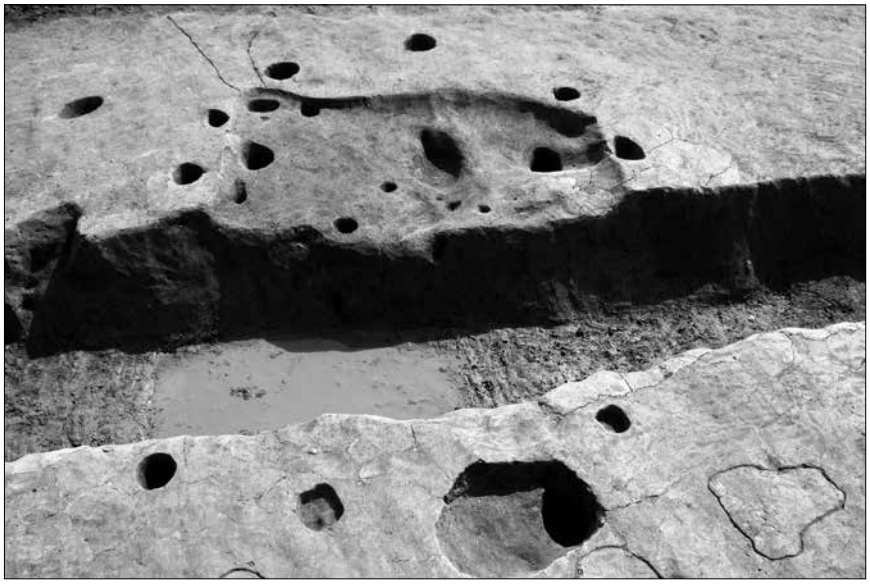
SZ15 周溝 C–C' アゼ土層断面〔西より〕



SZ15 周溝遺物（16）出土状況〔西より〕

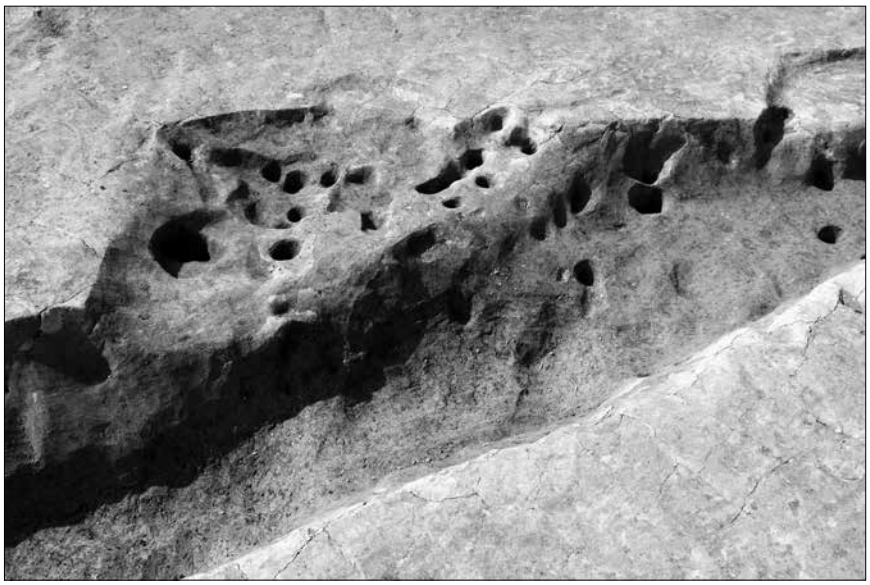
SZ15 周溝遺物（16）出土状況〔西より〕

図版二五



土杭（SX180）
完掘状況〔北西より〕

SX180C–C' アゼ
土層断面〔南西より〕



溝（SD202）
完掘状況〔東より〕

溝（SD16・SD17・SX230・SX232）完掘状況〔南東より〕

溝（SD246）完掘状況〔東より〕

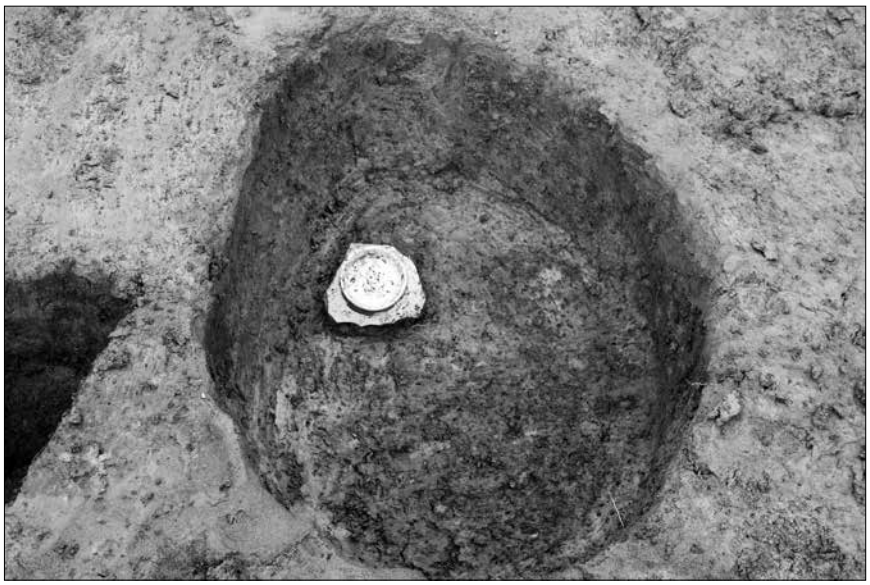
溝（SD89）完掘状況〔東より〕

SD317 遺物（19・20）出土状況〔北西より〕

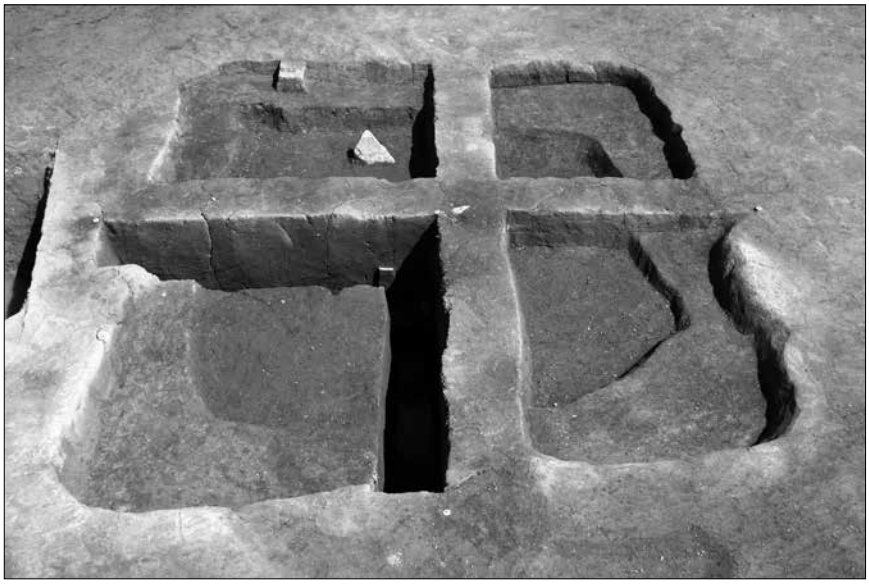
掘立柱建物（SB1・SB2）完掘状況〔北東より〕

柵（SA1）
完掘状況〔南東より〕

柵（SA2）
完掘状況〔南東より〕



SP164
遺物（23）出土状況
〔北より〕



井戸（SE61）
検出状況〔南より〕

井戸（SE61）
土層断面〔東より〕

SE61
遺物（35）出土状況
〔北東より〕

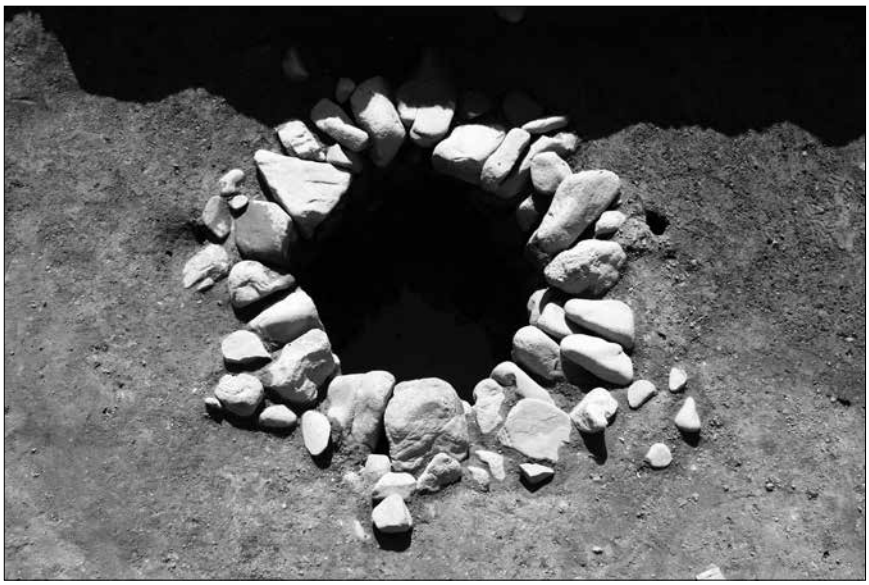
SE61
遺物（27）出土状況
〔南西より〕

井戸（SE61）
完掘状況〔北より〕

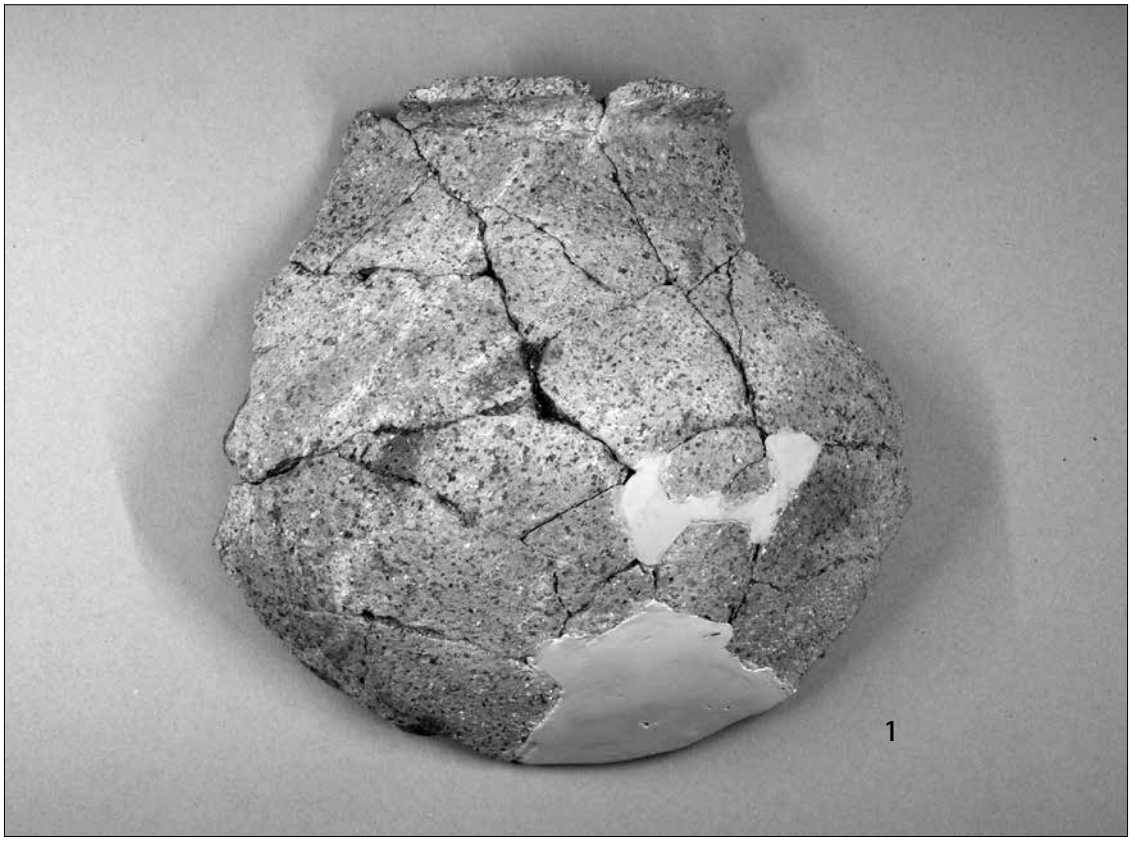
井戸（SE61）
掘り方完掘状況〔西より〕

井戸（SE84）
検出状況〔北より〕

井戸（SE84）
完掘状況〔北より〕

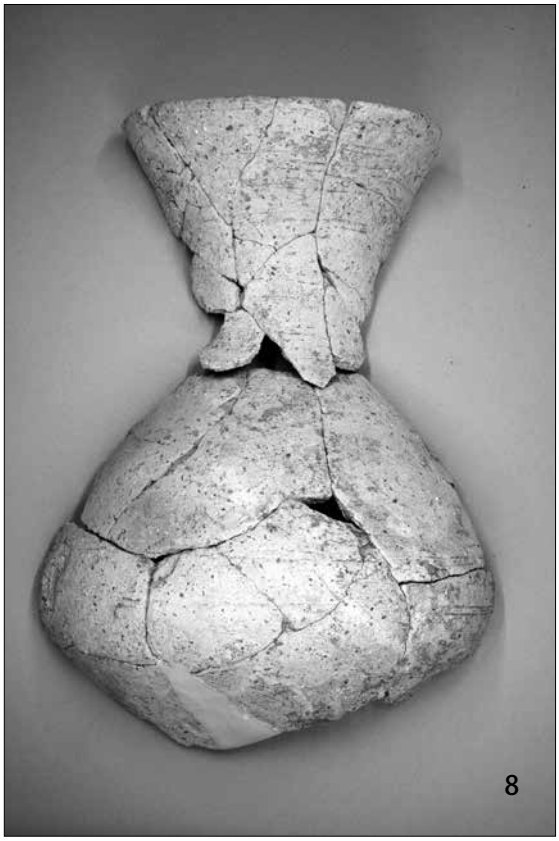


井戸（SE84）
完掘状況〔北より〕

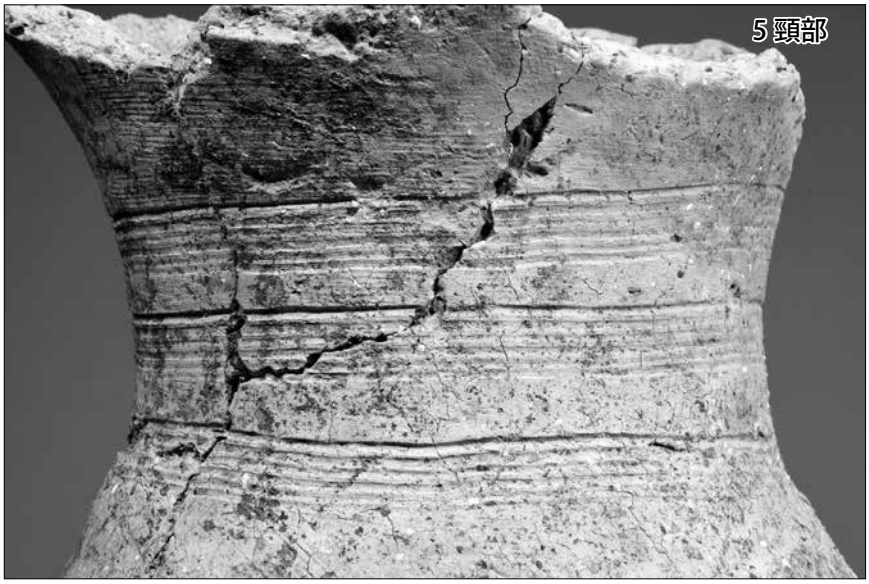


SZ1 周溝出土遺物

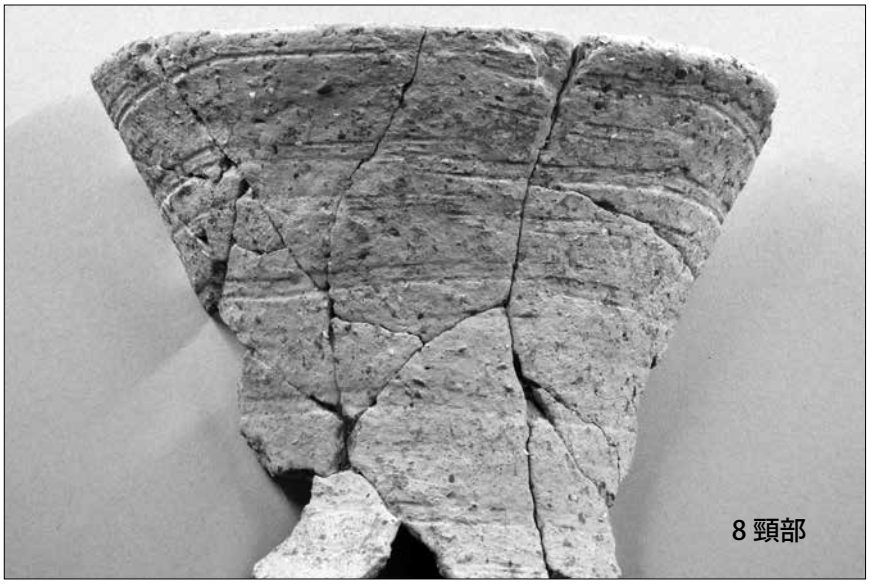
SZ7 周溝出土遺物



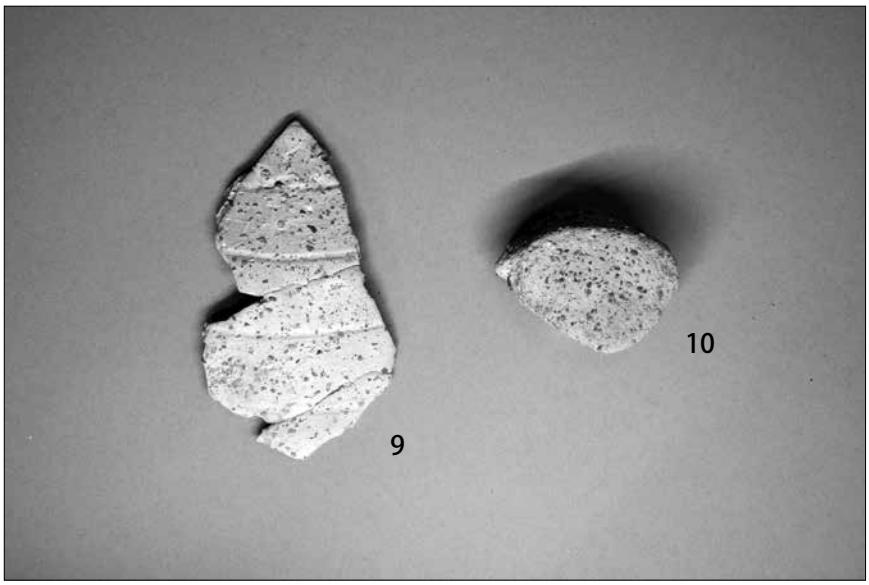
SZ8 周溝出土遺物



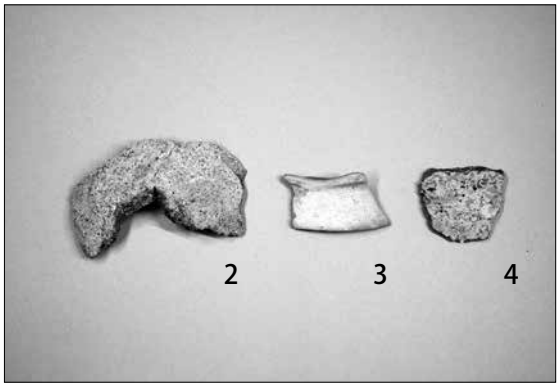
5 頸部櫛描紋



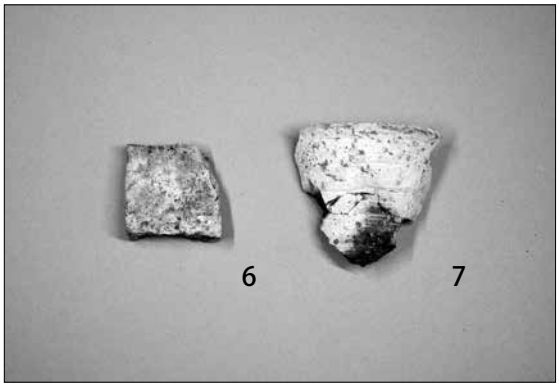
8 頸部複合櫛描紋



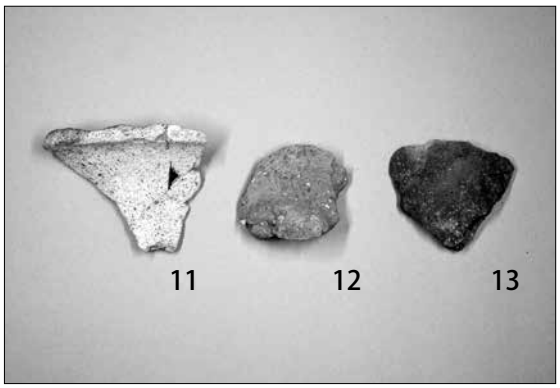
SZ10 周溝出土遺物



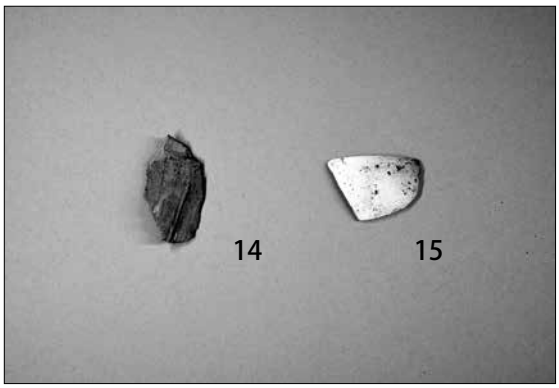
SZ1：2・3、SZ2：4 出土遺物



SZ7・SZ8 共有周溝：6、SZ8：7 出土遺物

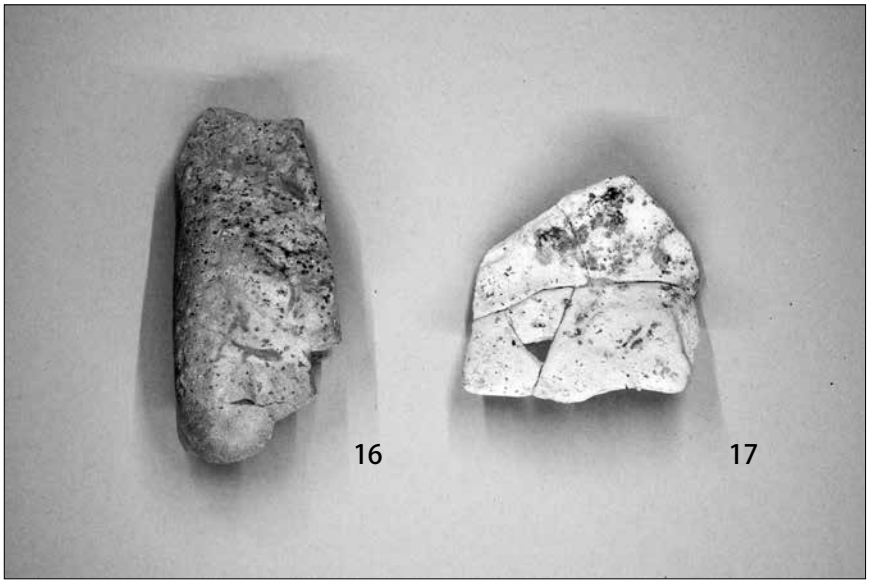


SZ13 周溝出土遺物



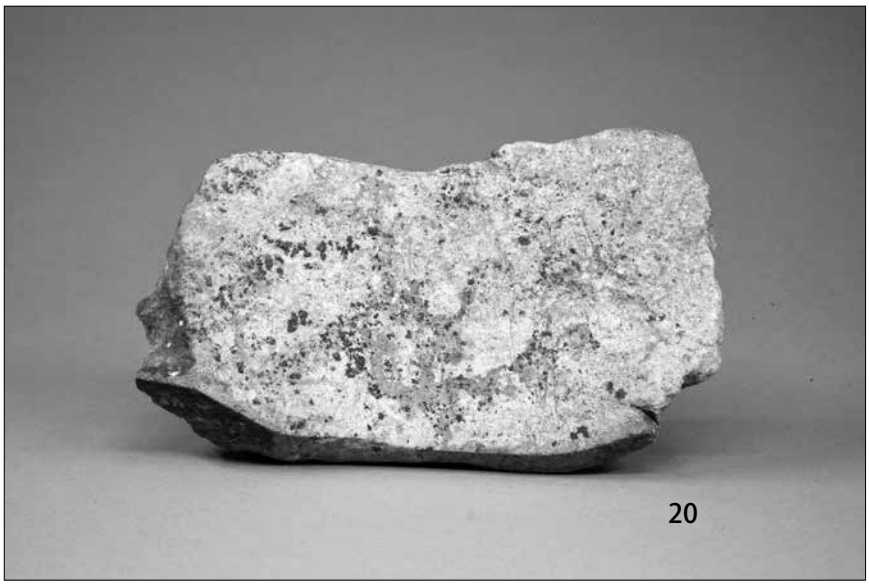
SZ14 周溝出土遺物

SZ15 周溝出土遺物

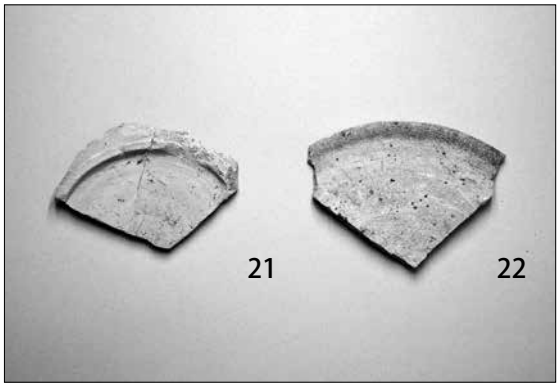


SZ15 周溝出土遺物

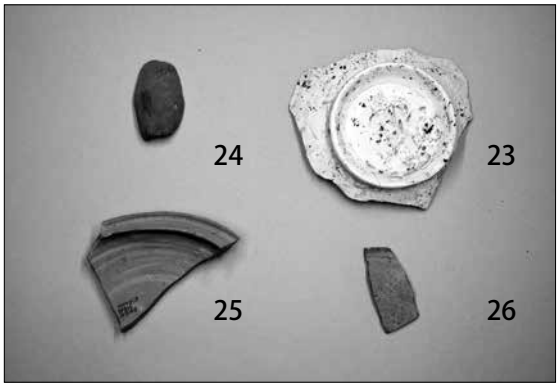
SD317 出土遺物



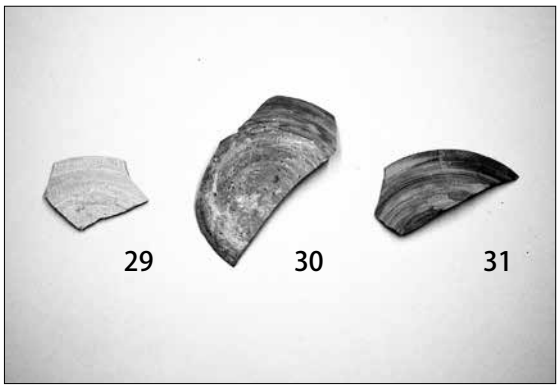
SD317 出土遺物



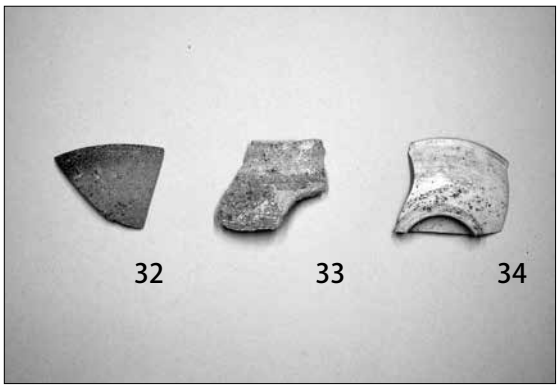
SP56：21、SP65：22 出土遺物



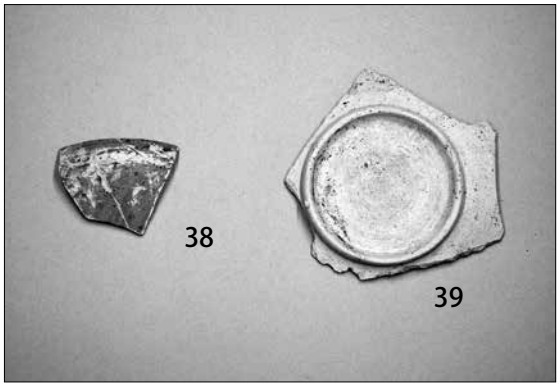
SP164:23、SP165:24、SP345:25、SX262:26出土遺物



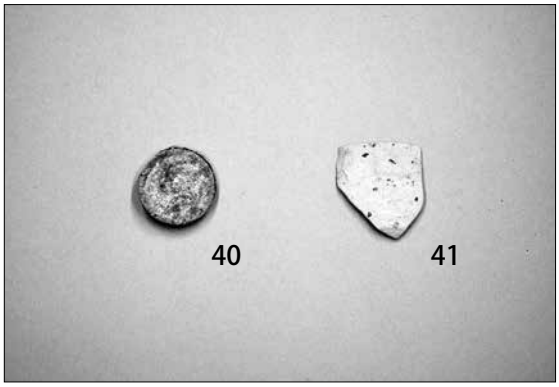
SE61−1 層出土遺物



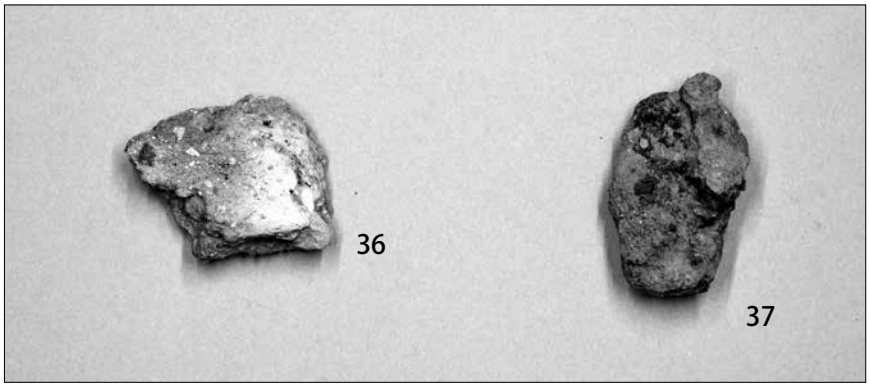
SE61−1 層出土遺物



SE61−6 層出土遺物



SE61−9 層出土遺物



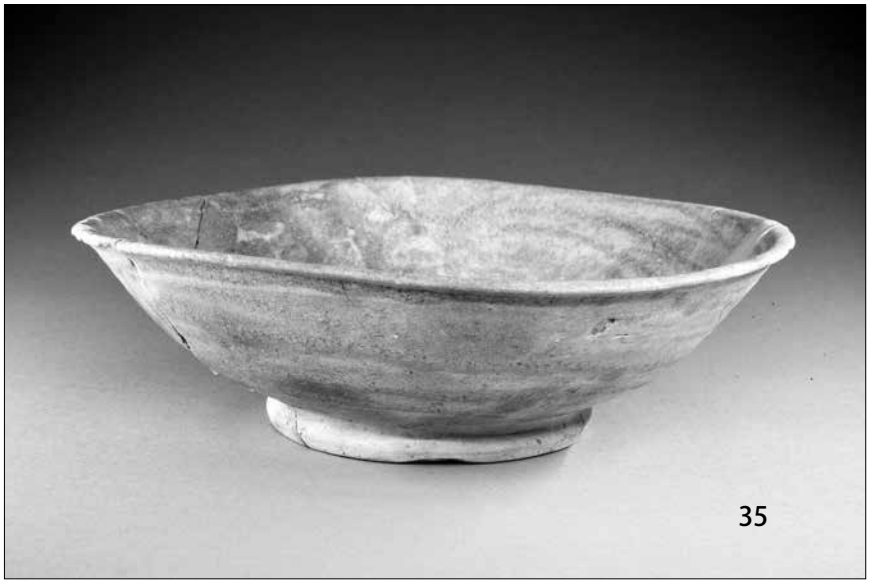
SE61−1 層出土遺物

SE61 ー 1 層出土遺物

SE61−1 層出土遺物

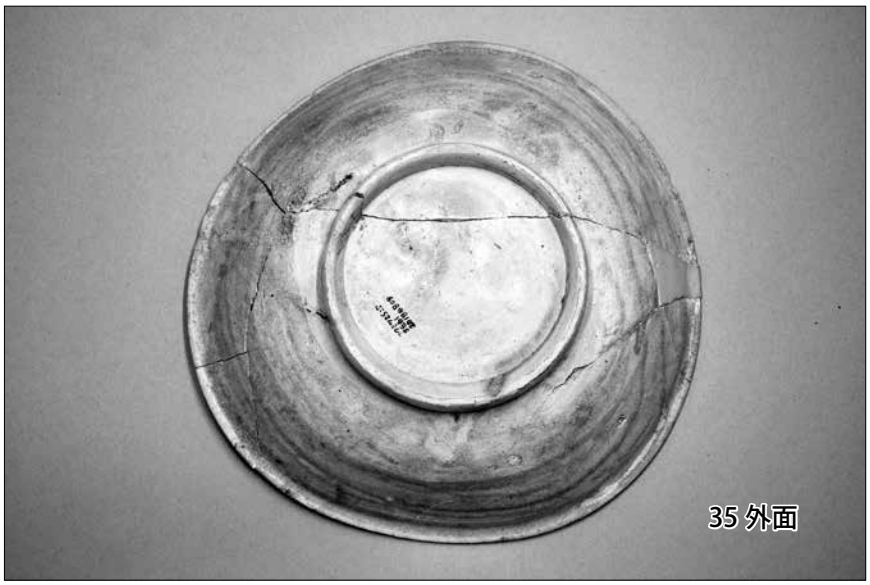
SE61−1 層出土遺物

SE61−1 層出土遺物



SE61−1 層出土遺物

SE61−1 層出土遺物



SE61−1 層出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふくみついせきだい25じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	福満遺跡第25次発掘調査報告書
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	82
編著者名	林 昭男
編集機関	彦根市教育委員会 文化財部 文化財課
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号　℡0749-26-5833
発行年月日	20200331

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
福満（ふくみつ）遺跡	彦根（ひこね）市 西今町（にしいまちょう） 地先	25202	015	35度 14分 49秒	136度 14分 34秒	1,957㎡	20180507 ～ 20181031	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福満遺跡	墓域	弥生時代	方形周溝墓・土坑・溝	弥生土器・石器	犬上川右岸における弥生時代中期の墓域（方形周溝墓群）
	集落	奈良時代～平安時代前期	掘立柱建物柵・井戸・土坑・小穴・溝・井戸	土師器・須恵器・灰釉陶器・石製品・鋳造関連遺物	犬上川右岸における奈良時代～平安時代前期にかけての集落
	耕作地	近世			

彦根市埋蔵文化財調査報告第 82 集

福満遺跡第 25 次発掘調査報告書

－宅地造成工事に伴う発掘調査－

令和元年（2020 年）3 月発行

編集・発行：彦根市
市長直轄組織文化財課
彦根市尾末町 1 番 38 号
TEL 0749-26-5833
印刷・製本：近江印刷株式会社

FUKUMITSU　SITE

2020